
東方増減記

例のアレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方増減記

【Nコード】

N3513L

【作者名】

例のアレ

【あらすじ】

ある日、彼は気付くと森の中にいた
そして妖怪に襲われ喰われた
眼を覚ますと妖怪になっていた
なったものはしょうがない妖怪として生きていこう
そんな暢気な彼のお話

ある日の森の中で（前書き）

本作は東方projectの二次創作です

後にかんりのキャラ崩壊を起こします

独自設定がてんこ盛りです

原作および原作者には直接の関わりは一切ありません

以上の事を踏まえ、それでも構わないという心の広い方のみお進み
ください

ある日の森の中で

俺はただ歩いていただけなんだ！

それが何故こんなことに！？

何故こんな自然豊かな場所にいるんだ！？

訳が判らない！

誰か説明してくれ！

気付くと俺は森の中にいた

家の近所の本屋に行こうと町の中を歩いていた善なのに

「此処は一体何処なんだ？」

思わず呟いてしまったが当然答えは無い

「おーい！誰かいなかー！」

今度は叫んでみたがやっぱり答えは無い

「どうするか・・・とりあえず人を探そう」

薄暗い森の中を歩いてみる事にした

もしかしたら途中で町が見えるかもしれないし、人に会えるかもしれない

「あゝ疲れた〜」

歩き出してから多分1時間くらい経った

けど、歩いても歩いても見えるのは木ばかりで人なんて影も形も見えない

此処まで来たら進んでも引き返しても同じだろう

段々、心細くなってきた

なにせさつきから人どころか動物や鳥すら見かけない

携帯なんて初めから圏外の文字以外表示してくれない

諦めてこの辺で休もうかと思っていると不意に木が途切れた

「おっ！森を抜けたか？」

そこにはきつと町か何かがあると期待したが、広がっているのは一面の草原だった

「何なんだよ、此処」

地平線さえ見えそうな草原に座り込む

「夢なら覚めてくれ」

・・・がさっ

その時、通ってきた森の方から音がした

「人か！？いや、この際動物でも何でも良い！俺に癒しを！」

しかし、出てきたのは何処からどう見ても人や動物には見えなかった

まず、身体がおかしい

見た目は犬っぽいんだが、普通の犬では有得ない程大きい

3、4メートルはありそうだ

次に、頭がおかしい

別に頭が悪いつて意味じゃない、鳥の頭みたいなのが付いてるんだ
そして、尻尾がおかしい

何？あの先端に付いた棘々は？刺されたら身体に穴が幾つも開きそ
うだ

最後に胴体に付いた翼

翼にこんな感想おかしいかもしれないが、すごく切れ味が良さそうだ

「・・・あはは、お邪魔しました」

後ずさりしながら言ってみる

「グロオオオオオオオオオオオオ！！」

「ぎゃあああああああああああ！！！」

俺は草原に向かって必死に逃げた

「た、助けてくれええええええええええ！！！」

しかし、あっさり追いつかれると頭から美味しく頂かれた

妖怪化

気付いたら山の上に居ました

いや、別に頭がボケた訳じゃないんだよ？

ほんとに気付いたら此処にいたんだ

でも可らしいんだよ、俺は確かに喰われた筈なんだよ

だけど気付いたら、あの時の森や草原が見下ろせる山の上に居て、俺の背中に翼が生えてるんだよ

髪も何だか灰色っぽくなってるし・・・

でも何だか見覚えのある翼でね？

俺の記憶が確かなら、この翼って俺を喰った奴の背中に生えてたのと同じなんだよ

髪と同じ灰色も見覚えあるしさあ・・・

切れ味が良さそうな所も同じだしさあ・・・

それってつまり……融合したとか？

いや、どちらかと言えば乗っ取った？

……とりあえず腹が減ったな

現実逃避しててもしょうがないし、何か食い物でも探そう

腹が減っては戦はできないもんなあ……

俺、飛んでる！飛んでるよ！

山から下りようと歩いていたんだけど足を滑らせて崖から転落したんだ！

落ちた瞬間、全てを諦めようと思ったたら急に頭の中に飛び方が閃いたんだ

本能に任せて翼を羽ばたかせたら見事に空へ舞い上がったんだよ！

しかし、これで確定した

俺はもう人間じゃ無い

多分、俺を喰ったアイツの身体と俺の身体が良い感じに混ぜられて変化したんだと思う

そうじゃなきゃ空なんか飛べる筈は無い

俺は初めての空に文字通り舞い上がっていた

だけど、冷静になって下に広がる大地を見てみると

……何も無い

正確には森や草原や山はある

だけど街や道路や車とか、人工の物が何一つ見当たらない

そんな事が有得るのか？

今のこの国で人工物が空から見えない場所なんて俺は知らない

「もしかして、異世界とか過去に来たとかそんな類の話？」

思わず声に出してしまったが現状に変わりはない

相変わらず人工物は見えないし人なんか見える訳が無い

「どっしりって言うんだよ・・・」

とりあえず、こうしてても始まらない

俺は山に引き返し、その森で何か食い物を探す事にした

「おお！結構実ってるじゃないか！」

森に入って数分間、あっさりと食い物を見つけた

見たことも無い果物だったが、なんとなく食えると分かった

「多分、俺を喰った奴の知識なんだろうなあ」

まあ、あまり気にせず果物にかぶりつく

「甘酸っぱい味だ」

中々に美味い

「来ちまった物はしょうがない、此処で暮らしていくか」

元々の暢気な性格が幸いしてか、元の世界に戻るのを早々に諦めた
きつと何時かどうにかなるさ

1000年後

あれから、あっという間に1000年が経過した

すっかりこの身体にも慣れて、今じゃ巨大な岩も拳ひとつで粉々にできる

姿を人間っぽく変える事もできるようになった

どうやら俺は信じられない程過去にきていたらしい

空から辺りを散策してたら、結構遠くの方に村が見えた

村に入った瞬間、騒ぎになった

翼とか隠すのを忘れていた

矢とか槍が飛んできたから急いで逃げた

完全に元の世界に戻るのを諦めた俺は、とりあえず狩りをしながら日々をダラダラと過ごしていた

その間に自分の中にあつた能力を発見した

その名も”増と減を操る程度の能力”だ

名前の通り、物を増やしたり減らしたりする能力だ

東方ってやつか？

友人が何やら騒いでいたような気がするが、俺は興味が無かったの
で全く知らない

この能力に気付いたおかげで俺の自堕落生活に拍車^{パチマ}が掛かった

まず果物や干し肉を用意する

能力を使う

果物や干し肉が増える

食べる

繰り返し

こんな調子で毎日寝て過ごした

その結果が1000年経過と言っ訳なんだ

老いも無いみたいだし

あれから数百年

一々年数を数えるのが面倒臭くなって数えるのを止めた

人間ってのは色々忘れていく生き物だ

俺も例に漏れず色々忘れていた

元の世界の事とか両親の事とか友人の事とか

そして自分の名前すら忘れていた

これに気付いた時はさすがに焦った

思い出そうと必死になった

元の世界の事とかは臆げながら思い出せたけど、自分の名前だけは
どうしても思い出せない

「……… 忘れた物はしょうがないか」

開始1時間で諦めた

しかし、そうなると代わりの名前が必要になってくる

考える

考える

考える

……飽きた

今まで名前なんて無くても生きてこられた

これからも平気だろう

数十年程経過した

人間の進歩は早い

少し前まで土器なんかを作っていた彼らも今じゃ立派に文明を築いている

村を造り集まり寄り添いながら生きている

俺もたまに山を下りてあちこちをふらふらするようになった

今まで果物をそのままとか焼いたり干したりした肉とかしか食べてなかったが、文明が進むと色々な料理が作られている

いい加減、自分の食生活に飽きがきていた俺としては見過ごす訳にはいかない

近くにある村に行つては山の果物や肉と野菜や塩を交換した

翼を生やしたまま行つたらまた矢が飛んでくるので人間に姿を変えてから行く

能力を使えばわざわざ交換に行かなくても良いのだが、やはり人恋しかったのだと思う

村には結構気さくな性格の人が多く、あっという間に馴染んだ

けど、それが何十年も続くと姿が変わらない俺に不信感を抱く人が増えてきた

この辺は昔は居なかったが最近になって妖怪が出るようになったからだ

当然、姿が変わらない俺も妖怪なんじゃないか？と疑われる

その度に出向く集落を変えてきた

でも、それも限界に近いかなあ

俺は決心した

住み慣れた山を離れて旅にでる事にしたのだ

こんな事もあるつかと用意しておいた一張羅が役に立つ日が来た

村の人達が着ている様な着物のような服に工夫を凝らして改造した物だ

下はズボンで上が浴衣の様な形と丈をした服だ

荷物は殆ど無いから服を着れば準備は完璧だ

さて、まずは何処に行ってみようか

1000年後（後書き）

如何でしたでしょうか？

ご意見ご感想お待ちしております

鬼(前書き)

出来上がったので投稿

ちょっと強引過ぎたかも

鬼

旅に出て数十年が経過した

その間に色々な村に行った

時には現地の人に頼み、家の一室を借り

時には妖怪の住処に泊まった

野宿もした

妖怪とは時に戦い、時に友情を育んだ

今も一匹の鬼の住処を借りている

「何をしてるんだ？」

「ん？いや、ちょっと回想を」

「？変な奴だな」

ちよつと気が荒いけど良い奴だ

「そつだ、お前人間は好きか？」

「ああ、好きだよ。気の良い奴も多いし」

「は？何言つてんだ？」

話の食い違いがあるらしい

「食い物の話だぞ？」

元人間の身としては人間を喰うなんて発想は無かった

「いや、人間は食い物としては見れないよ」

「何！？なら今までどうやって生きてきた！？」

余程衝撃的だったのか声を荒げて訊いて来る

とりあえず、全部を話すと日が暮れる所か数年掛かる

はしよつて話すか

「普通に山に籠って果物とか動物の肉とか食べて生きてきたけど？」

はしより過ぎたか？

しかし、鬼の顔は衝撃に染まっていた

「山に籠っていただと！？人間に関わらずにか！？」

ちよ、顔が近いって

「そりゃあ、まあ。人なんて寄り付けない位に厳しい山だったし」

すると、鬼が有り得ないと言わんばかりの形相になった

「嘘を吐くな！俺達みたいな鬼やお前みたいな妖怪は人間に関わらなければ力がどんどん衰えていくんだぞ！？お前みたいな馬鹿でかい妖力を持った奴が人間に関わらずに生きてきたなんて信じられる訳が無い！」

そんな事言われても、俺が居た山の近くには初め人間どころか妖怪も居なかったし

妖怪も結構最近になって見かける様になったばかりだし

って言うか、俺って妖力なんて持ってたのか、気付かなかった

「お前、何者だ」

ふと鬼を見ると何故か立ち上がり戦闘態勢をとっていた

「まさか、人間じゃないだろうな？」

俺が人間？人間なんて数千年も前に辞めましたよ？

「いや、人間に翼は生えてないだろ」

すると、鬼は考え込む様な仕草をすると構えをといた

「そうだな、冷静に考えると人間が妖力を持っている筈がない」
微妙に話が噛み合わない

「悪かったな、しかしそうなる何故お前は生きているんだ？」
生きててすいません

いや、卑屈になってる場合じゃない

「うーん・・・多分だけど俺の能力が関係してるんじゃないかな？」
思い当たった事を言ってみる

「能力？お前能力なんて持ってたのか？」
床に座り直すと鬼が訊いてくる

「ああ、増と減を操る程度の能力って言うんだけど。多分その能力で力が減らないようにしてるとか、力を増やしてるとか？」

正直、それしか思いつかない

「成程な、便利な能力だ」

どうやら鬼も納得してくれた様だ

「でも何でいきなり人間が好きか何て訊いたんだ？」

大体わかるけど一応訊いてみる

「ああ？そんな物決まってるだろ。人間を喰いに行くから一緒に行くかどうかの確認だ」

やっぱりか、元人間の立場で言えば止めた方が良いかも知れないが、この鬼にとっても死活問題だ。余りとやかく言えない

けど、人間ってどんな味がするんだろう？美味しいのか？……いやいや！何て事を考えているんだ俺は！

身体は妖怪になってしまったけど心は人間のつもりなんだ、人間を喰う訳にはいかない

「まあ、お前は人間を喰わないらしいからな。俺1人で行ってくるぞ」

言っが早いか洞窟を出て行く鬼

それを見送り、俺は寝る事にした

眼が覚めると早朝、朝日が昇り始めた時間だった

周りを見回すと居る筈の鬼がない

初めは何処かに寄り道でもしてるんだろうなんて思っていた

しかし、日が完全に昇りきっても鬼が帰ってくる気配は無かった

さすがに心配になって近くの村まで様子を見に行く事にした

姿を人間に変え旅人を装い村に入る

「何か、家とかがやけにぼろぼろになってるなあ」

壁に大穴が開いた家とか屋根が一部無くなっている家とか

「そいつは昨晚、鬼が来て壊しちまったんだよ」

すぐ後ろから声が聞こえた

「あんだ、旅の人かい？」

何時の間にかすぐ後ろに老人が1人、立っていた

「はい、旅をしている者です。鬼が来たって言うてましたけど・・・
大丈夫だったんですか？」

何食わぬ顔で訊いてみた

「ああ、昔からこの辺りに住み着いていた鬼でな？いい加減、村が滅んじまうってんで退魔師様の方にお願ひして鬼を退治してもらったんだ」

嫌な予感、と言つか確信

「・・・その鬼はどうなっただんですか？」

多分聞きたくない答えが返ってくると分かっているながら訊いてみる

「退魔師の方が見事に退治してくださったよ」

やっぱりか

1週間も一緒にいなかったけど死んだと聞くとかなりの衝撃がある

けど、実は初めてでは無い

何回か似た様な場面に遭遇している

「鬼の首は村の広場に置いてあるから見に行ってみると良い」

そんな言葉を言い残し去っていく老人

見たくないけど、せめて鬼の最後を見ておいてあげたくて広場に向かう

広場には人だかりが出来ていた

皆、口々に

「やっとこの辺りも平和になる」

「いい気味だ！鬼め！」

「さすがは退魔師様だ」

なんて事を言ってる

その人垣の向こうに鬼の首が見える

予想に反して安らかな顔をしている

しばらく鬼の顔を眺める

「お前が灰色の翼を持つ妖怪か？」

全く気配を感じさせないで横に立っている男が1人

「答えろ、お前が灰色の翼を持つ妖怪か？」

さっきと同じ質問をされる

「なんの事ですか？俺は「隠しても無駄だ」え？」

言葉を遮られた

「隠すならまず翼よりも妖力を隠せ」

・・・妖力を感じ取れるって事はこいつが退魔師か

「別に退治しようとは思っていない」

退魔師なのに妖怪を放って置くのか？

「あの鬼の遺言だ『もしかしたら後で俺を探しに灰色の翼を持つ妖怪が来るかも知れない、そいつは人間を襲わないから見逃してやってくれ』だ、そうだ」

あの鬼が俺の為に？会ったばかりなのに？

やっぱり良い奴だったんだな

「それともう一つ『あの住処はお前にやる、好きにしる』これは言伝だな」

まだ、名前も知らないってのに

「さあ、俺の気が変わらない内に行け」

・・・俺も殺されたくはない

できれば鬼を葬ってあげたいけど、この状況じゃ無理だろう

立ち去ろう、多分もうこの村に来る事も無いだろう

俺は元の妖怪の姿に戻り飛び立とうとした

「待て、お前の名前を訊いておこう」

後ろから声を掛けられる

けど、名前なんてとっくの昔に忘れた

「名前は・・・無い」

正直に告げる

「何？お前、名無しか？」

少し驚いた様子だ

「ならば、今から灰刃かいはと名乗れ」

灰刃？どうやら名付けて貰った様だ

特に断る理由も見つからないし、それで良いか

でも、何故に灰刃？

「構わないけど・・・意味は？」

「灰色をした、まるで刃の様な羽毛の翼を持っているからだ」

成程、まあ良いだろう

「わかった、今から灰刃を名乗らせてもらうよ」

言い残し、今度こそ飛び立つ

少し上昇すると後ろから

「妖怪だー！」

「た、退魔師様！退魔師様ー！」

なんて声が聞こえてきたが無視しておこう

鬼の住処の洞窟に着いた

とりあえず、村の人間に姿を見せてきたからには早々に旅を再開しよう

必要な物を纏めて外に出る

洞窟は入り口に大きな岩を置いて隠しておく

もう、来る事はないかもしれないけど、形見に近い物だ。せめて荒らされない様にしておこう

さて、次は何処に行こうか？

スキマ

あの鬼の住処を出発してから多分、十年くらい経ったと思う

俺は今、森の中を歩いている

目の前に奇妙な物が見える

リボンが2つ浮いているんだ

何かの悪戯かと思ひ手を伸ばしてみる

すると、寄り添う様に浮かんでいたリボンが離れて気味の悪い空間が見えた

紫色をして大きな目玉が幾つもちちらを見ている

思わず飛び退る

「こんにちは」

空間から1人の女性が出て来た

手に日傘を持ち紫色の服を着てドアノブカバーのような帽子を被っている

「貴方が最近有名な灰色の翼を持つ妖怪かしら？」

有名？俺は何時、何処で、誰に有名になったんだ？

分からない、訊いてみよう

「確かに俺は灰色の翼を持っているけど・・・有名って何？」

すると女性は意外そうな顔をする

「有名って言うのは、世間によく知られる事よ」

そんな事も知らないのか？って顔をされても・・・それくらい知ってるっての

「いや、言葉の意味じゃなくて。何処で誰に有名なのかって事でね？」

言うと女性はくすくす笑いだした

「冗談よ。私は紫、スキマ妖怪の八雲紫よ。よろしく」

自己紹介される。結局、誰に有名なんだよ

手を伸ばしてくる

握手か？この時代に握手の習慣があるとは知らなかった

手を握り握手をする

瞬間、なんとなく力が抜ける様な感覚に襲われる

隠していた翼と髪の色が出てしまう

「何をした？」

率直に疑問をぶつける

「あら？その妖力をしまってくださいさらない？息が詰まるわ」

知らずに妖力を出してしまっていたらしい、意識して抑える

「それで、何をしたんだ？」

同じ妖怪だし、襲ってくる事は無いと思う

それでも若干警戒する

「境界をいじって貴方の正体を現せただけ」

胡散臭い笑みを浮かべながら話す紫

「境界？」

「そう、私の能力『境界を操る程度の能力』よ」

何だか掴み所の無い奴だ

正直、関わり合いにならない様にした方が良さそうだ

さっさと行こう

「そうか、じゃあ俺は急ぐから」

無理やり切り上げ歩き出そうとした

だが、後ろから妖気を感じた

すぐに、飛び上がるとさっきまで立っていた場所に妖力の弾があたる

「そんなつれない事を言わないで、少し遊びましょう?」

見れば手を突き出している紫の姿

「何を!?!?!? うわっ!」

次々と飛来する妖力の弾

それを辛くも避け続ける

「あら、結構すばしっこいのね」

弾の密度が上がる

これは・・・まずいなあ、逃げ場が無い

しょうがない、こっちも能力を使おう

「あら？」

視界を覆う弾がどんどん”減”っていく

「何をしたの？」

紫が不思議そうに訊いて来る

「俺も能力を使っただけだよ」

弾を減らし続け残り1つにする

俺の能力は幾つかの例外を除いて0にする事はできない

それでも1つになった弾を避けるのは容易い

「厄介な能力ね。何と言う能力なの？」

少しも厄介という顔をしない

相変わらず胡散臭い笑みだ

「増と減を操る程度の能力だ」

正直に教えてみる

「だから、こんな事もできる」

能力を使い紫の妖力に干渉する

「!・・・これは!」

今、紫は感じている筈だ

自分の妖力がどんどん減っていくのを

恐らく、もうしばらくすれば紫の妖力は底をつく

「やめて!私が悪かったわ、謝るから!」

焦った様な声が聞こえたので能力を止める

「ふう・・・名前の割には強力な能力ね。危うく消える所だったわ」

能力のこんな使い方を思いついたのは数年前の事だ

試しにやってみたら出来たので強力な妖怪なんかと戦う時に重宝する

「自業自得だろ?」

別にSという訳では無いので減らせた妖力を”増”やしてやる

「・・・便利な能力ね。これなら実質、妖力切れは起こさないわ」

その通りだ

妖力が減ってきたら能力で増やしてやる

もしくは、初めから減らない様にすれば良い

燃費の面では右に出る者は居ないだろうと思う

「これなら、頼る事が出来そうね」

「頼る？何を頼るんだ？」

「いずれ時がくればわかりますわ。その時はよろしくね」

そう言い残すと紫はスキマに消えていった

「何なんだ？・・・まあ良いか、旅を続けよう」

次の目的地はそうだな・・・平安京でも行ってみるか

竹取の翁

風の向くまま気の向くままに俺は平安京に来ている

最近、厄介な事に何処に行っても金を要求される

少し前までは物々交換なんかが主流だったのに本当に人間は面倒臭い

……俺も元は人間だって事を忘れがちだ

まあいいや

それで金を稼ぐ必要がある訳だが

俺に出来る事と言えば妖怪退治くらいだろうなあ

でも、どうせ人間を苦しめる様な妖怪だ

大人しく俺の飯の種になってもらおう

そんな訳で雑魚妖怪を何匹か倒して金を稼いだ

その時またも新発見があった

なんと霊力が使えたのだ

多分、元から使えたんだと思う

気付かなかっただけで

さすがは元人間だ

妖力と霊力の両方を持つてるとは

人間に姿を変えて霊力を放っておけば俺が妖怪だとはまずバレない

しばらく平安京に住むのも良いかもしれない

平安京に住み始めて結構な時間が経過した

妖怪退治をしている内に退魔師として有名になってしまった

その所為って訳でもないんだけど小さな家を借りた

いつまでも宿に泊まってたら不経済だからだ

ただ、借りてから気付いたが能力で金を増やせばよかった

そうすれば無闇に注目を集める事もなかった

あんな面倒な依頼を受ける事もなかったのになあ

その日俺はいつもの様に自宅で寝ていた

金は能力を使って増やしたのでかなりの余裕がある

だから、しばらくはのんびり過ごすと決めていた

ドンドンドンドン！

家の戸が叩かれた音がした

「うーん、むにゃむにゃもう食べられないよ……」

しかし俺は熟睡していたんだ

否、熟睡していたんだ

ドンドンドンドンー！！

さっきより強く戸が叩かれた

「ん……うるさいなあ」

渋々起き上がると戸に向かう

「どちら様ですか？」

戸を開けるとそこには高貴そうな服を着た老人が立っていた

「退魔師の灰刃さんでよろしいですか？」

仕事の依頼か？面倒だなあ

「確かに灰刃は俺だけど、何の用です？」

もしかしたら回覧板か何かかもしれない

一縷の望みに賭けて訊いてみる

「仕事を依頼したいのですが」

やっぱり仕事か、やだなあ。収入の心配が無くなったからぐうたらしていたのに

「あゝ、どのような内容ですか？」

それでも、怪しまれない様にするには受けない訳にはいかない

名前が売れた辺りでまた旅に出るべきだったか？

「ここでは何なので、私の屋敷にお越しく下さい」

正直、行く気が全く起こらない

二ト？好きに言ってくれ

「さあ、二つちです」

老人の案内で屋敷に行く事になってしまった

「それで、依頼とはどんな内容なんですか？」

屋敷に連れてこられた俺は挨拶もそこそこに本題に入った

「はい、実は私は竹取の翁と呼ばれている者なのですが」

竹取の翁？はて？どこかで聞いた事があるような

「実は娘の護衛をお願いしたいのです」

護衛か、性質の悪い妖怪にでも狙われたのか？

「私の娘は大層美しくてですね？求婚者が沢山いるんですよ」

自慢か？それともその求婚者から守れって事か？

「ですが、娘は求婚を全て断ると私にこう言ったんです」

『私は月に住む民です。次の満月の晩に向かえが来て私は月に帰らなくてはいいけません』

……かぐや姫？実在してたのか

「次の満月まで後1週間、ですので満月の晩まで娘を守ってください
い」

退魔師関係無くな？

相手が妖怪ならわかるけど……もしかして月の民ってのは妖怪なのか？

月に帰るって事はかぐや姫も妖怪!?

「え〜と・・・月の民は妖怪なんですか?今の話を聞く限り退魔師はお呼びでない気がするんですが」

多分、正論な気がする

「いえ、娘も月の民だと言うので恐らく人に近いのではと思うのですが・・・」

ますます退魔師を呼ぶ意味がわからない

「ですが、灰刃さんは素手で妖怪を退治されたと聞き及んでおります。きつと月の民を追い返せるでしょう」

やるんじゃ無かった・・・まさかこんな事になるなんて

しかも、追い返せるでしょうって・・・何?その無駄に高い信頼は?初対面だよ?もつと頼れる人がいるでしょう?

「それでは、何卒お願いします」

あれ?何時の間にやるって事に決まったの?

俺何も言っていないよ?

「いや、俺は「さあさあ、娘の所に案内します」ちよ!」

爺さんに引つ張られて強制連行される俺

あゝ、面倒な事になった

輝夜（前書き）

こんな感じだったんじゃないかなあ
なんて思いながら書きました
キヤラ崩壊と自己解釈注意です

輝夜

「輝夜、輝夜は居るかい？」

何だか無理矢理に護衛を引き受けさせられた俺、参上！

爺さんに引きずられて屋敷の奥へ

爺と手を繋ぐ趣味は無いんだけどなあ

「お爺さん、私はここにいます」

廊下の奥の部屋から声が聞こえた

「おお、輝夜入っても良いかい？」

いや、あんた自分で既に障子開けてるじゃん

障子を開けながら入室許可を求めるって……これが面接なら1発

アウトだぞ？

「輝夜、この方がお前の護衛を引き受けてくださった」

「はい、よろしくお願いします」

こちらに向かい礼をしてくる

中々に美少女だ

「では、今からお願いします」

言い残し去っていく翁

何だか美少女と2人つきりは落ち着かない

この身体になって何千年と経つけど、女性に免疫が無いのは変わらない

「ふう、やっと行ったわね」

あれ、さっきと声色が違う

「貴方も災難ね？どうせお爺さんに無理矢理連れてこられたんでしょうっ？」

猫を被るって奴か？

「どうせ、月人には敵わない。諦めた方が身の為よ」

説得してるのか、脅しているのか分からんな

「私の罪を許すなんて言ってるけど、穢れを生む私を月人が許す訳が無いわ。どうせ実験材料にでもするつもりなんでしょう」

うん、話が全然見えてこない

説得する気ならせめて分かる様に言って欲しい

「だから、さつさと帰」あのさあ「え？」

このままじゃ、どんどん卑屈になって行く

言って聞かせよう

「さつきから穢れだとか実験材料だとか詳しい事情は知らんけど、お前は帰りたいのか帰りたくないのかどっちだ」

すると輝夜はうつむいて

「帰りたい訳無いじゃない」

などと言う

ならば俺のやることも決まった

「それなら守ってやるから、そんな顔するな」

輝夜は少し泣きそうになっていた

「ふん！言っじゃない、私より遙かに年下のくせに」

輝夜が何歳なのかは知らないが、やるだけやってみよう

あっという間に1週間が経過した

その間、輝夜の傍で護衛任務をしていた

護衛と言っても単に話していただけなんだけどな

数日前に輝夜が誰かと話しているような独り言を言っていた様な気がするが・・・まあ、俺には関係無いだろう

「ついに今夜ですな」

翁が話し掛けてくる

「ああ、さて鬼が出るか蛇がでるか楽しみだ」

屋敷の中は今、帝が送ってきた兵でいっぱいだ

もしかしたら帝はロリコンなのかもしれない

・・・これも俺には関係無いな

「楽しみ・・・ですか？」

翁は心配そうだが、俺には数千年の人生・・・否、妖生の中の1日に過ぎない

もし、これで俺が死んだとしても多分未練は無い

まあ、やるからには全力で挑むけど

そうこうしてる間に輝夜の迎えが来たようだ

月に被るようにして金色に光る・・・宇宙船？みたいな物が降りてくる

その宇宙船？はどんどん高度を下げてまっすぐに屋敷に向かってくる

・・・ん？今少し揺らいだ様に見えたな、何かあったのか？

庭の少し上に滞空する宇宙船？の光に当たった瞬間、少し気が遠くなっただ

何だ？兵がまるでドミノみたいに倒れていく

横の翁は平気そうなのに

「姫様！」

宇宙船？の中から赤と青の2色の服を着た女性が出てきた
すると後ろの障子が開き中から輝夜が飛び出してきた

「永琳！」

抱き合う2人

あー、感動の再開かよよかったねよ2人とも

つて、違う！

帰りたく無いんじゃないのか？

「おい輝夜、お前「灰刃、良いの永琳は味方だから」・・・は？」

味方？つまりは輝夜を迎えにきた奴が月人で味方で・・・えーと・・・
よし！まるで判らん！

ここは成り行きに任せよう！

「お爺さん、お世話になりました。私は行きます」

帰ります、じゃなくて行きますか

どうやら大丈夫そうだ

「おお、輝夜。行かないでくれ」

横の翁が涙を流しながら必死に止めようとしている

その翁に輝夜が何やら渡しているが・・・面倒臭いし、動けないフリでもしておくか

「さようなら、お爺さん。さようなら、灰刃」

宇宙船？に乗り込むと輝夜は飛び去ってしまった。明らかに月とは違う方向に

・・・まあ、長い妖生だ。また、逢う事もあるだろう

今は黙って見送ろう

輝夜が行ってしまってから数日

翁に何故守ってくれなかったのかと訊かれたが意識を失わない様にするのが精一杯だったと答えた

輝夜が最後に渡していた物は不死になれる薬だそうだ

しかし、誰も飲もうとする者がいない為に一番高い山の上で燃やす様に帝が誰かに指示をだしたそうだ

それをとってその山を不死の山と名付けるなんて事も言ってた

俺の記憶が確かなら、その山が後の富士山の筈だ

そんな事はどうでも良い

最近、この辺も騒がしくなってきた

ぬえとか言う妖怪が出るとかなんとか

また、退治の依頼が来たら面倒だ

早々にまた旅に出るか

妹紅（前書き）

キャラ崩壊注意です

妹紅

季節はもう春

旅に出ようと思ったが近所に住む人から

「西行寺家の庭の桜が見事だ」

何て話を聞かされた

どうせすぐに旅に出るし、話の種にでも見ておくか

と、思ったら門番に追い返された

桜を見るくらいでケチケチしやがって

どん！

「きゃっ！」

ぶつぶつ言いながら街の中を歩いていると何かにぶつかった

いや、何かじゃなくて誰か

可愛らしい悲鳴も一緒に聞こえた気がする

けど、前には誰も居ない

超常現象か？

「あの、すみませんでした」

下の方から声がした

下を見ると成程、見えない筈だ

身長の低い女の子が鼻を押さえながら涙目でこちらを見上げている

俺も結構背がでかいから尚更見えにくかった

「ああ、いやすまない。俺が考え事をしながら歩いていたのがいけなかったな」

ん？何だか周りから視線を感じる

俺は別に変な所は無いやな？

もしかして、この少女のせいかな？

確かに白い髪に赤い眼をしていて目立つけど・・・そこまで見るものでもないだろ？

・・・そうか、妖怪基準での考えと人間基準の考えは違うのか

すっかり失念していた

「あの・・・私を見ても怖がらないんですか？」

なにこれかわいい

涙目の大きな瞳で首を傾げつつ訊かれる

思わずお持ち帰りしたくなる

「怖がる？何で？すごく可愛いのに」

あれ？何で泣くの？思わずロリコンみたいな事言ったから？

思ってる間にも少女の目から涙が止めどなく流れていく

「え、何？何か気に障る事言った？」

「まずい、このままでは少女を泣かせた鬼畜野郎の称号が！」

「いえ、違っています。この姿になってからそんな事言われたのなんて初めてで……」

「……詳しく事情を聞く必要がありそうだ」

訊く所によると彼女はの名前は藤原妹紅

輝夜に求婚した内の1人の娘で

父親が輝夜に恥をかかされた為、仕返しのため不死の薬を盗み飲んでしまった

その所為で髪は白くなり眼が赤くなった

それを見た親兄弟は彼女を化け物と呼び、家を追い出されてしまった
途方に暮れながら歩いていた所で俺にぶつかった

「で、あつてる?」

茶屋に入り横でお茶を飲んでる妹紅に訊く

「はい、あつてます」

話している内に思い出してしまったのか、涙目で答える

成程、苦勞したんだなあ

「ならば、俺と行くか?」

聞いている内にほっとけなくなって提案してみる

「え!でも、そんな・・・きつとご迷惑です」

あらら、つつむいちゃった

「迷惑な訳無いだろ?俺から誘ってるのに」

「でも、私こんな見た目ですし・・・」

相当酷い事を言われたんだろう

これは意地でも連れて行こう

「見た目に関しては俺も人の事言えないから、大丈夫」

妹紅は顔を上げるとこちらを見てくる

「貴方は普通に見えますよ？」

当然だ、この場で本当の姿を現したら大騒ぎになる

「今は姿を変えてるんだ……本当は俺、妖怪なんだよ」

最後の所は小声でおしえてやる

「え！？ようか、むぐ！」

慌てて口をふさぐ

危なかった、だから小声で言ったのに

「こんな所で大声で言うなよ？まあ、気持ちはわかるけど」

ふさいだ手を戻しながら言う

「ぶはっ！嘘……ですよね？」

首を傾げながら小声で訊いて来る

何か、一々仕草が可愛いなあ！もう！

「本当だよ。因みに人は襲わないし喰わない」

それを聞いて少し安心したようだ

・・・疑うって事を知らないのか？

「でも・・・やっぱりご迷惑が・・・」

中々YESって言わない

そうだ！鬼じゃないけど攫っていいこう！

「じゃあ、妖怪らしくいいこう」

そのまま妹紅を持ち上げ抱える、所謂お姫様抱っこだ

「え？きゃっ！」

実は既に旅立つ準備は出来ている、後は出発するだけ

妹紅を抱えたまま街の出入り口に向かう

「あ、あの、離してください」

とりあえず無視

周りの視線も痛いけどそれも無視

歩き続けて街を出る

ある程度、街から離れた所で妖怪の姿に戻る

「いやー、大変だねえ。君は妖怪に攫われちゃったよ」

「え？え？」

かなり混乱しているみたいだ

よし、ここで止めを刺してあげよう

俺は翼を広げて飛び上がる

「あ、きゃー！ー！」

美少女は悲鳴も可愛いなあ

あれ？俺って今、かなり変態っぽい？これはマズい

俺は変態じゃないよ、仮に変態だったとしても変態という名の紳士だよ

いや、そんな事言ってる場合じゃない

妹紅を安心させてあげなきゃいけないな

「大丈夫だから、眼を開けてごらん？」

腕の中で震えている妹紅に出来る限り優しい声で言ってみる

妹紅は恐る恐る眼をあける

「・・・わぁ」

初めての空に感動している様子だ

俺も初めて空を飛んだ時は感動したもんだ。よく覚えてないけど

「どうだ？空の上は？」

「すごいです！本当に妖怪だったんですね！」

気に入ってもらった様でなによりだ

・・・勢いで連れてきちゃったけど、これからどうしよう

女の子に野宿はキツイかもしれないし

「で、これから一緒に旅をする訳だけでも」

一応、訊いて見よう

「野宿とか平気だったりする？」

「平気です！一緒に連れて行ってください！」

あれ？なんか素直になってる

まあいいか

「当たり前だろ？さーてどこに行こうか？」

行くべき場所なんか無い、当ても無い

だからこそ行きたい場所に自由に行ける

妹紅を攫ってから数日

俺達は平安京から遠く離れた村にいる

途中まで飛んできたからすぐに着いた

しかし、野生？の妖怪ってのは節操が無い

確かに俺も霊力を出してたから妖怪と気付かないかもしれない

けど、妹紅を狙うのは許せない

隙を見ては妹紅を攫おうとしてくる

偶に俺も攫おうとしてくる

美少女は人類の宝だと言う言葉を聞いた事が無いのか!?

いや妖怪は人類じゃ無いけどね

その度に追い払っただけど次から次へと襲ってくる

さすがに面倒になって途中から妖力を出してこの娘は俺のだ、何て主張をしながら歩いた

それでも、横取りしようとして襲ってくる妖怪は居る

もしかしたら夜に歩いていたのが原因か?

・・・あれ?そう考えると全面的に俺が悪いの?

すみません、反省します

ただ、野宿の最中に来たのは俺の所為じゃ無い筈だ

そんなこんなで村に到着した訳だ

その村は少し大きめの村で宿があった

小さな村だと当たり前だが宿なんか無い

まだまだ金に余裕があったので宿に泊まる事にした

部屋に案内されて一息ついていると

「戦い方を教えてください！」

なんて事を言われた

「良いけど・・・何で？」

「灰刃さんの足手まといになりたくないんです！」

何だろう？長く生きてきて始めてときめいた

はっ！まさかこれが恋？

・・・そんな訳無いつて

精々、孫に懐かれた祖父くらいの気持ちだな

「教えるのは良いけど・・・俺、誰かに何かを教えた経験なんて無いからなあ」

さて、どうしたものか

見た感じ霊力なんて欠片も感じないし

あれ？何か妖力を感じる

ほんの少し、雀の涙程も無いけど

「妹紅、もしかして先祖に妖怪とか居た？」

人間が妖力を持つてる理由なんてこれしか考えられない

「え？いえ、聞いた事ないです」

だとすると、藤原家の人が忘れるくらい昔の話か単に妹紅が教えられていないか

多分、前者だな。そうじゃなきゃ髪と眼の色が変わったくらいで家を追い出したりしないと思う

けど、これは好都合だ

俺の能力で妹紅の妖力を増やしてやれば妖術が使える様になる

「妹紅、お前の中に妖力がある。俺の能力を使えば妖力を増やして妖術が使える様になるけど、どうする？」

「妖力・・・ですか？私って妖怪だったんですか？それとも不死の薬を飲んだから・・・」

「いや、多分だけど妹紅の遠い祖先に妖怪がいたんだろう」

憶測だけど、不死の薬は身体の構造までは変えないと思う

髪と眼の色を変える程度だろう

と言うより色素が無くなったんだと思う

不死になった事で免疫力なんかの抵抗が意味を無くした故の変化なのだろう

構造自体を変えるなら色素くらい保持されてても良い筈だ

霊力なんかの量が変わらないのも証拠の一つになると思う

専門的な事なんか何一つ分からないけど

「そうなんですか、でもそれって灰刃さんとお揃いって事ですよね？」

確かに俺も妖力を持つてるからお揃いなんだろうけど・・・何でそんなに嬉しそうなんだ？

「まあ、お揃いと言えばお揃いだな」

「なら、私妖力が良いです！」

本人が良いって言うなら良いか

「じゃあ、増やすぞ？」

能力を使い妹紅の妖力を増やしてやる

「わあ・・・これが妖力ですか」

もう、自分の妖力の存在に気付けるのか。力は無いけど才能はあったって事が

「ああ、でも今の状態は単に増やしたただけだ。今度は自分で使った分を回復できるようにしなきゃな」

「はい！」

「それと、別に敬語じゃなくても良いんだぞ？自然に話せ。後、名前は呼び捨てで良い」

「あ……うん！」

しばらくは妹紅の修行だな

花の妖怪

早いもので妹紅が修行を始めてから3年が経つ

俺達は旅を続け、村に寄りながら気ままに歩き続けた

妹紅の妖術も大分使える様になった

妖力を隠す事も出来る様になった

「灰刃、村はまだ遠いのか？」

ただ、口調が変わった

初めはグレたのかと思っただが、妹紅曰く

「この口調の方が舐められない」

らしい、俺になのか妖怪になのかは怖くて訊けなかった

「ああ、あの山を越えればすぐだ」

「そうか、ならさつさと越えちまおう」

「……昔の可愛かった妹紅は何処へ

まあ、山を越える度に休んでいた頃に比べれば頼もしくなっただと思
う事にしよう

でも何かこの辺りに見覚えがある様な気がする

「なあ、灰刃。何か良い香りがしないか？」

山の中腹辺りで妹紅が言う

確かに良い香りがするなあ

「これは……花の香りか？」

何の花かは分からないけど

「行ってみたいな」

妹紅も女の子だな。顔が少し嬉しそうだ

「じゃあ、少し寄り道だな」

生い茂る草を掻き分けて進んでいく

すると、すぐに広い空間に出た

そこには一面に色々な花が咲き乱れていた

「おお、これはまた・・・綺麗なもんだな」

金木犀や水仙や向日葵もある

・・・向日葵？向日葵は確か夏に咲く筈。今は秋だ

「妹紅、此処は何だか可笑的い。早く行こう」

花を見ながら感動している妹紅を促す

「可笑的い？それって「あら、失礼ね。私の花畑の何処が可笑的いの？」誰だ！」

声のした方を見ると、何時の間にか1人の女性が立っていた

日傘を差し赤いチェック柄の服を着た緑髪の女性だ

「私は風見 幽香。こんな所で何をしているの？」

間違い無い、妖怪だ。しかも大妖怪だ

馬鹿みたいな妖力撒き散らしやがって

これはちよつと妹紅には荷が重いか

幽香の妖力に当てられたのかさつきから震えてるし

「何って、良い香りがしたんでね。ちよつとした寄り道だよ」

いざとなつたら能力を使って逃げよう

「そう。それよりその娘はどうしたの？辛そうだけど」

「多分、持病が出たんだよ。さつさと山を下りないとね」

妹紅を抱きかかえ立ち去ろうとする

「嘘ね。私の妖力を感じ取ったのでしょう？つまり力のある人間って事ね」

「嫌々、只のしがたい旅人だよ。それじゃあ急ぐから」

急いで此処を離れよう

勝てない事も無いと思うけど妹紅が危険だ

「あら？そんな事言わずにゆっくりしていきなさい」

言った瞬間、幽香の姿が消えた

右側面に強烈な気配を感じる

咄嗟に能力を発動し衝撃とダメージを減らす

わき腹に子供に殴られた程度の衝撃を感じた

「こっちの体制が整う前に殴りかかるなんて行儀がなってないな」

「?・・・何をしたの?」

自分の日傘を見ながら妙な手ごたえの原因を訊いて来る

「どんな攻撃も俺に届く前に威力が減少する」

「・・・可笑しな能力を持っている様ね。でも、これならどう?」

幽香が日傘をかざすと先端に莫大な妖力が集りだす

「マスタースパーク!」

極太のレーザーみたいな光がまっすぐこちらに向かってくる

慌てて能力を使う

やばい、距離が近すぎる。減らしきれない

仕方ない、妖力で障壁を張ろう

バリバリバリバリッ!!!!

障壁とレーザー？がぶつかり凄まじい音をたてる

妹紅を守りながらの相手はちょっときびしいな

これは、逃げるが勝ちだな。幸い土煙も大分あがっている

今の内に紛れて逃げ出そう

後ろに向かつて全速全身だ

「何処に行くの？」

あー・・・何で後ろにいらっしやるので？

「人間のくせに妖力を使うなんて生意気ね」

人間？あ、姿が人間のままだ

妖怪の姿に戻つたら見逃してもらえるかな？

・・・無理そうだ。幽香の妖力の高まりが半端無い、臨戦態勢
つて奴だ

やっぱり何とかして逃げよう

「逃がすと思う？」

お見通しか

「逃げるさ」

虚勢でも張って強がっておこう

「私についてこれる程の強さを持った人間なんて初めてよ。楽しませてね」

遊び感覚で戦うなんて真似できないなあ

こうなったら最後の手段だ

妹紅を小脇に抱えなおし手を前方に向け妖力を集中させる

集中させながらも能力を使って増やす

巨大な球状になった妖力を幽香に向ける

「な、何！？その巨大な妖力は！？」

「出来れば撃ちたくないんだが・・・逃がしてくれない？」

多分、これを撃てば幽香どころか山も吹き飛ば

「分かった、分かったわ！私の負けよ！」

それを聞いて安心した。妖力を散らし減らしていく

「よかった、それじゃあ俺は行くから」

とんだ寄り道になっちまったよ

さて、さつさと山を越えよう

「あんなに強い人は始めてみたわ……いつか越えてみせる、
待ってなさい」

「さて、何とか逃げれたな妹紅？……妹紅？」

気絶しちゃってるよ

仕方ないか、寝かせておこう

ハクタクと

「やっぱり、私はまだ弱いな」

妹紅を抱えたまま山を越えて村の近くまで来た

妹紅はついさっき目を覚ましたばかりだ

あっさり気絶したのが情けないらしい

「妹紅ならすぐに強くなれるさ。余り焦らないほうが良い」

これは間違いない。妹紅には才能があるらしいからな

「気休めでも嬉しいよ、ありがとう」

「別に気休めでもお世辞でもないさ」

「でも、まだ弱い。術だって火を出す程度だし」

って、あれ？何で妹紅の方を向いてるの？

もしもーし、妖怪はこっちですよー

「こんな明るい内から人を襲うなんて……恥を知れ！」

あー、妹紅が手から火を出してたから勘違いしてるんだ

「その女の人の、そいつは「私が来たからにはもう安心だ、さがっている」いや、だからそいつは「妖怪め、おとなしく住処に帰るならよし、さもなければ退治する」ねえ、聞いて」

聞く耳持たないとはこの事が

「私は妖怪じゃない、人間だ」

「そんなに強い妖力を出している人間が何処に居る！嘘を吐くならもっとマシな嘘を吐け！」

妖力を感じ取れる種類の人か、ますます誤解が深まっていくなあ

よく見れば霊力も放っているし、このままいけば妹紅が退治されてしまう

ここは俺も妖力を放って注意をこっちに向けるか

「！……貴様も妖怪だったのか！成程、まんまと罠にはまったと言いつか……良いだろう、まとめて相手になってやる！」

「とりあえず落ち着いてくれ、俺は確かに妖怪だけど妹紅は真正銘の人間なんだよ」

「この期に及んでまだそんな事を言うか。人間が妖力を持っている筈が無い！」

あー面倒臭くなってきた

「それには事情があつてね？」

「灰刃、そんなのに何言つても無駄だ。一度痛い目に遭えばおとなしくなるだろ」

いつから妹紅はそんなに好戦的になつちやつたんだ

「面白い、やってみろ」

売り言葉に買い言葉、2人共やる気満々だね

もう良いや、ほっとこう

ずずうー

「ふうお茶が美味しい」

向こうの方で妹紅と女性が戦っているのを見ながらお茶を飲む

霊力と妖力がぶつかるのって派手だねえ

最近、能力の応用で温度を上げたり下げたり出来る様になった

なので、お湯を沸かしてお茶をいれたのだが・・・何時までやってくるんだろう

いい加減飽きてきた

そろそろ止めるか

「すまなかつた！」

力任せに女性を拘束して説得すること1時間

漸く妹紅が人間で俺が人を襲わない妖怪だって事を分かってもらえた

「いえ、わかってもらえればいいんですよ」

「いや、それでは私の気がすまない。せめて、食事くらい奢らせてくれ。と言っても私の家でだけだな」

「食事か、そう言えば腹が減ったな」

山を越える前に少し食った程度だからなあ

妖怪にも襲われたし

「妹紅、どうする？」

「腹が減った、私は行きたいな」

「了解、ならお邪魔しようか」

「そうか、良かった。案内する」

すると女性は先導して歩き出した

「そういえば、まだ名前を言ってなかったな。私は上白沢慧音だ、よろしくな」

「俺は灰刃、妖怪だ」

「藤原妹紅」

簡単な自己紹介を済ますとなんとなく見覚えのある道を歩いていく

「ここが私の家だ」

どう見ても洞窟です

見覚えがある筈だよ

ここって何年か前に俺が鬼からもらった鬼の住処だ

「慧音さん、この洞窟って・・・」

「・・・ああ、ちょっと事情があってね・・・私は村には住めないんだ」

少し悲しそうな表情を見せる慧音さん

でも訊きたいのはそう言う事じゃなくて

「いや、この洞窟の前って大きな岩がおいてあったとおもうんですけど」

塞いでいた筈の岩は今は横に転がっている

「よく知ってるな、村を出た時に偶然に隙間を見つけてな。苦労して岩をどかしてみたら洞窟を見つけたって訳だ」

「?・・灰刃、何で知ってるんだ?」

妹紅が不思議そうに訊いてくるが

「永く生きてればいろんな事を知ってるもんだよ」

はぐらかしておこう。別にこの住処に未練は無い、と言うより存在も忘れていたしね

妖怪の特徴なのか俺が暢気なのか、あまり執着しなくなった

「・・・なら、そういう事しておく」

納得してないって顔に書いてあるよ

「灰刃さんは何歳なんだ?」

おおっ! 慧音さん、それ訊きますか!?

妹紅も興味津々な表情でこっちをみますよ!?

正直に言つと忘れました！

「実はわす「忘れたは言わせないぞ？」なんで？」

正確に思い出せと？

「妖怪は生きた分だけ妖力が上がるって聞いた。自分の正確な年齢は忘れても大体は覚えている筈だ」

そんな事言われても数えるのが面倒臭くなつたんだもの！

こつなつたら、思い出そう

.....

.....

.....

「大体.....1500年くらい？」

確か、多分それくらいだったような気がしないでもない

「1500年！？大妖怪じゃないか!？」

ああ、そう言われて見れば

俺って大妖怪になつてたんだな

「道理で馬鹿でかい妖力を持つてる筈だ」

妹紅、人の事を馬鹿って言う娘に育てた覚えはありませんよ

「けど、何で靈力も持つてるんだ？」

「それは秘密」

「何だそりゃ？」

別に言っても良いんだけど、良い男には秘密が付き物だぜ？

はい、すみません。調子にのりました

「まあ良い、人は襲わないんだろう？それで良いじゃないか」

慧音さん、良い人すぎるな

「さあ、食事の準備をしてくる。少し待っていてくれ」

おとなしく待っていていよう

「それで、慧音さんはどうしてこんな所に住んでいるんだ？」

食事の後で気になった事を訊いてみた

「お前な、あまり無神経な事を訊くんじゃない」

「いや、良いんだ。私は半獣なんだ」

半獣と言うと確か半分獣の人間だったか

満月を見たりお酒を飲んだり怒ったり水を被ると人間と獣が混じった姿に変わるとか

「へえ、珍しいな。何の半獣なんだ？」

妹紅、お前もしっかり興味があるんじゃないか

「ハクタクだ」

ハクタクっていうと、確か王者の下に現れて予言をするとか何とか

「それは生まれつきなのか？」

「いや、後天的なものだ。以前村が妖怪に襲われてな、その時に私が元々持っていた能力で自身を半獣にした」

半獣になる能力？想像も出来ないな

「歴史を食べる程度の能力とってな。自分の人間だという歴史を消してハクタクになったんだ」

「それがどうしてこんな所に住むって事になるんだ？」

「村を襲った妖怪を追い返す事は出来たんだが・・・村人たちに怖がられてな」

成程、人は自分たちと違う物を極端に恐れるからな。無理も無いがおや？妹紅が震えてる

「何だ、その村の連中は！自分を救ってくれた奴を怖がるだ！ふざけるな！」

妹紅も同じ様な感じで家を追い出された口だからなあ。怒るのも無理はないか

「落ちて着け妹紅。ここでお前が怒っても意味は無いだろ？」

「けど灰刃！お前は頭にこないのか！？」

「俺も理不尽だとは思っけど、人間なんてそんなものだ。一々怒ってたら身がもたない」

「灰刃は妖怪だから、人間の気持ちなんか分からないんだ！！」

妖怪だから・・・か

一応、俺も元は人間なんだけどなあ

長生きしてる内に変わったのかな？

「あ……すまない……」

黙っているのを勘違いしたのか妹紅が謝ってくる

「いや……」

何だか気まずい空気になっちゃったな

「そ、そうだ！2人共、よければ今日は泊まっていってくれ！」

重い空気に耐えられなかったのか、慧音さん明るく言った

「あ、ああ。良いだろ灰刃？」

「うん、お言葉に甘えよう」

「そうか、良かった！なら、部屋に案内するよ」

こんなつもりじゃなかったんだけどなあ

慧音さんに案内された部屋に布団を敷いてもらい寝ようとした

妹紅は慧音さんと同じ部屋で寝るそうだ

いざ、寝ようとした瞬間

地面が無くなって自由落下を始める俺の体

「な、なんじゃこりゃ~~~~~!!」

そして、後には静寂のみが残された

幻想郷

「な、なんじゃこりゃ〜〜〜〜〜!!」

地面が急に消えたと思ったら、何とも言えない気味の悪い空間に居た

紫色の空間の中で大きな目玉が幾つもちらを見ているって・・・
何だ？見覚えがあるぞ

結構長い時間落ちているのでいい加減、飛ばうと思って妖怪の姿に
戻ろうとした

だけど、戻る前に気味の悪い空間から吐き出されて尻を打った

「いつてー!」

思わず尻を押さえて悶絶する

「っつて、ここはどこだ?」

何だか見覚えがある山の中にいた

最近、見覚えのある所ばかりだ

何でこんな所に？誰が犯人かは見当がついてるけど

「その人間！どこから入り込んだ！」

後ろから声が聞こえた

振り返るってみると天狗が空から見下ろしていた

「どこからって・・・スキマから」

あんな気味の悪い空間を使う奴なんて1人しか知らない

「隙間？何を言ってる！」

ホント、何をしたいんだあいつ

「此処は妖怪の山だ！人間が入り込む事は許されない！」

荒事は勘弁して欲しい

「しかも哨戒天狗の眼を逃れて入り込むなど。前代未聞だ」

そんな事言われても

「貴様を連行する」

連行中です

何かこう・・・UFOキャッチャーの景品になった気分

両肩を掴まれてそのまま空へ

連行中に分かった事だが

見覚えがあるのも当たり前だ

此処は俺が妖怪として生まれ変わって1000年間だらだらしてた
山だ

今じゃ天狗や他の妖怪の住処になってる訳だな

「着いたぞ」

着いたって此処は懐かしの我が家ではないか

勝手に人の家を使わないで欲しいもんだ

暇に任せて結構でかい家にしちゃったしなあ

何百年も留守にしてたし

「天魔様！山に入り込んだ人間を連れてきました！」

天魔？天狗のボスか？

「」苦勞

家の中から妹紅くらいの女の子が出てきた

「お前は下がってよい」

「はい！」

天狗が飛び去っていく。拘束くらいした方がよいと思うんだけど

「それで、何の用があつて山に入り込んだのだ」

「いや、用も何も紫の奴に落とされたんだよ」

「何？紫を知っているのか？」

この天魔って奴、紫を知ってるのか？

「知ってるも何も」「お久しぶりね」「出たなスキマ」

俺の横にスキマが出来たかと思うと中から胡散臭いのが出てきた

「いきなりご挨拶ね」

「いきなりスキマに落とす奴に言われたくは無い」

既に夜は明け始めている

早く戻らないと妹紅が心配する

……心配するよね？

「ふむ……とりあえず中で話さぬか？」

自分の家に他人が招待するって、何か気分悪いなあ

「そうね、それじゃ遠慮なく」

お前は遠慮しろ

「それで、何の用なんだ？」

久しぶりの我が家は随分と様変わりしていた

ちよつと不機嫌だ

「その前に元の姿に戻つたら？」

天魔が何の事かと首を傾げる

それを尻目に元の姿に戻り軽く伸びをする

やっぱり人間の姿よりこつちの方が落ち着く

文字通り羽を伸ばせるからなあ

「何と！妖怪だったのか！」

まあ、驚くよね

霊力を放っていた人間がいきなり妖力を放つ妖怪になったら

「で？」

「なあに？」

「用件は何だ、2回も言わせるな」

ただでさえ家を勝手に使われて、更にいきなりスキマに落とされて
まだ手を出してないのは俺が紳士だからだぞ？

「おい、それより何なんだ！？その妖力の大きさは！？」

話の腰を折るなよ

「ただの大妖怪よ」

紫は紫で喧嘩でも売ってるのか？買うぞ？買ったぞ？

1度、俺に負けて涙目になったの忘れたか？

「俺に漫才でも見せる為に呼んだのか？」

「そんな訳無いじゃない」

最近のキレやすい若者舐めるなよ？若くはないけど

「貴方にお願いがあつて呼んだのよ」

やっとな紫が話し始めた

「この辺りは少し前まで1人の妖怪の縄張りだったの。それが何年も前にふらりと居なくなつただけだね。

この辺りに住んでた妖怪たちは主が居なくなつたこの土地に移り住んだ、私もその1人よ。

私は此処に妖怪たちの郷を作る事にしたの。人間たちの妖怪を恐れる心が無くなる前にね。

でも、此処の主が何時帰ってくるか分からない。
もしかしたら帰ってきたとき縄張りを荒らされたと怒る可能性もあるわ。

此処の主はかなりの強さを持っているらしいから」

一気に喋ると天狗が運んできたお茶を一口啜る

「そこで貴方にお願ひがあるの。此処の主を探ってきて此処に郷を作る許可を貰って来て頂戴」

つまり俺は小間使いか？

「何で俺が？」

「だって貴方強いじゃない。もし、見付けた時に戦闘になっても貴方なら生き残れるでしょ？」

これは本気で怒っても良いよな？

俺は徐々に妖力を開放していく

「それが人に物を頼む態度か？」

「ひいっ！」

天魔が腰を抜かした様だが気にしない

「相変わらず凄まじい妖力ね。体が震えてくるわ」

胡散臭い笑みを引き攣らせながらもまだ強がる

更に強く妖力を出してやる

「!・・・気に・・・障ったの・・・なら・・・謝るわ・・・ごめんなさい・・・」

強く放出しすぎたのか家まで震えだした

ダメ押しだ、妖力を全開にして更に能力で増やしてやる

「・・・!!」

既に天魔も紫も言葉すら出せない様子だ

こちら辺で許してやるか

開放していた妖力を消してやる

「・・・何を考えているのよ、この辺り一帯を消し飛ばすつもり?」

「そんなつもりは無いさ。良いか?人に頼みごとをする時は相手の目を見てお願いします、だ」

「・・・分かったわよ、お願いします。これで良いのかしら?」

まだ、態度が悪いが・・・まあ良いか

「良いだろう。許可してやる」

「何言ってるの？許可をするのは此処の主で貴方じゃないわ」

「だから、此処に住んでた主とやらの許可が今貰えただろ？」

「？……まさか、貴方が？」

やっと気付いたか、鈍いな

「此処に昔から住んでいた妖怪で心当たりがあるのは俺ぐらいだ」

「……早く言いなさいよ」

「訊かれなかったからな」

訊かれたとしても多分は素直には答えなかっただろうけど

「でも、それなら好都合ね天魔……天魔？」

返事が無い、天魔の方を見るとひっくり返って気絶していた

とりあえず棒で突いておこう

つつん

「う~~~~~」

つつん

「あ~~~~~」

つつん

「ん~~~~~」

ぱん！

「はっ！一体何が!？」

何となく叩いたら起きた

「あなた、気絶していたのよ」

「そう言えば……………思い出した!」

「何をだ？」

「何をって……………きゃあ—————!!」

あらら部屋の隅まで逃げちゃった

驚かすつもりはなかったのに

つてか、きゃあつて今まで保とうとしてきた威厳が台無し

「で、貴方の許可が取れたから早速、此処に新たな郷を作るわ」

「ああ、好きにしてくれ。…そうだ、郷の名前は決まってるのか
?」

スキマに入ろうとしていた紫が振り向く

「幻想の集う場所、幻想郷よ」

鬼の宴会（前書き）

なんだか微妙な感じの仕上がり

鬼の宴会

「天魔様！今の妖力は一体何事ですか！？」

紫がいなくなつてから数分後

天狗が数人、血相を変えて飛び込んできた

天狗たちは部屋の隅で怯えている天魔と胡坐を掻いている俺を見つけた

「貴様！天魔様に何をした！！」

「別に何も？」

「嘘を吐くな！」

何で天狗は俺の言う事を信じないかね？

本当に何もしていないのに、ちょっと威嚇しただけで

よほど頭にきたのか、血気盛んな天狗の1人が切りかかって来る

「よつと。おいおい、危ないなあ」

余り強くない天狗だったのか、軽く避けられた

「！・・・貴様！！！」

何なんだよ、俺が一体何をした

「天狗一の剣を軽々と避けたぞ・・・」

「我らでは勝てぬやも知れぬ・・・」

「全員で掛ければ・・・」

何やら天狗の呟きが聞こえて来る

おお、天狗一の剣だったのか！

確かに天狗一を軽く避けられれば怒るよね

・・・天狗一って何だよ

「ごめん、余りにも避けやすかったから」

「・・・！！殺してやる！！！」

ありやりや、顔が真っ赤になった

ちゃんと謝ったのに

何て考えている内に天狗たちが全員武器を構えてる

面倒臭いなあ・・・

「かかれ「やめないか!!」天魔王様!？」

やっと立ち直った天魔王天狗たちを止める

「部下たちが失礼をしました、申し訳ない」

天魔王が深く頭を下げる

「天魔王様、何を!？」

「黙れ!この方はお前達が束になっても傷一つ付けられない程の大妖怪だ」

天狗たちが動揺している、ちょっと面白い光景だ

「部下たちにはきつく言っておきますので、今日の所はお引取り願えませんか?」

さっきまで部屋の隅で震えていたとは思えない程に凜々しく丁寧な物言いだ

けど、ここは俺の家なんだけど

「出て行くも何も、ここは俺の家だぞ？」

すると、天狗たちはまたもや怒り出す

「貴様！この家は天魔様の家であるぞ！凶々しいのにも限度がある！」

天狗たちはきつとカルシウム不足なんだろう

そうじゃなきゃ、ここまで怒りっぽくならない

「黙っていると云った筈だ！……ここが貴方の家とはどう言う意味ですか？」

「この家は俺が千数年前に自分で建てた家と言う意味だ」

そうなるとこの家は築千年以上となるのか……頑丈な家だな

「な！……それを証明できますか？」

証明、ねえ

「証明になるかは知らんけど、あんた達がこの山に来る前からこの家はここにあっただろ？」

正直、家なんてまた新しく建てれば良いだけなんだけどね

でも、ただで家をプレゼントするのも何か癪だから出来るだけ嫌がらせてやる

「はい、確かに我々が此処に移住した時に既にこの家は存在して
ました」

「この家ってトイレ・・・いや、廁が遠くにあって行くの面倒にな
るだろ？」

自分でも何であんなに居間から離れた所につくっちゃったんだ、っ
て後悔したもんだ

「寢室の障子は開け閉めしにくいだろ？」

やっぱ適当にやるんじゃないかった

「西側の部屋なんかちょっと傾いてるしな」

素人が建築なんてやるもんじゃない

あれ？なんでこの家、千年以上も倒れなかったんだ？

「・・・貴方の言う事は全てあっています。出て行くのは私の
方ですね」

納得してくれた様だ

「いや、別に出て行かなくてもいいぞ」

十分苛めたから

妹紅の所に帰らなきゃならないし

「は？いや、でも・・・」

「あんにやるよ、この家」

天魔は呆然とした顔でこつちを見てくる

うん、面白い顔だ

「それじゃあな」

後には変な顔をした天魔と天狗たちが残された

「さて、紫を探るか」

この幻想卿から慧音さんの家まで普通に飛んで1週間は掛かる

けど、来た時と同じ様に紫のスキマを通れば一瞬だ

「天魔に居場所を聞いてけば良かった」

とりあえず、山の周辺から探していくか

「見つからない……」

既に山の中は隅々まで探した

森の中もかなり歩き回った

しかし、見つからない

「よく考えたら、スキマの中にいたら見つからないよな」

……無駄な時間を使っちゃった

もう辺りは暗くなっている

昼ごろに諦めていればよかった

今から飛ぶのはダルいし

今日はその辺で寝て明日向かおう

そうと決めればさっさと寝床を探そう

確か山の上に良さそうな岩場があった筈だ

「何だ？あの声」

岩場を目指して歩いていると、何だか賑やかな声が聞こえてきた

声のする方に歩いていくと焚き火を中心に宴会をしている鬼の集団が見えた

「なんだ、鬼の宴会か」

特に興味も無いので通り過ぎようとした

「待ちなよ、兄ちゃん」

声を掛けられて振り向く

「呼んだか？」

「ああ、兄ちゃん見ない顔だねえ。何処から来たんだい？」

何だ？この鬼、上半身が体操服だ。下は普通・・・いや、少し透けているスカートなのに

「来たつて言うか、帰つて来たが正しいな」

「へえ、どっか行つてたのかい？」

「色んな所にね」

「兄ちゃんも飲んでいきなよ、丁度酒の肴が欲しかった所さ」

酒か、飲んだ事は無いな

・・・少しなら良いか

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「そうこなくちゃね。おーい、妖怪1人追加だー！」

鬼たちは皆、嬉しそうな顔で招き入れてくれた

鬼を侮っていた

昼夜問わずに飲み続け、気付いた時には1週間も飲み続けていた

「あゝ、気持ち悪い」

「だらしないねえ、たかがこれ位の量で」

「ふざけんな！帰るって言った俺を引き止めて飲ませ続けたのは何処の誰だ！」

文句を言っても鬼は気にせず笑っただけだった

最初の内はまだ良かったんだ

けど、さすがに妖怪の体でも許容量を越えれば酔っ

更に今回は許容量を遥かに越えた

「水をくれ」

頭が痛いわ吐き気はするわで散々だ

「水なら向こうに川があるから、好きなだけ飲んできな」

持ってきてくれるって発想はないのか

重い体でのろのろと川に向かう

少し歩くと結構大きな川に出た

そのまま川に頭ごと突っ込む

「ぷは~~~~！生き返る！」

大分すつきりした

「お兄さん、かなり飲んだみたいだね」

不意に声を掛けられる

見れば川の中ほどに青い髪の少女が顔を出している

「鬼の宴会に参加したんだ。死ぬほど飲んだよ」

「あはは、鬼に付き合ったのかい？よく生きてたね」

やっぱり俺がだらしがないんじゃないかと、鬼が異常なんだな

飲酒初体験であの量は無いわ

「お兄さんはこの辺の人？あまり見かけない顔だけど」

・・・この山の連中は住んでいる奴の顔を全部把握してるのか？

「いや、最近帰ってきたんだ」

「へえ、あ！私は河童の河城にとりつて言うんだ」

名前か、そういえば散々飲み明かした鬼たちの名前、1つも訊いてないや

「俺は灰刃、見ての通り妖怪だ」

「よろしくね、ところで灰刃はこの山に住むのかい？」

「いや、俺はまた旅にでる予定だけど・・・なんで？」

「もし、家が無ければ私が作ってあげようかと思って。河童の科学は世界一なんだよ」

胸を張って自信満々に言う河城

家を建てる事と科学は関係ない様に思えるんだけど

「河城は「呼ばれ慣れないからにとりつて呼んで」・・・にとりは

何処に住んでいるんだ？」

「私は川の上流にある洞窟に住んでるよ」

「なら、もし俺が家を建てる時はお願いしに行くよ」

「本当！？ならその時を楽しみに待ってるよ！」

たかが家の事くらいで随分と嬉しそうだな

「俺は行く所があるから、じゃな」

「うん、またね」

さて、いい加減に妹紅の所の帰らないとな

守矢の神社

「妹紅~~~~！慧音さ~~~~ん！」

妖怪の山からやっとの思いで帰って来たが洞窟の中には誰もいなかった

当然っちゃ当然か

あれから、戻る時間も合わせて12日間も経っている。出来るだけ急いだんだけど

鬼たちの宴会にさえ参加しなければなあ

しかし、妹紅が居ないのは良いとして慧音さんも居ないのはなんで？

まさか、慧音さんに妹紅を取られた！

・・・いや、冷静になれ俺

考えられる可能性としては、妹紅が俺を探しに行つて慧音さんがそれに同行した。くらいだなあ

なら、俺も探しに行くべきなんだろう

よし！超面倒臭い！

……いつか縁があれば再会できるよ

それまでは、気ままな1人旅を堪能しよう

「それで、アンタ何者なんだい？」

俺は今、でかいしめ縄に襲われている

もとい、でかいしめ縄を付けた女性に襲われている

何でこんな事になったかと言つと

『有名な神社にお参りをした』

これだけだ

神社で手を合わせていたらでかいしめ縄が出てきて妖怪だとバレた

正直、訳が判らない

姿はちゃんと人間だったし霊力も出していた

何故、バレたんだ？

「なんでバレたって顔してるね」

はい、その通りです

「この神社に祀られている神は私さ。その神に願いをすれば当然願いは私に届く」

成程、鬼の宴会に耐えられる臓器が欲しいなんて願うんじゃないし。鬼の宴会に参加できる人間なんていないし

「このまま大人しく住処に帰るならばよし、さもなけば五体満足でいられるとは思わない事だね！」

痛いのは嫌だし、お参りは済んでるし・・・行くか

「じゃあ、俺は帰るから。願い事は出来ればで良いからな」

帰るって言っても帰る場所なんか無いけど

次は何処に行こうかな？

「って、ちよっと待ちなよ！」

何で呼び止めるかな、大人しく帰るって言うてるのに

「あんだ、何か悪さしに来たんじゃないのかい！？」

失敬な、良い事はしても悪い事はしないと評判の俺に向かって

そんな評判聞いた事も無いけど

「いや、別に。悪さする理由も必要も無いし？」

「妖怪なら力が衰えない様に人を襲うものだろ！？」

「知らないのか？最近妖怪でも人を襲わなくても生きていける奴もいるんだぞ」

多分、俺限定だけど

「そんな馬鹿な！じゃあアンタは何しにこの神社に来たんだい！？」

「妖怪が神社にお参りしちやいけないのか？」

「神社にお参りする妖怪なんか普通は居ないんだよ！」

別に良いじゃないか、妖怪だって神のご利益が欲しい時もある。主

に肝臓とかの為に

「何だよ？神のくせに参拝者を選び好みするのか？信仰する者全てに等しく加護を与えるのが神じゃないのか？」

何で俺こんな所で神に説教してるんだろ

「うっ！確かにその通りだ」

「分かったらこれからは気を付けろよ」

さて、今度こそ行こう

「待ちな」

今のは綺麗に見送る空気だっただろうが

「あんだ、本当に妖怪かい？」

「俺を妖怪だと言ったのはそっちだろ」

「そんなんだけど・・・」「どうしたんだい？神奈子」「諏訪子か」

今度はでかい帽子を被った少女が出てきた

何なんだ？俺は特に悪い事してないよな？

「いやさ、妖怪が出たんで追い返しに出てきたんだけどね。どうにも変な奴なんだよ」

変な奴とは聞き捨てなら無いな

「変な度合いで言えば、あんた達も十分変だぞ？」

しめ縄とか帽子とか

「あはは、神に向かって言うじゃないか。立ち話もなんだし中に入りなよ」

半ば強引に腕を引かれて連れ込まれる

もう一回言うぞ？俺何も悪い事してないよな？

「つまり、あんたは妖怪なんだけど人を襲わなくても生きていける訳なんだね？」

「そうだって何回言えば気が済むんだ？」

やっと納得してもらえた

たかがそれだけの説明で何で1時間も掛かるんだよ

神なんて非常識な存在のくせに他の非常識は容認できないなんて・
・頭が固いとしか言い様が無いな

「けど、珍しい妖怪もいたもんだねえ。永く生きてるけど、そんな妖怪初めて見たよ」

「そうかい、じゃあ俺はいい加減帰らせてもらっぞ」

こんな面倒臭い奴らに絡まれるなんて俺もツイてない

「まあまあ、そう言わずにしばらくゆっくりしていきなよ。勘違いで襲ったお詫びとしてさ」

「諏訪子！妖怪をもてなすなんて何考えてるんだい!？」

「でも、事情も聞かずに襲ったのは神奈子でしょ？これくらいしても罰は当たらないと思うよ?」

どう考えても罰を当てるのはあんたらだと思っぞ

「確かにそうだけど・・・」

「なら決まりだね！私は諏訪子、あっちのが神奈子っていうんだ。よろしく」

「・・・まあ、良いか。俺は灰刃だ」

このまま流れに身を任せた方が面倒が少なそうだ

何だか知らないけど蛙に気に入られた

この守矢神社に引き止められてもうすぐ1000年になる

隙を見ては逃げ出そうとするんだけど、その度に見つかって連れ戻される

本気を出せばすぐに逃げられるんだけど・・・多分俺も何だかんだ言っただけが気に入っているんだと思う

ってか、連れ戻す理由を訊きたい

「灰刃く、お供えの中に良いお酒があったから一緒に飲まない？」

こんな感じで非常にフレンドリーだ

神がこんなので神社は大丈夫なのかね？

・・・大丈夫なんだろうな。だからこそ100年も居候を続けられたんだろう

「まだ日が高いから後でな」

「あーうー、それじゃまるで私が昼間から飲んだくれてるみたいじゃないか」

「事実そうだろう？酒は晩酌と決まってるんだぞ」

1週間、朝も昼も夜も無く飲ませられた俺が言うのもなんだが

「うー分かったよ。じゃあ夜ね」

あれから大分酒にも強くなった

神奈子が諏訪子が願いを叶えてくれたのか神に付き合っただけ飲みまくった所為か

どっちにしても神のおかげだって事は変わらないか

最近じゃ神の傍に居る者だって事で拜んでいく人も少くない

おかげで神性がついてきちゃった

神になんてなるつもりは毛頭無いから能力を使って神性を出来るだけ下げているけど

そういえば新しい能力を使える様になった

『上と下を操る程度の能力』だ

元々の能力の応用で温度程度なら操れたけど、ここに来て本格的に能力として独立したらしい

そのおかげで神になんかならずに済んでいるんだけど

そろそろ此処も潮時かな

ん？・・・何だ？でかい妖気が近付いて来てる

まだかなりの距離があるけど、確実にこの神社に向かってきてる

・・・速いな

一宿一飯の恩（の1000年分）もある事だし、追い返しに行くか

「ちょっと出かけてくるよ」

「ああ、夕飯までには戻ってきなよ」

「善処するよ」

神奈子はこの妖力に気付いてないみたいだな

好都合だ、心配かける前に済ませよう

「灰刃、気をつけてね」

諏訪子は薄々感じているみたいだな

「分かってるって」

さっさと終わらせてこよう

ただ、感じる妖力が近付くにつれてどんどん大きくなってるのが気になるな

鬼との戦い

神社から数百キロメートル離れた森の中

猛スピードで走る1匹の鬼の姿を見つけた

多分、神社の周りにある人間の集落で人攫いでもするつもりなんだろう

あの集落には知り合いも結構いる

知らない人間なら鬼の生きる為の糧ということで無視したかもしれないが知ってる人間なら別だ

鬼にお引取り願おう

翼を翻して鬼に近付いていく

「その鬼さん、ちよつと良いかい？」

声を掛けると鬼は急停止をしてこちらを見た

「何じゃ？若造。わしに何か用か？」

良く見ればこの鬼、かなりの年寄りだ

もしかしたらヤバいのに喧嘩売ろうとしてるか、俺

明らかに俺より年上だし、多分能力で増やした俺の妖力より大きな力を持つてるっばいし

……死ぬかもしれない。俺の能力は無限に増やせる訳じゃないしなあ

「声を掛けておいて無視か？良い度胸じゃのう」

鬼の目が鋭くなった、中々に怖い

だけど、ここで逃げるのは有り得ない

「いやいや、少し考え事をね。それより鬼さんはこれから何処へ？」

「……ふむ、まあ良い。わしはこれからこの先にある人間の集落に行つて飯の確保じゃよ」

やっぱりか……さて、どう説得したものか

「その事でお願ひがあるんだけどさ。この先の人間の集落に行くの

やめてくれない？出来ればずっと」

「若造……わしを舐めているのか？」

気に障ったようだ

覚悟を決めるか、面倒臭いけど

「舐めちゃあいないけどな。あの集落には知り合いが多いからさ、頼むよ」

もしかしたら頼む態度じゃないかも知れないな

紫に言った手前、俺もやっておこつ

「お願いします」

「ふざけるなよ若造」

「ふざけてもいないって。だから」

最後まで言い終わらない内に鬼が側面に移動して殴りかかってくる

あつぶねえ！当たる所だったぞ今の！

「ほう、避けるか。中々やるようじゃが……やはりまだまだ若造じゃな」

？……それどんな意味？確かにあんたに比べれば若いかもしれないけども……！！

これは・・・脇腹が浅く切れている

確かに避けた筈なんだけど

この爺さん強いな。今になって軽く痛みがきた

「いてえ・・・爺さん、あまりはしゃぎ過ぎるとポックリ逝っちゃうぞ
うぞ」

多少強がってみたけど、切られた瞬間なんか全然見えなかったっての

「若造が、強がるでない」

言い終わるか終わらないかの瞬間、鬼の爺さんの姿が消え後ろから強烈な殺気を感じた

これは間に合わない。能力を最大で使う

だが、威力も速度も減っている筈の攻撃で俺の左腕が飛んでいく

「どつじや若造？素直に謝って逃げ帰るなら命までは取らぬぞ？」

肩口が熱い、血は止めたけどこのままじゃ確実に死ぬ

とりあえず治癒力を上げて血を増やす。これでしばらくは大丈夫だ

「冗談言つなよ。まだまだこれからだろ？」

妖力を開放して能力で限界まで増やし上げる

せめて逃げるように言ってから出てくるんだった

時間稼ぎが意味無い行動になってるよ

「そうか。あの世で後悔するんじゃない」

ザシュッ！

さつきよりも更に速い速度で近付いてきた鬼の手刀が俺の左胸、丁度心臓がある所に穴を開ける

気が遠くなる

死ぬ事自体は別に良いけど神社の人たちを守れなかったのは心残りだ

何とか・・・守りたかった・・・な・・・

あれ？何でだ？俺死んだ筈なのに

何でさっきの鬼を見下ろしているんだ？

しかも今の声って何だか聞き覚えがあるんだけど

いや、聞き覚えってレベルじゃない

当然だ、俺の妖怪としての人生が始まる原因になった奴の声だからだ

間違える筈が無い

「お、お前、さっきの若造か？」

爺さんの声も心なしか震えている

当たり前か、こいつの妖力は爺さんの妖力を軽く上回っている

「ガアアアアアアアアア！」

体のコントロールが効かない

多分、こいつに全て持っていかれてるんだろう

俺に出来ることは何一つとして無い

あるとすれば、ただ見ているだけだ

「くっ！やめぬか！ぐ、あああああああ！！」

目の前の俺の心臓を貫いた鬼が喰われていくのを

ただ、見てるだけ

何だか体中が痛い

どうやら気を失っていたらしい

あれからどのくらい時間が過ぎたんだ？

さっきのあれは夢・・・じゃないみたいだ

その辺りに血がべったりと付いている

少し離れた所には俺の左腕が落ちている

けど今の俺には左腕がある、多分再生したんだろう

・・・認めるしかないか、俺はあの鬼を喰った

正確には俺じゃなくてアイツだけだ

アイツが表に出た事で少し分かった事がある

アイツも能力持ちだったことだ

『食べたものを吸収する程度の能力』

成程、だから俺とアイツは混じったわけだ

アイツのあの変な姿も納得いく

多分さっきの鬼も混じった筈だ

俺の右のこめかみ辺りから1本、角が生えている

これから俺は嘘が吐けなくなるのか？鬼は嘘を嫌うって言うし・・・
いや！俺は鬼でもある存在だから嘘を吐いても良い筈だ！

……もつと他に悩む事があると思うんだけど、まあ良いか

落ち込んでてもしょうがないしな。伊達に年取ってないっての

……あれ？何だか違和感が

さて、帰るか！

鬼の能力を奪ったなんて事は無いしね！

今日のご飯は何だろう？

……分かったよ、そんな目で見るなよ

『遠くの音を聞き取れる程度の能力』

びみよーな能力だな

耳が遠くならないだけじゃんか

別に良いけど

とりあえず事は終わったし帰るか

鬼との戦い（後書き）

連続投稿

何だか詰まりそうな予感

出来るだけ頑張りますけどね？

出発とスキマ攫い(前書き)

時代が進まない

そろそろ早足になろうかな

出発とスキマ攫い

「ただいま」

「ああ、おかえり……。つて何だい！？その角は！？」
やっぱり神奈子ならつつこむよね

「え〜と……。生えてきた」

説明するのも面倒だし、適当適当

「生えてきたつて、そんな馬鹿な事ある訳無いだろ！」

「あ、灰刃おかえり〜。あれ？その角似合ってるね」

諏訪子との絡みは気楽で良いなあ

神奈子も少しは見習えば良いのに

「無事でなによりだよ。さ、ご飯にしよう」

まだ後ろで神奈子が騒いでいるけど無視しておこう

それが良い

「出て行くだって!?!」

その日の夜、一緒に食事していた2人に話を切り出す

「ああ、最近俺を拜んでいく人間が増えたからな。完全に神になる前にまた旅にでるよ」

「良いじゃないか。灰刃も此処に祀られれば」

馬鹿な事言つな、誰が好き好んで神になんてなるか面倒臭い

「俺は妖怪でいる事が気に入ってるんだよ」

「そうかい、さびしくなるね」

神奈子・・・お前はただ飲み仲間がいなくなるのが惜しいだけだろ

「なに、永遠の別れって訳じゃないんだ。縁があればまた会えるさ」

「それもそうだね。お互い寿命なんかあつて無い様なものだしね」

妖怪って寿命なんてあるのか？

「それで、どこに行くか決めてるのかい？」

「いや、全然」

もうすぐ夏だしな、北に行くのも良いかもしれない

「呆れたねえ、本当に当ての無い旅かい」

「いや、当てならあるぞ？幻想郷だ」

旅に飽きたらあそこに戻れば良いだけだ

「幻想郷？聞いた事ないなあ。神奈子知ってる？」

「噂だけなら聞いた事がある。ありとあらゆる幻想が集う場所だつて事くらいだね」

「幻想郷は全てを受け入れるらしいから、2人も信仰が失われそうになったら来るといいよ」

「信仰が失われる？そんな事あるもんかい」

それがあるんだなあ。希薄になつてゐる記憶では既に信仰なんて形だけのものになつてたから

「で？何時行くんだい？」

「明日かな。善は急げって言うだろ？」

「なら今日は送別会だね。」

結局、夜遅くまで酒盛りは続いた

「それじゃあ元気で」

朝・・・と言つか、もう昼に近いけど

とりあえず、出発する事にした

「あんたもね」

「何かあつたらすぐに来てくれてもいいからね」

少し名残惜しいけど、これ以上ここにいたら神格化が進む

さっさと行こう

翼を広げて飛び立つ

あっという間に小さくなっていく守矢の神社と2人の神

ちよ！参拝客の皆さん、俺を拝まないで！

神社から数キロメートル地点

俺は予定通りに北に向かっていった

やっぱり空を飛ぶのは気持ち良いな

……OK現実逃避はやめよう

俺は嘘を吐いた

正確には神社から数キロメートル地点で目の前にいきなりスキマが開いた

勢いを落とせずにスキマに一直線に飛び込んだんだ

あの紫色したスキマ女め、今度は何を企んでやがる

お、出口だ

ここは……やっぱり幻想郷か

「いい加減にしないと消滅させるぞ、紫」

「あら、怖いわね」

すぐ隣に出現したスキマから上半身だけ出した紫がいた

その胡散臭い笑いをやめないと嫁の貰い手がなくなるぞ

「その時は貴方に貰ってもらってから平気よ」

「心を読むな。変態スキマが」

油断も隙も無い

「それで、何の用だ？」

「それより、あなたって鬼だったかしら？妖怪だとばかり思っていたけど？」

角を見ながら訊いてくる

「うるさい、こっちにだって色々あるんだよ！それより用件を言え！」

「ええ、貴方に力を貸して欲しくて」

「何だ？月人にも喧嘩売りに行くにののか？」

「違うわ。それは前にやって完敗したからもういいの」

やってたのか。軽い冗談だったのに

「この幻想郷全体に境界を使った結界を張ろうと思うのよ」

「結界？結界なんて張ってどうするんだ？」

「この幻想郷に人里があるのは知ってる？」

こんな妖怪の巣窟に人里なんてあったのか。全然知らなかった

「妖怪たちが生きていくには人間との関わりが不可欠。だから人里をつくり人間たちに住んでもらってるの」

「よく妖怪や鬼に襲われないな」

自分の住処の近くに人間が住んでいたら間違いなく襲いに行くだろ？普通

「人里の中では人間を襲わないように取り決めが行われたのよ」

成程、人間が居なきゃ妖怪は消える

つまりは体の良い餌場って訳か・・・仕方ないと言っても少し気に入らないな

「貴方も襲わないでね」

「人間なんて食わないって」

おい、何だ？その嘘ばかりってな顔は

「それで最近、人間たちの方が少し優位に立っているのよ。だから外にいる妖怪たちを自動的に幻想郷に招き入れる結界を張るの」

「それでバランスを取る訳だな」

「理解が速くて助かるわ」

おおむね理解できたけど、それに俺がどう関わってくるんだ？

「で？俺に何をさせる気だ？」

「決まってるじゃない。結界を張る時の燃料タンクの代わりよ」

決まってるのか？てか、タンクって

また人を舐めた様な事を

「お願いします。これで良いんでしょう？」

くっ！先を越された！これじゃ反論でき・・・るな

「言い方ってものがあるだろう。人をタンク呼ばわりして快く引き受けてもらえるとも思ってるのか？」

「いいじゃない、私と貴方の仲でしょう？」

何時、どんな仲になったのか？そこんとこ詳しく訊きたいな

「結界を張るって言うても今はまだ準備の最中なんだけどね」

「なら何で今俺を呼んだんだ？」

「しばらく会ってなかったからお願いついでに顔を見ておこうかと思っただの」

そんな理由で一々呼び出すなよ

「そうかい。ならもう用は済んだな。俺は行くぞ？」

「ダメよ。貴方にはこの幻想郷に住んでもらうから」

・・・は？

「何で？」

「今の所のバランスとりの為に・・・って言うのが建前」

建前って・・・言っちゃダメだろ

「本音は私よりも強い貴方に近くに居て欲しいから」

・・・何でそんな艶っぽい視線を向ける

悪いけど、俺はスキマ妖怪は守備範囲外だぞ？

「おい、言っておくけど「紫様！」俺・・・は？」

誰？

何時の間にか紫の隣に金髪で尻尾がいつぱいある女性が浮いていた。この人もドアノブカバーを被っている、流行ってるのか？

「あら、藍。どうしたの？」

「どうしたの？じゃないですよ。てつきり何時もの様に寝てるかと思えば布団の中は空っぽですし辺りにスキマも見当たらないから心配になって探しに来たんじゃないですか」

「そう？ごめんなさい。今、私の想い人と逢引の最中だったのよ」

ふざけるな、誰がお前の想い人だ

けど金髪の女性は信じたのか顔を真っ赤に染めてあたふたとしだした
あーやだ、ちょっと可愛いじゃないの

「すすすみません！私ったら気の利かない事を！すぐに消えます
から！」

「いやちょっと待て！信じるなよ！」

「いはいはいはいえいえいえいえ！そんな隠す事でもないしように！つ
て私は何を言ってるんですかね！と、とにかくごゆっくりと〜〜〜
〜！〜！」

すごい速さで去っていく金髪

ありゃ絶対に誤解してるぞ

遠くで「紫様にもとうとう春が来ましたか」とか言ってるし

無駄な所で無駄に効力を発揮する能力だ

「おい、どうするんだ？あれ。って言うか誰だ？」

「あれは私の式、九尾の狐の藍らんよ。それから私は割りと本気だった
りするのよ？」

此処は戦略的撤退が得策だな

簡単に言うのと逃げる

「あ！あんな所で天狗たちが編隊飛行をしてる！」

「え？」

よし！今だ！

時代自体が古い所為か古典的な手が通用するのは楽しいな

「もう、照れ屋さんね」

既に米粒程度まで小さくなった灰刃を見送りながら紫が呟く

「でもいいわ。時間ならまだまだたっぷりあるものね」

胡散臭い笑みを一層強くしながらスキマを開く

「また会いましょう？」

スキマに完全に入りきるとやがてスキマは消え去った

後には何時もと変わらない幻想郷の風景が広がるだけだった

「あぶなかった。何があぶなかったのかは具体的には言えないけど、とにかくあぶなかった」

しかし幻想郷に住め、か

まだもう少し旅を続けたかったけど仕方ない、しばらくは幻想郷に留まろう

しかしな紫、俺がこれで諦めたと思うなよ

いつかまた自由を求めて飛び立ってやるぜ

河童と烏天狗と天狗

さて、幻想郷に住む事になったからには家が必要だな

前に来た時に河童に何か言われた気がする

え〜と、名前は……にかわ？違うな……に、に、にわとり？
これも違つが何となく惜しい気がするな

………行ってみれば分かるだろ

よし！確か前は川に居たな。行ってみよう

川に到着した訳だが・・・

見事なまでに誰も居ないな

あれ〜〜？前に会ったのは此処の筈なんだけどな

待てよ？洞窟とか言っただけじゃなかったっけ？

空から見た時に上流に洞窟があったけど、そこか？

ここにいっても仕方ないし、向かうか

と、言う訳で

やって参りました、川の上流にある洞窟です

ご覧頂きますでしょうか？河童です

数人の河童たちが用途不明の機械の前で何やら議論しています

時折洞窟の中から爆発音のようなものも聞こえます

果たして河童たちは何をしているのか？

どどんレポートしていこうと思います

それでは一度スタジオに戻します

つて、スタジオってどこだよ！

・・・1人でやっても虚しいだけだな

あの青髪の河童を探そう

「ちょっと訊きたい事があるんだけど良いかな？」

手近な河童に声を掛けてみる

「はい？何でしょう？」

「ここに青い髪をした・・・に、にとろ？みたいな名前をした河童
っている？」

名前がどうしても出てこない、だがこの名前もかなり惜しい様な気が
する

100年も前の事だしなあ・・・

「もしかして、にとりの事ですか？」

「そう！それ！にとり！やっとスッキリした」

にとりだよにとり

やっと思い出した

「にとりに何か用ですか？」

「随分前に家を建ててもらった約束をしてね」

「そうなんですか。じゃあ呼んできますので待っていてください」

そう言つて洞窟の中に走る河童の少女

しばらく待つと洞窟の中からにとりが出てくる

「お待たせ！久しぶりだね、お兄さん」

「久しぶり、って俺の事憶えてたのか？」

「角が生えてて一瞬分からなかったけど河童の科学を嫌わなくてくれた人を忘れる筈ないよ」

河童の科学は嫌われてるのか？

この時代じゃ見ないものだからしょうがないか

「そうか。それで早速なんだけど、家建てて」

「お安い御用さ。場所は決まってるのかい？」

「いや全然。何処でも良いんだけど」

「分かった。じゃあ出来たら知らせるからお兄さんはその辺をぶらぶらしてなよ」

ぶらぶらか、お言葉に甘えようかな

「ん。それじゃよろしく」

「また後でね」

手を振るにとりに見送られて空に飛び立つ

さて、どこで時間を潰そうかな

「も、もしかして能力ですか！？どんな能力なんですか！？」

なにやら手帳を取り出してメモしだす

何だコイツ？変な奴だな

「教えない！！」

軽くコケた。変な奴だけどノリは良いみたいだ

「何ですか！？」

「人に何も言わずに写真を撮るような奴に教える事など何も無い！
」！」

決まったな

自分でも惚れ惚れするくらいだ

「言ったじゃないですか！」

「は？………言ったか？」

「言いましたよ！清く正しい射命丸文ですって！」

うそーん、俺カッコわる！

いや、まだだ

「言ったからって許可を得てから写真を撮れ！」

「う、それは・・・すみませんでした。では改めて取材をさせてください」

「だが断る！」

おお！またコケた

「何なんですか！ちゃんとお願いしたじゃないですか！」

「いや、今のはただのノリ」

「・・・もう良いです。それで貴方の能力は何ですか？」

良いですとか言いながら取材とやらは続けるんだな

「ああ、俺の能力は「おーい！お兄さん！」「おや？」

そうか・・・河童が空を飛ぶか。もうそんな時代か・・・

「どうした、にとり」

「ご注文の家を建てたから見てくれない？」

「マジで？仕事が早すぎるな、すぐ行く。と言う訳で取材とやらはまた今度な」

空で待つにとりの所に飛び上がる

後ろから「そんな！酷いですよ！」とか聞こえた気がするけど無視

しておじう

にとりに案内されたのは河童の洞窟からしばらく飛んだ山の中腹辺りだった

とにかく眺めが凄く良い

遠くの広がる森や麓の湖が見える、正に絶景だ

こんな場所があつたんだな。千年以上もこの山に住んでたのに気付かなかつた

家自体も広すぎず狭すぎずといった和風で平屋の一軒家で少なくとも俺の建てた家より丈夫そうだ

「おお、中々良い家じゃないか」

「気に入った？」

「ああ、ありがとうな」

いやー、永く生きてきて初めてまともな自宅を手に入れた

紫が結界を張る準備を終えるまで何年掛かるか分からないけど、これなら不自由なく過ごせそうだ

「ところで、鬼には挨拶にいったの？」

「挨拶？何で？」

「この山を治めているのが鬼、その下に天狗や河童がいるんだ。だから鬼にこの山に住む許可を貰わないと面倒な事になるよ？」

いや、この山は元から俺のだし

挨拶するなら鬼の方じゃないか？

前に戦った鬼を喰った所為か俺の妖力は半端無く上がった。今ならどんな奴にも負ける気がしない

「大丈夫だつて」

「うーん・・・本当に大丈夫なの？お兄さんの事気に入ってるから死なないでね？」

心配性な河童だなあ

「りょ〜かいりょ〜かい」

いざとなったら山ごと良い感じにしてやるから

どんな風にするかはご想像に任せます

「中に居る者よ！出て来い！！」

新居に住み始めてまだ3日経ってないというのに早くも来客のようだ

「出て来ぬ場合は家ごと消しとばすぞ！！」

穏やかじゃない物言いだな

家に何かしたら俺も黙ってないぞ？

とりあえず外に出てみるか

「何だよ、うるさいなあ」

「な！貴様は！？」

玄関の戸を開けてみれば天狗が1人で驚いていた

顔を見て驚かれる天狗なんて心当たりないなあ

「何故貴様がここにいる!？」

「いや、お前誰だよ」

「貴様!俺の顔を忘れたか!？」

「忘れた?会った事がある？」

「……覚え無いな」

「忘れたも何も初対面じゃないの？」

「き、き、き、貴様!!百年前に天満様の屋敷でお前に剣を避けられた天狗だ!!」

「……ああ!天狗一の剣さん!

思い出したよ。懐かしいな

「そう言えばそんな奴いたね」

「ぬぐぐぐ!……まあ良い。今回はそのような用件で来たの
では無い。この家は貴様の物か？」

「おや?堪えた。また真っ赤になると思ったのに」

「確かにこれは俺の家だけど？」

「誰の許可を得て此処に住もうとしている」

「許可？此処に住むのに俺の許可以外に誰の許可は必要なんだ？此処は俺の山だぞ」

「言つに事欠いて貴様！此処が貴様の山だと！ふざけるな！！」

おやおや、結局真つ赤になつたよ

もしかしてこの人の所為で天狗の顔は赤いなんて伝承が残つたのか？

「あんたもあの時天魔の所で聞いてたじゃないか。あの屋敷は俺が建てた。そしてあの屋敷は鬼や天狗が此処に住む前から建っていた。つまり、この山に最初に住んでいたのは俺って事だろ？」

「その様な戯言など・・・」

「何だつたら鬼や天狗たちで俺に戦いを挑むか？因みに俺は妖怪だろうと鬼だろうと構わずに喰う妖怪だぞ？」

いや、構うけどね

アイツならともかく俺は人の形をしたのを喰う気は無いよ

「何・・・？妖怪を・・・喰うのか？」

今度は顔が青くなった。忙しい奴だなホント、信号機じゃ無いんだから

「と、とにかく1度で良い、1度で良いからせめて天魔様の屋敷に行ってくれぬか？この通りだ」

天狗が浅く頭を下げる

何処と無く態度が柔らかくなった気がする

さすがに喰われたく無いって事かな

「仕方ない、1回だけだぞ」

面倒だけど天狗に玄関先を占領され続けられるよりはマシだ

さて、天魔の屋敷に着いたんだが・・・天魔は何処だ？

まあ良い、勝手知つたる元俺の家だ。適当に探してみよう

まず玄関・・・草履が脱ぎっぱなしになってる

次に居間・・・食器くらい片付けろよ

廊下・・・ちよつと汚れている、掃除も小まめに出来ないのか？

寝室・・・相変わらず障子が開けにくい。おいおい、布団は押入れに仕舞えよ

西側の部屋・・・ここも相変わらずの傾き具合だな。書庫にでもしてるのか本が散乱してる

東側の部屋・・・執務室か？丸めた紙が散らばってる

後はトイレか風呂か、さすがにそこは見に行けない

とりあえず、天魔が片付けられない奴だと判明した

折角家をあげたのに随分な扱いだ

・・・掃除でもしてるか

掃除を始めてから約1時間

天魔はどこかに出かけているのか家の中に居なかった

そろそろ屋敷内が輝きはじめるんじゃないか？というくらい磨きに磨いた

意外と掃除好きな俺だったりする

気配すら感じないのでトイレと風呂もちゃんとキレイにした

3回目の廊下の雑巾掛けをしようとしたら外から羽ばたく音が聞こえ玄関の戸が開く音がした

やっと帰って来たみたいだ、どれだけ待たせれば気が済むんだ？

「何者で・・・きゃーーーーー!!」

誰かが居る気配でも感じたんだろう

大声をあげながら勢い良く部屋に入って来たが俺の顔をみた途端、悲鳴を上げた

何なんだよ！俺はそんなに怖がられる事したか！？

「きゃーーーーーじゃねえ！何時間待たせる気だよ!!」

「な、何で貴方が屋敷に居るんですか!？」

「建てたばかりの家に天狗が来て、頼むからお前に挨拶してくれって言うからわざわざ来たんだぞ？」

「それは詰まり最近山の中腹に出来た家は貴方のですか？」

「ああ、何で俺が自分の山に住む許可を貸してる奴に貰わなきゃいけないんだ？」

言ったらイライラしてきた、平常心だ俺

キレないようにテンションを下げておこう

「は、はい。紫に話は聞いております。大丈夫です、鬼の方々には私から言っておきますので、そのまま住んで頂いて結構です」

それでも雰囲気を感じ取ったのか、少し怯んだ様子で答える

「頼むぞ？それと、屋敷の掃除くらい小まめにやれよ。散らかり過ぎだ」

「み、見たんですか!？」

「暇だったからな。ついでに掃除と片付けもしておいたぞ」

「女性の家に勝手に入るのはどうかと思うのですが・・・」

「だったら鍵くらい掛けて行け」

大体、俺の年齢の半分も生きてなさそうな奴、女性じゃなくて女の子にしか見えないって

とのかく、これではらくはのんびり出来そうだ

河童と烏天狗と天狗（後書き）

感想とかアドバイスとか貰うと作者のやる気が上がります

人里

幻想郷に住むようになってから1ヶ月が経った

偶ににとりが遊びに来る程度で後は殆ど昔と変わらないのんびりとした生活を送っている

今日も縁側で日の光を浴びながら何をすることもなくのんびりしている

「良い天気だなあ」

誰に言う訳でもなく呟いてみる

「そうですねえ。ところでそろそろ取材を受けてくれる気になりましたか？」

「別に構わないけど、ここだと眠くなるなあ」

「そうですね。じゃあ家の中に入ってもよろしいですか？」

「ああ、良い・・・ぞ？・・・何時の間にそこに居たんだ？」

俺の横には何時の間にか天狗の射命丸が座っていた

「四半刻（30分）程前からです」

そんなにか、ちょっとポケットとし過ぎたかな

「まあ良い、取材だったな？今お茶でも入れるから待ってる」

「あやや、ありがとうございます」

「では、最初に何歳ですか？」

「多分だけど1600歳くらい？」

限りなく多分だけど。アイツが何歳かは知らない

「あやや、大妖怪ですねえ。次に能力を教えてください」

「増と減を操る程度の能力と上と下を操る程度の能力と遠くの音を聞き取れる程度の能力、場合によっては増えるかも」

もうアイツが出てこない事を祈ろう

「3つですか！？珍しいですねえ。では貴方の妖怪としての種族は何ですか？」

「ん〜、さあ？」

少なくとも河童や天狗じゃない事は確かだな

「さあ？つて、1人1種族の妖怪ですかねえ？では最後の質問です、恋人は居ますか？」

「居る訳無いだろ！？」

居た事すら無いっての！恋人居ない暦が年齢だよ！悪いかよ！

その後も色々と質問された

答えたくない質問は黙秘させてもらったが

「これで取材はとりあえず終わりです、ご協力ありがとうございました。出来上がった新聞は後日お届けしますね」

「新聞？新聞なんて作ってるのか？」

「はい！あ、前に発行したのを置いていきますね」

射命丸が新聞を取り出し机に置く

……何処から出した？まあ深く突っ込まない様にしよう

「あやあや。新聞？」

「文文。新聞ぶんぶんまゐるしんぶんです」

「気が向いたら読んでおくよ」

「ではでは、また何かありましたらよろしくお願いします」

言い残し飛び去る射命丸

俺ものんびりしてばっかないで少し出掛けるか

とりあえず、その辺を散歩してみよう

山を下りて麓の森に入る

……うわあ~~~~ん

何だ今の？泣き声？

行ってみるか

声のした方に走っていくと数匹の妖怪が人間の少女を襲う所に遭遇した

恐らく何処かにあると紫が言っていた人里から迷い込んだのだろう

さて、本来なら妖怪たちも生きる為だと見捨てる所だが

何かあの妖怪たち・・・キモい

体が全体的にぬるぬるしてる、ナメクジみたいだ

ビジュアル面では圧倒的に少女の勝ちだし、助けよう

恨むなら自分の容姿を恨め

とりあえず、先頭で少女に飛び掛ろうとしてた妖怪に妖力で作った弾をぶつけてみた

意外にあっさりと消し飛んで驚いた

残った妖怪が何だか叫んでいたが無視して次の弾を飛ばそうとしたら蜘蛛の子散らすように逃げ去った

根性の無い奴らだなあ

自分の得物を横取りされまいとする気概がない

楽で良いけど

そんな事より少女だ

見た目は5、6歳くらいの中々可愛い子だ

いや、俺はロリじゃないよ？変態でもないつもりだし

・・・そんな事はどうでも良いんだよ

最初の妖怪を消し飛ばした時は目を見開いて驚いていた少女だが、俺の姿を見た途端更に怖がり出した

ちよつとだけショックを受けても仕方ないと思うんだ

「迷ったのか？」

とりあえず話し掛けてみた

「うん・・・」

「人里の子か？」

「うん……」

「帰り方は分かるか？」

ぐす……

ああ、また泣いちゃった

子供のあやし方なんて知らないし……まいったな

放っておく訳にもいかないし、送っていくか

現在、夕刻の空を少女を抱えて飛行中

空を飛ぶなんて経験、普通に生きてる人間は無いだろう

その証拠にさっきまでの涙が嘘のようにはしゃぎ、笑う少女

何だか初めて妹紅を抱えて飛んだ時を思い出す

……妹紅、元気にしてるかなあ

結構、無茶する奴だし。今度暇になったら探しに行ってみようか

「ねえ、お兄ちゃんは妖怪なの？」

少女の声で考えが中断させられる

「そつだよ。ちょっと鬼も混じってるけど」

「じゃあ私も食べるの？」

「そつだ、って言ったらどうする？」

涙目になってしまう少女

何だろう、可愛いなあ

思わずお持ち帰りしたくなる

「お父さんとお母さんに会えなくなっちゃうのヤダ……」

ヤバイ、本格的に泣きそつだ

「冗談だよ。俺は人間は食べないって」

「ホントに？」

「ああ、本当だ。ほら、人里が見えてきたぞ」

途端に明るい笑顔を浮かべる

和むなあ

思えばこんなに素直な反応を見せてくれる子は初めてかも知れない
いつも癖のある連中としか関わらなかつたし

何て事を思っていると人里の入り口を通り過ぎた
慌てて里の中に降りる

「よ、妖怪!？」

「大変だ!退魔師を呼べ!」

あー、やっぱり騒ぎになるよねえ

手前で降りて人の姿になってから来るんだった

今更後悔しても遅いか

とりあえず、この子の両親を探そう

「お父さん!」

「花!」

おや?この子の父親かな?

少女が一直線に鋏を構えた男性の所に走っていく

そうか、あの子の名前は花って言うのか

「今まで何処に居たんだ！」

「山の近くの森で迷子になっていたんだ。親なら目を離さずに見ていてやれ」

これで用は済んだし、俺も良い運動になった

めでたしめでたしって事で、帰りますか

「待ってくれ！」

後ろから声を掛けられる

「何だ？」

「娘を助けてくれてありがとう。しかし何故、妖怪のあんたが娘を助けてくれたんだ？」

妖怪が人助けするのがそんなに珍しいか？

・・・珍しいんだろうな

普通の妖怪は人間を喰うしね

世知辛いなあ

妖怪ってだけで気軽に参拝や人助けもできやしない

「行く先々で言うんだけど、俺は人間は喰わないんだ。だったら人間を助けてもおかしくは無いだろ？」

「なら、あんたは俺たちの味方なのか？」

「味方でも敵でも無いさ。ただ山の近くで俺が気付いた時は出来るだけ助けてやるよ」

ちよつとだけ、俺かっこいいなんて思ったり思わなかったり

さて、暗くなってきたし、さっさと帰ろう

「ちよつと待ってもらってもよろしいですか？」

何で皆、俺の事を呼び止めたがるんだよ

偶にはすんなり見送ってくれよ

「・・・何？」

振り返ると着物を来た女の子が立っていた

「初めまして。私は稗田阿一と申します。」

「はあ、それで？その稗田さんが何の用です？」

「はい、私は今幻想郷の事を綴った幻想郷縁起と言う書物を編纂しているのですが、妖怪の項目に貴方の事を書き加えたいのでご協力願えませんでしょうか？」

つまりは取材か？1日で何回も取材を受けるなんて面倒な事この上ない

しかし、射命丸と違って真摯な態度でお願いしてきている

これを無視したら何となく後味が悪い

ここは、協力してやってやろう

「お茶とお茶菓子くらいは出してくれよ？」

「受けてもらえますか！もちろんお出しします！では、私の家にお越しください！」

そして俺は稗田の案内で彼女の家に行く事になった

たくさんの人間の目に追われながらだけど

その後、射命丸と同じ様な事を訊かれた

その都度適当に答えていった

なにしろ出された団子の様な物が美味すぎたんだ、そっちに夢中になっても仕方ないと思うんだ

「ご協力ありがとうございます、後日編集して載せたいと思います」

「そうか、じゃあ俺はこれで失礼するよ」

簡単な挨拶をして俺は山に帰る事にした

どんな内容になってるか今から楽しみだ

人里（後書き）

多分、いまの時代での脳内歴史では阿一で良い筈

ちょっと自信無いけど・・・

続・鬼との戦い(前書き)

勇儀姐さんの口調が難しい

これであつてる筈も無い

続・鬼との戦い

口は災いの元なんて言葉がある

俺は今その言葉を痛感している

簡単に言うのだ

現在鬼の大群に囲まれている

何でこうなったかって？

射命丸の新聞の所為だ

書いている途中の新聞に載っていた俺の能力を鬼の1人が見た

そこに最近、所在が不明になっている鬼と同じ能力が載っている

何か関係が有るのでは？と思う連中が出て来る

天魔の話では100年前の俺には角が無かった

お前が何かしたんじゃないか！？なんて考えに辿り着く
俺、鬼に囲まれる

さて、どうしようか

さすがにこの数を相手にしたら俺は肉片に変えられる

まあ、その前にアイツが出て来ると思っけど

「それで！？どうなんだい！？」

目の前にいる体操服の鬼が怒鳴る

俺の記憶が確かならこの鬼、随分前に一緒に宴会をした鬼だ

「だから、知らないものは知らないって言ってるだろ？」

「嘘を吐くな！ならその角はどうしたんだい！？」

「生えて来たって言ってるだろ」

どうにも話が平行線だ、このままじゃ埒が明かない

「百歩譲って俺が何かしたとして、その後どうする気だ？」

「決まってるだろ？私と戦ってもらおう」

決まってるのか？・・・決まってるんだらうなあ

「だからって、その人数で来るのは卑怯だろ」

「勘違いするんじゃないよ！私たち鬼は嘘と卑怯な事は大嫌いなんだ！私1人で戦うさ！」

何だ、だったらまだ何とかなる

一斉に来られたら大変な事になるところだった

まあ、1対1でやるのも面倒なんだけど

と、言う訳で

俺は今、体操服の鬼と対峙している

あれ？おかしくない？

俺が何かした犯人なら戦うって話じゃ無かったの？

それに何時の間に来たのか紫がこっちを見ながらニヤニヤしてるし、
後で嚴重注意だな

「私が勝つたら洗いざらい吐いてもらっからな！」

つまり、犯人だろうが犯人じゃ無かるうが戦うって事ね

………面倒臭い

「……じゃあ、俺が勝つたらどうなるのさ？」

「その時は今後一切、アンタに犯人かどうか訊かないさ」

何だろう？確かに俺がある意味犯人ではあるんだけど……納得い
かない

鬼ってのはどうして何でも戦いたがるんだ？

もっとう話し合いとか平和的で面倒じゃない方法とか考え付かな
いもんかねえ

「さあ、行くよー!」

大体、鬼ってのは血の気が多すぎるんだよ

只でさえ面倒……おっとお!?

体操服の鬼……もう鬼だけで良いや

とにかく、鬼の拳が迫ってきたのを咄嗟にしゃがむ事で避けた

危ない危ない、鬼相手に考え事していると危険だな

あまり速くなくて助かったけど、集中しないと

「ほらほら、どうした！？避けてるだけじゃ勝てないよ！」

次々に繰り出される拳や蹴りを避ける、避ける、避ける

うん、避けるだけなら問題ない

只、流れる様な動きで連続的に攻撃をしてくる所為で反撃できない

しょうがない、このままじゃ埒が明かないし能力で鬼の攻撃の威力を減らして無理矢理反撃しよう

よし、この蹴りの威力を減らして・・・今だ！

ゴキイ！

「何だい？妙な感触だねえ」

・・・嘘だろ？威力を減らした筈なのに鬼の足が俺の脇にめり込んでいる

やばい、肋骨が2、3本折れた

多分だけこの感じ、肺に刺さってる

口の中に血の味を感じる

「アンタ、何かしたのかい？」

今声を掛けるな、痛みで死にそうだ

息が出来ないし、意識が若干朦朧としている

「けど、無駄だったね。私は力の勇儀、何をしようとも私の攻撃は揺るがない」

慢心してた

俺の能力に絶対は無い

とりあえず、能力で痛みと出血を減らす

0に出来ないのが文字通り痛い

「さあ、どんどんいくよー！ー」

やばいやばいやばい！

このまま死んだらアイツが出て来る、それだけは避けないと

山の鬼や妖怪が全滅するかもしれない

いや、別に全滅しても良い気がする・・・って、良くは無いだろ！

出血のショックが何かでおかしくなってるみたいだ
ん？何だ？鬼の動きがゆっくりに見える

脳内麻薬か何かが異常なままでに出てるのか？

けど今は好都合だ、妖力の弾を放って能力で増やす

近付かれたら終わりだ

「何だい？こんなも・・・！！」

よし、怯んだ

行き成り弾が増えれば驚いて当然だ

このまま距離を取っておけば最低限、死なずに済む

その間に何とかまともに動けるくらいに回復を・・・

コンッ

そんな事を考えていたら後ろから弱い衝撃が来た

思わず振り返ると数匹のぬるぬるしたナメクジの様な妖怪が石を投げつけて来ていた

この前助けた少女を襲っていた妖怪だ

俺はすぐに視線を戻した

しかし、ほんの少しとは言え気を逸らしてしまったのはマズかった、致命的と言って良い

目の前には鬼と鬼の拳

能力を使つて軽減する間もなく俺は殴られて意識を手放した

薄れていく意識の中で頭が吹き飛ばなくて良かったなんて考えている俺がいたりいなかったり

「どうした？まさかこれで終わりなんて言わないだろうね！」

挑発の言葉を掛けながら様子を見る

しかし、あの妖怪はぴくりとも動かなくなってしまった

まさか本当にこれで終わりかい？呆気なさすぎるだろう

加減をし忘れたけど多分死んじやいないだろうね？

とりあえず確認だけでもしておくか

「グロアアアアアアアアアアアアアア！」

あー、出てきちゃったかー

こうなったら俺でも止められないし

多分また見てるだけなんだろうなあ

「な、何だい！これは！」

まあ、驚くよねえ

いきなりこんなのが出て来れば……2回目だからか？やけに落ち着いてるな

多分、こんな事になればどうにか身体の制御を取り戻せないか必死になると思っただけだなあ

……諦めたのか、俺？

「がはあっ！！！」

さっきの鬼がまるで玩具みたいに吹き飛ばされていく

まったく、嫌になるね。俺が負けた相手を軽く倒すとか、嫌味にしか見えないっての

ん？止めでも刺すのか？

ゆっくりと鬼に近付いていくけど……また喰う気か？

「やめなさい！それ以上やったら死んでしまうわ！！！」

紫が前に出て止めようとしてるけど、その程度じゃコイツは止まらないと思うぞ？

「やめなさいと言ってるでしょう!！」

妖力の弾を飛ばしてくる

馬鹿! 攻撃するな!

ほら見る! コイツの標的が紫に変わったじゃないか!

すぐに逃げろって!

「グルルルルルルルルルルル」

おい! お前も紫を喰う気になってるんじゃない!

「出来ればやりたくなかったけど・・・貴方が止まらないならしょうがないわね」

紫が片手をこっちに向けてくる

多分、お得意の境界を使って何かする気なんだろう

なんて考えてたら視界がぶれた

そして気がつくとき紫の片手を喰い千切っていた

「きゃ ああああああああ!！」

痛そうな悲鳴を上げる紫

見れば肘から先が無くなっている

って言うか、紫不味いなあ

こんな時になんだけど、栓を開けてそのまま2、3週間放置したワ
インみたいな味がする

しかしながら、さすが大妖怪だ

これだけでコイツは満足したらしい

段々意識が無くなってくる

目を覚ました時に紫になんて説明しようか考えながら俺は手放した

狐の看病と黒い少女（前書き）

遅くなりましてスイマセン

散々悩んでこんな感じになりました

狐の看病と黒い少女

「……………ん？」

目を覚ますと見慣れた天井が見えた

「……………俺の家？」

確か……………アイツが出て来て……………紫の腕を喰って、それから……………

「何で俺の家に？ご丁寧に布団まで敷いてくれちゃって」

一体誰が？

まあ、とにかく目も覚めた事だし

水でも飲みに行こう

「おや？目が覚めましたか」

何で此処に九尾の狐がいるんだ？

「確か・・・藍だったか？何で此処に？」

「紫様が傷を癒しておられるので、代わりに私が貴方の看病をしてたんですよ」

看病・・・ねえ

代わりって何だ？

傷が無ければあいつが看病してたみたいな言い方だな

つと、そんな事より

「あれからどうなった？」

「鬼の大半が貴方を恐れてました。『妖怪を喰う妖怪なんて始末しろ』なんて事も言っていましたし、当事者2人のとりなしがなければ殺されてましたよ」

「当事者？」

「はい、紫様と貴方が倒した鬼・・・勇儀と言うんですけど、彼女が起きた後に『勝負は勝負、完膚なきまでに負けた相手を気絶中に殺すなんて卑怯な真似出来る訳無い』と、言っていました」

成程ねえ

流石、嘘と卑怯を嫌う鬼だ。命拾いしたな、主に鬼達が

「それでも、今後鬼達に狙われるでしょうけどね。

それと、紫様が嘆いてましたよ『結界を張る準備が滞る』って」

ああ、結界を張る何て事も言ってたな

いや待て、不吉な事言わなかったか？

「後、『これは是非、責任を取って貰わないと』だそうですね。災難ですなえ？」

・・・何をさせられるんだろう

鬼たちの事も考えると逃げた方が良いか？

「『逃げたら地の果てまで追いかけるから、覚悟してなさい』とも言っていましたよ」

逃げ場無し・・・覚悟を決めるか

？、そう言えば

「お前は俺が怖くないのか？」

「怖かったら此処に居ませんよ。ある程度なら紫様の奇行で慣れますし」

そうですね

「さ、そろそろお粥が出来上がりますので少し待っていてください」

「そうか、結婚してくれ」

何となく藍の労わりの心が嬉しくて言っちゃったよ

「浮気したら紫様に何をされるか分かりませんか？大人しく待っていてくださいね」

笑いながら台所に向かっていく

うぬう、まず誤解を解くことから始めなければいけないのか

全然、本気じゃなかったけど

お粥を持って来てくれた藍は

・・・紫のスキマもそうだったけど、方向感覚が無くなるな

入り口はすぐに閉まる仕様なのか？

・・・出口はどこにあるの？

あ、自分でつくるのか

え、織細な感じで・・・と

よし、できた

飛び込めえ！

・・・今回の教訓、スキマに不用意に飛び込んではいけません。目の前に地面がある可能性があります

地面に頭がめり込むの何て初めてだよ、マンガじゃ無いんだから

さて、ここはどこだ？

適当に繋いだからなあ

見渡す限りの森としか分からない

何だか昔を思い出すねえ

とりあえず、飛べば何か見えるだろう

いざ、飛び立とうと思ったら・・・何だ？あの黒い塊

こっちに近付いて来る

って言うか、飲み込まれた

何も見えねえ

・・・？

何だか変な気配を感じる

カプッ

「いつてえ！！」

何だ！？何かに噛み付かれた！？

「ちょ！誰だ！俺に噛み付いてる奴は！？」

「ううゝ、美味しくない・・・」

「当たり前だ！美味くてたまるか！！」

叫んだ途端、辺りの黒い空間が晴れて辺りを見渡せるようになった

そこに居たのは黒い服をきた少女

しかも、俺の腕に噛み付いている

「おい、離せつて」

「あれ？あなたは人間？」

「何処を如何見たら俺が人間に見える？」

「おかしいなー？人間の臭いがしたと思ったのに」

臭うか？

人間の時の名残にしたって、既に残って無いだろう？

「臭いはともかく、俺は妖怪だぞ？」

「そーなのかー」

「大体、あの黒いのはお前の能力なんじゃないのか？自分の能力なのに中で何も見えないんじゃ問題だろ」

「そーなのかー」

「・・・ちゃんと分かってるのか？」

「そーなのかー」

イラッ

「お前は「ねえねえ」「あん？」

「あなたは誰？」

アホな子が

説教でもしてやろうかと思ったけど、意味が無さそうだ

「俺は灰刃、妖怪だ」

「わたしはルーミアだよ」

ここに居ても時間の無駄だな

さっさと帰ろう

「そうか、ルーミア。俺はもう帰るから、じゃあな」

「うん、バイバイ」

結局なんだったんだ？

スキマ迷子

ルーミアがふよふよと何処かに飛んでいくのを確認してから再びスキマを開いて移動する

スキマを開くのも慣れてきた

後は出口の調整だ

何故、鬼の集落のど真ん中に出るんだ

ほら、鬼たちがすっごい睨んでくるじゃないか

「あんたは・・・何だい？再戦でもしに来たのかい？」

この鬼は、確か藍が勇儀とか言ってた鬼か

「いや、偶然迷い込んだだけだ」

「何だ、詰まらないねえ」

詰まる詰まらないじゃなくて

周りの鬼たちを何とかして欲しい

これじゃ全然落ち着かないよ

「勇儀！何を暢気に話してるんだ！そいつは妖怪を喰う妖怪だぞ！」

鬼のお兄さん登場

やっぱり警戒するよねえ

「それがどうしたんだい？あいつが私たちを喰うつもりならとっくにそうしてるぞ」

喰うつもりは毛頭無いけど

「大丈夫だって、アイツは俺が死ななきゃ出てこないから」

「信じられるか！それにアイツって誰だ！？」

鬼のお兄さん・・・鬼おにいさんは人を信じる事を学ばなきゃ

「そつだ、あんた名前は何ていうんだい？」

「俺は灰刃。しがない妖怪さ」

「私は勇儀。しがない鬼さ」

自己紹介した鬼の第1号だ

やったね！

……俺、社交性無いのか？

いや、きっと鬼と相性が悪いただけだって

2回とも鬼に殺されてるし

「どうだい？お茶でも飲んでいくかい？」

「周りの鬼の視線が痛いから帰るよ。元々、偶然来ただけだしな」

「そうだね。じゃあ今度、私が灰刃の家に遊びにいくよ」

「ああ、それなら良いな。待ってるよ、勇儀」

とりあえず、歩いて鬼の集落の外に出る

さて、今度こそスキマを家に繋げよう

さて、このスキマ

全然安定する気配を見せない

何度開いても家に辿り着けない

山の中、湖、森、薄暗くて気味の悪い川、桜が咲いてる庭、多分外
国の街の中、海

スキマを開く度に頭だけ出して確認してみる。1回溺れかけたけど

一度、無数の向日葵が咲いてる所に出た時に見覚えの有る緑髪が居
たので慌ててスキマを閉じた

しっかり目が合った気がするけど、大丈夫だろう

何時になったら帰れるのか………って

飛んで帰ればよくな？

なんで気付かなかったんだ！

スキマで帰らなくちゃいけないなんて誰も言っていないじゃないか！

あ〜〜、しなくても良い苦労をした

帰って不貞寝しよう

よし！そうと決まれば早速最後のスキマを開こう

ようやく家に帰れるぞ

「何で貴方が此処にいるのかしら？」

スキマを開いた先はスキマの中でした

「え〜とと・・・ちよつと通りかかって？」

俺のスキマは何を考えてるんだ！！

「私のスキマの中を通りかかる妖怪なんて居る訳無いわ。

それに貴方、今スキマを開いていた様に見えたのだけれど？」

「これには深い事情があつてね」

「ならその事情とやらを聞かせてくれないかしら？」

「いや、長くなるんでまたの機会にでも」

「時間ならたっぷりあるから平気よ」

「俺は時間が「あるわよね？」・・・はい」

何だろう？片腕が無いのに威圧感が半端無い

覚悟を決めるか

「と、言う訳だ」

「出鱈目な話ね」

何とか理解してもらった

因みに、俺が元人間って事は言っていない

その方が面白そうだから

俺が死んだ時にアイツが出て来くる事と食べたものを吸収する程度の能力の事を話したただけだ

「もう帰って良いか？疲れたよ」

「まだダメよ、鬼たちが言っていた鬼は結局貴方の仕業なの？」

「ああ、あの鬼に殺されたからな。ある意味、仕方なかった」

「そう、それは良いわ。で、本題よ」

本題？まだ何かあったか？

「私の腕を食べた責任を取ってもらおうわ」

嫌な予感しかない

いざとなったらスキマを使って逃げよう

「責任を取って私と結「離脱！！」こ……ん……」

不穏な空気を感じ取って！今！開け！俺のスキマ！！

出口が何処だろうと構わない！

この場を離れるのが先決だ！

「また、逃げられたわね」

彼が開いたスキマがあった場所を見つめてみる

「でも、覚えておく事ね。傷が癒えればもう逃げる事は出来ないのよ？」

とにかく今は傷を治す事を最優先にするけど、スキマの扱いは私の方が上手いのだからね？

何時までも逃げ続けるなんて出来ない事を嫌って程、味あわせてあげる

「さて、逃げたは良いが・・・何で家の前？」

散々俺を裏切ってきたスキマが行き成り素直になった

「・・・帰って来られたし、まあ良いか」

さて、寝るか

幸い布団は出しっぱなしにしてある

すぐにも布団にダイブ出来るぜ

「あ、やっと帰って来た！」

「遅かったじゃないか」

「道にでも迷ってたんですか？」

何で俺の家に河童と鬼と天狗がいるんだ？

「あ、私は天狗じゃなくて烏天狗です」

「さらつと心を読むな！」

何なんだよ

やっと寝れると思ったのに

「お兄さんが倒れたって聞いて心配になって来たんだよ？」

「さつき、家に遊びに行くって言ったろ？」

「何だか事件の匂いがしたんで取材に来ました」

「にとりは心配してくれてありがとう。勇儀は普通は別の日に来ると思うだろ。射命丸は帰れ」

人が疲れてるって言うのに取材なんて受けたくないっての

「良いじゃないか。上等な酒を沢山持ってきたんだ、皆で宴会といこうじゃないか！」

勇儀、また俺の肝臓にダメージを与えるつもりか？

断らないけど

「そうだ、にとりに渡す物があつたんだ」

下つ端故に宴会の準備に慌しい射命丸を横目にとりに話しかける

「え？何々？」

押入れからでかいリュックサックを持つてくる

「これだ、前に家を建ててもらったからその礼だ。能力で強化してあるから見た目の数倍の物を入れられるし破れない燃えない濡れないの三拍子揃ってる」

中の容量を増やして耐久力と耐火性と防水性を上げてある

中々の仕上がりだと自負していたりする

「おー！ホントにもらっても良いの？」

「ああ、お前の為に俺が頑張つて縫つたんだぞ」

「ありがとう！大事にするよ！」

これほど言んでもらえるとは思わなかった

実は家事全般が得意なんだぜ？

普段は面倒だからやらないけど

「準備ができましたよー！」

お、出来たか

行くか宴会場と言つ名の戦場に

次の日、しっかりと二日酔いになつたのは言つまでも無い

フラワーマスターと（前書き）

大分遅れてしまい申し訳ありません

少し忙しかったもので

とりあえず、どうぞ

フラワーマスターと

コンコンコン

ある夏の暑い日

家の戸が叩かれた

しかし、俺は周囲の温度を下げ、快適に寝ていた

コンコンコン

「…ん…違ってる…そこは回す所だから…」

コンコンコン

「…違っつて…捻るんじゃなくて……回す所……」

コンコン……ドガアアアアアアン！！！！

「おおお！？何！？何事！？空襲か！？」

「お邪魔するわね？」

そこに立っていたのは緑の髪の女性だった

「あれ？…どっかで会った事ある？」

使い古されたナンパみたいだ

「ええ、少し前と大分前に」

少し前……スキマに翻弄された時か

けど、大分前って何時の事だ？

俺って忘れっぽいしなあ

「思い出せない？」

何だろう？満面の笑みなのに寒気がする

「少し前ってのは覚えてる。確か花畑にいたよな？」

「正解よ。大分前の方は？」

大分前… 大分前…

……

……

『私の花畑の何処が可笑しいの？』

…今なんか思い出したような気がする

どこで聞いたんだっけ？

あれは確か…妹紅が近くにいたような…

山の中で…妹紅と別れる少し前だったような……

「思い出せたかしら？」

「ちよっと待ってくれ、もうすぐ出てくるから」

……あ……思い出した

慧音さんの家の近くの山に居た妖怪だ

「思い出したよ。極太レーザーをぶっ放して来た妖怪だろ」

「れーざー？マスタースパークの事？まあ、多分正解ね。風見 幽香よ」

俺が思い出したのが嬉しかったのか、にんまりと不吉な笑いを向けてくる

「それで、何故あなたが妖怪になっていて、尚且つ此処に住んでいるかを聞かせてもらいましょうか？」

妖怪になっていて？……ああ、初めて会った時は人間の姿だったわけ

「俺は元々妖怪だぞ？」

「そんな筈無いでしょう？あの時、確かにあなたは人間だったわ」

「あゝ、それはだな」

「ふうん、そう言う訳だったのね」

納得してくれた

俺って事ある毎に説明している気がする

めんどくさー

もう疲れたよ

「なら、私と戦ってもらおうわ」

何がどうなってそうなるのか？

全然解らないよ

「面倒だから嫌だ」

「あなたに負けてから私も随分と自分を鍛えたのよ？もう遅れを取る事はないわ」

「話聞けー？」

「さあ行くわよ」

「話を聞けって」

「場所は…そうね、山の向こう側に開けた所があるからそこにしましょ」

「もしもーし？聞こえてるー？」

「そうと決まれば早速向かうわよ」

「はあ、分かったよ。行けば良いんだろ？」

俺の家の中で暴れられるより素直に従っておこう

家が無くなるよりもずっと良い

その後、幽香によって破壊された玄関を見て絶望したりもしたけど

幽香に案内されたのは人里とは真逆の方角の荒野と言う表現がよく
似合う場所だった

「始めましょうか？」

「もう好きにしてくれ……………」

なんて事を言ったのがいけなかった

言い終わった瞬間、幽香がこちらに飛び掛ってきた
迫る拳を能力で威力を減らす

人間の大人に殴られた程度の衝撃がくる

確かに鍛えたと言うのは嘘ではないらしい

昔は子供程度だった事を考えれば随分と強くなった

生憎、妖怪の身体では全然効かないのは変わらないけども

その後も幽香の放つ拳や蹴りを一見無防備に受け続ける

その悉くしつぷくを減じる

「相変わらず厄介な能力ね」

動じた様子も無く幽香が言う

「ああ、俺も気に入ってる」

家を壊された恨みも込めて挑発してみる

「そう、だったら私も奥の手を使わせてもらおうわ」

言った瞬間、幽香の右の拳に妖力が集まりだす

って言うか、奥の手だすの早くね？

「私の能力は『花を操る程度の能力』所詮、戦闘には向かないわ。だったら小手先でもなんでも良いから自分を鍛えるしかない」

続いて左手の日傘に妖力が集まる

「行くわよ？マスタースパーク！！」

突き出した日傘から昔にも見たレーザー、マスタースパークとか言っただけ？が放出される

あれは距離が近すぎると減らしきれない

今回も距離は5メートルも無い

減らしきれない距離ではないので当然避けるしかない

しかし、避けた途端、マスタースパークがいきなり途切れ、背後に気配を感じる

最早、物理的な衝撃があるのでは？と勘違いしそうな強烈な殺気だ

咄嗟に後ろを向いて防御をしようとするが間に合わない

妖力を纏った幽香の拳がクリティカルヒットして強制的に空を飛ばされる

痛い、かなり痛い

が、耐えられない程でも無い！

着地と同時に幽香に向かい飛ぶ

あまりにも予想外だったのか、驚きで身体が硬直してしまっただらしい

「妖力を込めるならこれぐらいは込める！」

幽香と同じように拳に妖力を込め、更に能力で妖力を増やしてやる

その拳を振り上げる様に幽香にぶつける

ギリギリで何とか防御した幽香が有得ないくらい高く飛んでいく

100メートル程上空に飛んだ所で幽香が姿勢を整える

「まいったわね、あれが通用しないなんて……………」

滞空しながら呟く幽香

独り言のつもりなんだろうけど……………

生憎、俺は遠くの声なら能力の所為で聞き逃さない

「だけど、素直に負けを認める訳にもいかないわね」

そう呟いて幽香は妖力を集中しだした

そして、マスタースパークの雨が降り注いだ

半ば自棄になった幽香が極太レーザーを乱射しだしたようだ

だけでも、100メートル近い距離があれば十分だ

能力を使用してレーザーの威力、妖力を減らす

結果、幽香の手からでたばかりのマスタースパークは徐々に小さく
なっけていき、ついにはか細い光の線になってしまう

これなら、あたったとしてもダメージなんて微塵も無い

……何か良いなあ

俺も必殺技みたいなのがほしい……

……手始めにマスタースパークを真似してみようか

光の雨の中でそんな事を考える

同じ様に手から出すんじゃ芸が無い

となると、どこから出すのが良いかな？

足か？……俺の身体はそんなに柔らかくないな

上空に足を向けるなんて……股関節が外れる。却下だ

口か？……これも却下だな

どこの怪獣だよって話になる

翼から？………良いじゃない

翼のどこから出すか

やっぱり、先端？それとも真ん中辺りから？いつその事全体からとか？

そつだ！翼を両方とも前に突き出して真ん中からだしてみよう

前に突き出して、と

名前は何にしよう、ウィングスパーク？オリジナルスパークとかも良いな

まあ取り合えず

「必殺技試作1号！！」

叫んでから妖力を解き放つ

すると、幽香のマスタースパークの倍近い太さのレーザーが飛んでいく、飛んでいくんだが……

「前が見えねえ」

なんてこつた！とんだ欠陥技だ！

要再考だな

とりあえず、幽香は試作1号に直撃こそしなかったけど、余波を受

けてどこかに落ちてった

……まあ良いか、流石に死にはしないだろうし

さて、家に帰って玄関の修理だ

自分でやるか、にとりに頼むか

……自分でやろう

最近、建築作業してなかったからなあ

負けた………

完全に負けた………

これまで自分を鍛え続けて、これなら勝てると勝手に思い込んでいた
最初に会った時に彼の力の強大さに怯え思わず負けを認めてしまっ
たのが悔しくて

大妖怪と呼ばれてから初めて出会った自分より強い相手に憧れて

何時か越えて見せると誓ったのにも関わらず

彼は私を軽々と越える力を持っていた

しかも、人間だと思っていた相手は実は妖怪だった

人間の寿命は短い

彼が生きている間に彼を越えなければと思っていた

「フフツ……フフツ……アハハハハハハハハ！」

自然に笑いがこみ上げる

相手が妖怪ならば何も問題は無い！

彼の背中を追い掛け続ける事ができる！

自分を鍛え続ける理由ができる！

だから私はここにまた誓いを立てる

「何時か私は貴方を越えてみせるわ！！」

何年、何十年、何百年掛かるか分からないけれども、必ず私は貴方を越える！

首を洗って待っていないさい！

三途の河で

あれから数百年、されど数百年

何年経ったかは訊かないでくれ、数えてないから

幻想郷では色んな事があつた

稗田阿一とその生まれ変わりの阿爾、更に生まれ変わりの阿未が亡くなったり紫に追いかけられたり

事あるごとに鬼に喧嘩売られたり紫に追いかけられたり

河童たちとキュウリと科学の関係について話し合ったり紫に追いかけられたり

天魔の愚痴を聞いたりキレて紫を追いかけたり

まあ、概ね平和だったって事だ

俺の家も今では河童、鬼、烏天狗の溜り場と化している

お前ら、たまには他の場所でやれと言いたい、声を大にして言いたい
しかし、烏天狗が言うには

「灰刃さんは妖怪と鬼と天狗に嫌われてるじゃないですか」

だ、そうだ

確かに俺に友好的なのは、にとりと勇儀と射命丸くらいで後は嫌われている

だけど、唯一河童にだけは種族全体に好かれてる

生活水準を上げる為に色々とお願ひしたのが効いてるらしい

人里の連中にも受け入れられている

女の子を助けた事が今でも伝えられている

いっその事、人里に引越そうと思った程だ

紫の頼みで幻と実態の境界を張る手伝いをしてから幻想郷にも妖怪が増えた

その後、すっかり紫に追いかけられたけど

とりあえず、これで最低限のバランスは取れるらしい

それなら、しばらく幻想郷はこのままで保つ訳だ

よろしい、それなら旅に出よう

幸い俺のスキマも言う事を聞くようになってきた

今度は外国にでも行ってみるか

妹紅探し？面倒臭いから今度、気が向いたらな

『旅に出ます、探さないでください』

「書置きはこれでよし」

こんな文面の書置き、実際にやるなよ

そんな心の片隅からの突っ込みを無視して外に出る

「さて、どこに行くかな」

この国は既に隅々まで行き尽くしたと言っても過言じゃない
なので、今回は外国に足を伸ばす

「あれ？お兄さん、どっか行くの？」

振り返るとにとりが立っていた

「にとりか。ちょっと旅にでも行くこうかと思ってね」

「ふーん、そう言えば初めて会った時も旅から帰って来たとか言う
てたっけ」

「ああ、そんな訳だから他の連中にも言っといってくれ」

「分かった、それで何時頃帰ってくるの？」

「気分次第だな。俺にも分からん」

「そうなんだ……うん、いってらっしゃい」

「おう、いってきます」

にとりに見送られながら空に飛び上がる

スキマを開いて中に飛び込む

さて、何処に繋げようかな

到着……！……此処は何処？

スキマから出ると何時か見た薄暗い河に出た

俺の曖昧なイメージを受け取ったスキマが何処に繋がれば良いか考えた結果、ここに繋がたんだろうけど・・・

「おや？お客さんかい？」

不意に後ろから声を掛けられる

振り向くと、鎌を持った青い着物風の服に白い・・・何だろう？エプロン？みたいな腰巻？みたいな物を着けた赤髪の女性が立っていた

「客？ここは何かの店か？」

「最近の死者は喋るのかい？時代は変わったねえ」

「いや、死んでないし。って言うか、此処は何処だ？」

「死んでない？死んでないのに三途の川に来たのかい？」

「質問に質問で返すな……と、言いたい所だけど……成程、此処は三途の川か」

「で？生きた妖怪が三途の川に何の用だい？」

「いや、特に用は無い」

「何だ、冷やかしかい。冷やかしなら帰りな」

「ああ、そつとせて貰つよ」

踵かかとを返して立ち去ろうとする

「お待ちなさい」

……呼び止められるのも慣れてきたな

「はいはい、何ですか？」

半ばづんざりしながら振り返る

……帽子？

やたらと豪華な青い帽子が浮かんでいた

「三途の川では帽子が喋るのか？」

「誰が帽子ですか！もつと下です！」

怒鳴る帽子の言う通りに下を見してみる

そこには緑髪の金色の装飾の付いた青い服を着た少女が立っていた

そんな様子を見た赤髪はそそくさと逃げ出していた

「えくと、誰？」

「私は四季映姫・ヤマザナドゥ、閻魔をしている者です」

「その閻魔が俺に何の用だ？」

ん？今、眉毛がピクツと動いたけど・・・何か気に障ったか？

「その前に、あなたの言葉使いをどうにかしなさい」

あ、分かった

この人、面倒臭いタイプの人だ

「はいはい、分かりましたよ」

こういうタイプは表面上は合わせておけば面倒が減る

「返事は一回で良いと子供の頃に教わりませんでしたか？」

「はい」

合わせようとしている筈なのについつい挑発じみた事をしてしまう

「……良いでしょう。あなたの日頃の行いの事も含めて少し説教をしてあげましょう」

日頃の事？

この人とは初対面の筈なんだけど

「大体においてあなたは怠惰が過ぎます。いくら長い時間を生きてきたとしても限度と言うものがあります」

余計な事を考えてたら説教が始まってしまった

「そもそもあなたは……………」

1 時間経過

「鬼との無意味な戦闘行為も褒められた事ではありません。それに……………」

「ふあ……………」

おっと、つい欠伸あくびが

「聞いているのですか!?!」

「聞いている聞いている」

「まったく、つまりですね……………」

2時間経過

「同胞である筈の妖怪を喰うなんて事はもってのほかで……………」

…

「ZZZ……………」

「起きなさい！」

「おっ？ああうん聞いてる聞いてる」

「嘘を吐かないでください！」

「本当だって」

「……………」

「あれ？終わり？」

「！……まだです！」

3時間経過

「……おいおい……やめろって……そんなに入らないから……」

「起きなさい！！！」

「はっ！何か良い夢を見ていた気がする」

内容は忘れたけど

「はあ、そういえばあなたは無数の生物の集合体と言って良い存在でしたね。私の能力が及ばない訳です」

何で知ってるんだろう？

まあ、良いか

「あんたの能力って？」

「誰があんたですか！名前で呼びなさい！」

気難しい人だなあ

「で？映姫の能力は？」

「敬称くらいつけなさい。白黒はつきりつける程度の能力です」

「白黒はつきり、ねえ」

そりゃ、俺のは効かないさ

俺の中には少なくとも鬼が1匹と紫が少々、アイツとアイツが今まで喰ってきたものが入ってる

ある意味、曖昧と言う言葉が服着て歩いてる様なものだからな

簡単には白黒つけられない

「別に興味無いけどね。それじゃ、俺は飽きたから行かせてもらおうわ」

「……貴方には何を言っても無駄のようですね。良いでしょう、しかし、その怠惰な所は直さなければいけませんよ。さもなければ地獄行きは免れません」

「」忠告、感謝しておくよ。それじゃ」

スキマを開いて中に入る

さて、今度こそ明確にイメージしなければな

三途の河で（後書き）

感想などお待ちしています

吸血鬼一家（前書き）

執筆速度がどんどん遅くなっている気がする……

そんな事はさて置いて、今回オリジナルな展開&キャラクターをだしてみたり

ちょっと自信無い感じだったり

吸血鬼一家

俺は今……何処だっけ？何か…外国に来ている

確か地図で言うと、左上の辺りだった筈

国の名前って覚えにくいよね

とにかく、その外国の街中で優雅に紅茶なんて物を嗜んでいる

ちゃんと人間の姿だ

服は元のままだと違和感が半端無いので、むしろ堂々とそのままにいる

おかげで視線が痛い痛い

でも、それがその内快感に変わって……こないな

最初は言葉の壁を心配したけど、紫の知識の中に言語関係のものがあつたらしく苦労は無い

喰つといて良かったと言うか何と言うか……複雑な気分だなあ

まあ、ここには紫は居ないし、喧嘩売ってくる輩も居ない

何百年ぶりかの平和な時間だ

治安がそこそこ悪いのも良いね、追い剥ぎを返り討ちにしての収入のおかげで生活に困らない

しばらくはのんびりと過ごすのも悪くないな

景色は綺麗だし、飯は美味しいし

「処刑だ！」

そう、処刑も良いねえ………処刑？

「教会前の広場で公開処刑だ！」

何だ？………穏やかじゃないな

見れば若い男が騒ぎながら駆けていく

「吸血鬼を火炙りにするぞ！」

………世知辛いねえ

吸血鬼が何だって言うんだよ

そんな事で一々処刑なんてやってるのか？この国は？

しかも、わざわざ公開までして

そんなの内々で済ませば良いものを

……俺には関係無い話だ

それでも話の種に見ていくか

教会前はすごい人ばかりだ

この国の連中は暇人ばかりか？辺りはもうすっかり夜だったのに

やれやれだな

お？あれが吸血鬼か？

見た目は若い男が一人、同じく若い女性が一人、十字に組んだ木材に磔にされている

それに……生まれたばかりの赤ん坊が布に包まれ男に片手で持たれ泣いている

赤ん坊まで処刑するのか？…気に入らないな

「これより邪悪なる吸血鬼の処刑を開始する！」

生まれたばかりの子までが邪悪？ふざけてる

「この者たちは自身を人と偽り、領主としてこの地を荒廃させようとした！これは許されざる大罪である！」

恐らく神父であろう男が大声で集まった民衆に演説を繰り広げる

その声が妙に耳障りだ

「よって、この者たちを火炙りとし、せめてその身を浄化するものである！」

ブチン、自分の中で何かが切れる音が響く

火炙りが浄化？ただ人外を恐れているだけだろうか？

もう、我慢出来そうも無い

「神のご加護を！」

処刑人らしき男が火のついた松明を十字の下に置かれた薪に近づける

たちまち燃え上がる十字架

「滅せよ、悪しき魂よ！」

男が赤ん坊を火の中に投げ入れようとする

正直、部外者である自分は不干涉で行こうと思っていた

しかし、これは余りにも理不尽だ

あの吸血鬼夫婦は何かしらの悪事をしたのかも知れない

だが、生まれたばかりの子供には罪は無いと思う

「お願いします！子供だけはどうかお助けください！」

磔にされた女性が懇願する

「しづとい悪魔め！さっさと地獄に落ちろ！」

男は構わずに赤ん坊を火に投げ入れる

限界だ、助けよう

周りの人ごみを気にせず元の姿に戻る

途端に周りが混乱に包まれる

「あ、悪魔だー!!」

「いやあ!! 神様!!」

「助けてくれー!!」

国が変わっても人の反応は変わらないんだな

騒がしい民衆を無視して飛び出す

人だかりの結構後ろの方にいたが、あっという間に辿り着く

神父らしき男が「退け、悪魔よ!」何て事を言ってるがこれも無視する

周囲いる兵士つばい奴らを能力で地面に滅^めり込ませる。これも何時の間にか出来る様になっていた能力の応用だ

滅と言う文字がついてれば何でも良いらしい

とりあえず、投げ込まれた赤ん坊を拾い上げようと火の中に手を入れる

熱い、燃えるようだ。って燃えてるっての

かなり、熱かったが何とか拾えた

赤ん坊は随分と火傷をしていてぐったりしている

心苦しいが後回しだ

火を消さなければ

俺は翼を動かし、強風を送る

すると、風に耐え切れなかった薪が吹き飛び、既に引火していた十字架の火が消し飛ばされる

すぐにロープを切って夫婦を担ぎスキマに放り込む

少なくとも、スキマの中なら安全だ

ばしゃっ！

背中が冷たい、水を掛けられたようだ

「何！？聖水が効かないだと！？」

「悪いが俺は純和製だ、そんな物効くか！」

言い残し、俺自身も赤ん坊を抱えたままスキマに入る

繋ぐ先は何処でも良い

とにかく治療してやらないと

吸血鬼一家の処刑があった街から数十キロ地点の森の中

山賊か何かが使っていた小屋の中で治療をする事にした

因みに、山賊たちは丁寧をお願いをして引越しをしてもらった

さて、まずは赤ん坊を治療しないと

多分、薬を使って何て悠長な事をやってたらこの子は助からない

必然的に妖力、霊力を使つての治療になる

つて言つても力を使つての治療なんてした事無い

ぶっつけ本番、やるしかないか

とりあえず治癒の意思を込めながらこの子に霊力を注いでみよう

何となく霊力の方が治癒には向いているイメージがあるからな

力を使うには明確なイメージが大切だ

……その辺で治癒系の能力を持っている奴を喰ってきた方が早い
気がしてきた

まあ、そんな訳にもいかないし、頑張るしかないか

いざとなったら数年前に封印した、あの力を使おう

……何とかなったな

赤ん坊は少し痕が残ってしまったが大体治った

夫婦の方も問題なく治った

何でもやってみるもんだ

結局、封印を解いて神力を増やして治癒にあてた

これで俺も神の仲間入りか

いや、再封印するけどね

しかし、気のせいか昔より神力が強くなったような……

「う、ううん……ここは？」

お、吸血鬼の男が起きたみたいだ

「……私は……！……レミリア！レミリアは無事か！？」

レミリア？この子が奥さんの名前か？

「落ち着けよ。あんたの奥さんも子供も無事だ」

「そうか……貴方が助けてくれたのか？」

「あまり喋るな、病み上がりなんだからな」

言うと、安心したのかまた寝てしまった

しばらくはここでの看病生活になりそうだ

とりあえず、食事の用意から始めよう

……お粥で良いのかな？

この国の消化に良い食べ物なんて知らないしなあ

赤ん坊にはミルクで良いのか？

一番良いのは母乳だろうけど……あの様子じゃ無理そうだしなあ

こんな事なら少しはその手に関する事を学んでおけば良かった

時間なら腐る程あったのに

とにかく、やれるだけの事をしてやろう

それが助けた者の責任ってものだ

「このオカユという物は不思議な食べ物だね」

あれから数日

吸血鬼夫婦は普通に喋れる程度まで回復した

「不思議って……俺の国を代表する病人食だぞ？」

正確には怪我人だけど、病人食

日本語って難しい

「あなた、せつかく灰刃さんがつくってくださいっただんですよ？」

「分かっている。感謝してもしきれないさ」

夫であるラドウ・スカーレットと、その妻ローレン・スカーレット

そして、その娘のレミア・スカーレット

この夫婦はこの辺一帯の領主をしていたそうだ

先祖代々吸血鬼の家系であり、先祖代々この土地を守り続けている

だが、ここ数年で宗教の縛りが強まり、少し油断していた所を使用人に見られ正体がバレてしまった

しかし、この土地を逃げ出す気になれず何とか説得できないかと思

っていたが決裂

娘を人質に取られ、甘んじて処刑を受ける事になってしまった

……何て言うか、ありがち？

正直にそう言ったら力なく笑っていたが

以上、回想終わり

それにしても、早く回復してくれないと困る、非常に困る

特にローレンさんの方

何で俺がレミリアのおしめを取り替えてあげなくちゃいけないんだ

まだ自分の子供もいないってのに

レミリアも何故か俺に懐いているし

このままずると世話するハメにならなきゃ良いけど

吸血鬼一家（後書き）

何だか微妙な感じだったり

ちゅうじやく(前書き)

タイトルに深い意味はありません

「お兄様、いますか？」

部屋の外でレミリアが呼んでいる

「どうした？レミリア」

ドアを開け、レミリアを部屋の中に招きながら訊く

「今日は絵本を読んでくれる約束ですよ」

小さな身体で精一杯に胸を張り約束を主張してくる

「ああ、そうだったな。分かった、おいで」

言い終わる前に既に入っているけども

とは言っても、何時もの事だしな

吸血鬼一家を助けてから既に6年が経過した、間違いなく6年だ

自信があるのはレミアが6歳になったと言っていたからだ

自分では全く数えてなかったけど

とりあえず平和な6年だったと思う

平和ではあったが、決して平穩ではなかったとも思う

まずは引越しをした

何時までも盗賊の小屋に住んでいる訳にもいかず、早々の引き払い
4つ隣の国に移住した

移動中は吸血鬼一家が日の光に弱いとの事でスキマの中に放り込んだ
血液は自分達で確保してもらう為に、夜な夜なラドウがどこかに飛
び去っていたのも良い思い出だ

移住後は適当な貴族から適当な屋敷付きの土地を買い取り住み始めた

何故かラドウは屋敷を真つ赤に染めていたが……吸血鬼の感覚は分

からない

引越しが済んで、本格的に生活を始めた

その時点で旅を再開しようと思ったが、吸血鬼一家に引き止められ、仕方なく真つ赤な館に住み込む事になった

大きな事件無かったが、レミリアが初めて喋った言葉が『かいはい』だった所為でラドゥウに恨まれたくらいだ。ローレンさんはここにいと笑っていたが

大体これで2年分だ

3、4年目は特筆する事も無く、平和だった

5年目になると吸血鬼夫婦に2人目の子供が生まれて少し賑やかになった

そこで、6年間で最大と言っても過言ではない事件が起きた

2人目に子供、フランドール・スカーレット

その子が少々、問題を抱えており、時に正気が保てないらしい

仕方なく夫婦はフランを地下室に幽閉する事にした

俺は当然、それに異議を唱え、どうにかすると約束して一緒に地下室に入った

それから1年間、彼女の中の狂気を少しずつ少しずつ減らし、下げ

ていった

一気に下げると人格が崩壊する危険性があったからだ

その甲斐あつてか、正気を保つのは問題無くなった

今では、家族と一緒に暮らしている

まあ、フランも最初に喋った言葉が『かいは』なので、またもやラドウに恨まれる事になった。そして、ローレンさんは相変わらずにここにこと笑っていた

7年目の冬

外の出で伸びをする

1年間、地下に居たので身体の節々がダルいと言つか痛いと言つかとりあえず、これで後顧の憂い無く旅立つ準備が出来た訳だしかし、俺の経験から言わせてもらつと、このまま素直に行かせてもらえるとも思わない

俺の感が早く屋敷の中に戻れと警告を発してくる

特に逆らう理由も無いので、屋敷の中に戻ろつと歩き始める

しかし

「……うう……うう……」

後ろからの呻き声を聞き逃す程、衰えてはいないらしい

ため息を吐きつつ声の発信源を探す

見殺しにしても良かったが様な気もするが……

「おい、あんた、大丈夫か？」

赤い髪に緑の帽子、緑のチャイナ服に白いズボン

中国人か？何でこんな所に？

確かに、この国と地面は繋がってるけども、ここにチャイナ服は不自然過ぎる気がする

何かに追われたか、何かから逃げてきたか

もしくは全く違う理由か

後で本人から訊いて見るとして、今はこの行き倒れを運んでやろう

「それで？何であんな所に倒れていたんだ？」

あれから数時間

客間のベッドで目を覚ました女性に尋ねる

因みに俺は人間の姿だ

女性が妖怪なのは身体から出ている妖気で分かるが、こちらが人間

だと思わせておけば油断して理由を話すかもしれない

「え〜と……………笑わないでくださいよ？修行の為に放浪していたら何時の間にか路銀が尽きて、食料を探していたんですけど、余りの空腹に耐えられずに

倒れてしまったんです。なので、何か食べ物ありませんか？」

笑いながら間抜けな告白をしてくる

何と言うか……………警戒する必要なかったな

「そうか…大変だったな。まあ良い、今食事の用意をしてやるから待ってる」

仕方ない、憐れな行き倒れに食事を提供してやる

そんなこんなで、彼女にお粥をつくってあげた

消化に良い食べ物〃お粥つてのは安易な考えなんだろうけど、他に知らないのじゃない

女性の名前は紅美鈴ほんめいりんと言うらしい

この国から遙か南東にある国の出身だと言っていた

多分、中国なんて言っても分からないと判断されたんだろう

「とりあえず、回復するまではこの部屋を使っても良いからな」

吸血鬼一家に、って言うかラドゥに文句は言わせない

何せこの屋敷は俺が買った俺の屋敷だからな

吸血鬼一家は居候の筈だ

「でも……………」

「何だ？歯切れが悪いな。何か都合があるなら言えよ？」

手元の布団を握り締めながら何かを迷っている様子だ

しばらくそうしていたが、決心したかの様にこちらを見上げると

「すみません、私は実は妖怪なんです。だから、貴方の好意に甘える訳にはいかないんです」

妖怪だと隠していた事を打ち明けてくる

そつえば人間の姿のままだった

「なら問題無いな。この屋敷の中には人間は1人も居ない」

隠していた翼と角を出して見せてやる

「妖怪……………だったんですか？じゃあ、今の私の決心は……………」

「無駄以外の何物でも無いな」

「そんなの有りですか……」

落ち込んだじゃった

………ほつとこつ

暫くすれば再起動するだろう

とりあえず、ラドゥに事情を説明してこないとな

ラドゥも妖怪の血を飲もうとする程、飢えてないと思うし大丈夫だろう

ちゅうごく(後書き)

何だか日記みたいな出来に自分でがっかり

肝心な所をスキップしてるし

3回程書き直したんですが……

感想とか待ってます

番外編・妹紅（前書き）

そろそろ妹紅をだそうと思ったんですが、話の筋を若干変更した為にまだ少し先になってしまいました

その為に急遽、番外編を書いてみました

短いですが、お許し下さい

番外編・妹紅

「灰刃は妖怪だから、人間の気持ちなんか分からないんだ!!」

そう言った直後、灰刃は黙ってしまった

「あ……すまない……」

感情的になってしまった事をすぐに謝る

「いや……」

だが、時既に遅く

物凄く気まずい空気が辺りを包む

「そ、そうだ! 2人共、良ければ今日は泊まっていてくれ!」

気まずさをに耐えかねたのか、慧音が間に入ってくる

「あ、ああ。良いだろ灰刃？」

これ幸いと、少しおどけてみる

「ああ、お言葉に甘えよう」

それをどう感じたのか、灰刃も軽い調子で返してくる

「そうか、良かった！なら、部屋に案内するよ」

灰刃は1人部屋、私と慧音は2人で寝る事になった

けど、あれから私はずっと後悔している

もっとしっかり謝っておけばよかった、何時もそうだからと言って灰刃と一緒に寝ておけばよかった

そうしてれば、ずっと後悔し続けるなんて事は無かったと思う。いや、無かった筈だ

次の日の朝

少し早くに目が覚めてしまった

しかし、慧音はそれよりも早く起きていたらしく、朝食の準備をしていた

「おはよう。もうすぐ食事の準備が出来るから、少し待っていてくれ」

朝の挨拶をしてくる慧音、朝から元気な事だ

灰刃は………いない。まだ寝てるのか？

いつもは私よりも早く起きているのに……珍しい事もあるものだ

特に気に留めずに居間らしき場所で待つ事にした

どのくらいの時間が経ったかは分からないけど、食事の準備が出来たらしい

灰刃はまだ起きてこない

いつもは私が起こされてるし、偶には起こしてやるか

立ち上がり、灰刃が寝ている部屋に向かう

「灰刃ー！朝だぞ！いつまで寝て…る？」

部屋の中には誰もいない

綺麗に敷かれた布団だけが残っている

おかしいな、かわや厠にでも行ったのか？

それにしては布団が綺麗過ぎる

「慧音、灰刃がどこに行ったか知らないか？」

居間に戻り、配膳していた慧音に尋ねてみる

「え？居ないのか？」

どうやら慧音も知らないらしい

まったく、朝っぱらから何処に行ったのやら………

結局、その日に灰刃が戻ってくる事は無かった

「一体どうしたんだ？」

今までも、急にふらっと居なくなる事はあった

けど、大抵はその日の内に帰ってきてた

丸一日も居なくなる何て事は滅多に無い

「なに、すぐに帰ってくるさ。それまでは、ここで待つと良い」

そんな慧音の言葉に従って、しばらく滞在させてもらう事にした

ただ待ち続けるのも悪いので、炊事や洗濯、掃除も慣れないながらに手伝ったりもした

しかし、2日、3日と待っても帰ってくる気配すらみせない

段々と不安になってくる

慧音も気遣ってくれているのか、努めて明るく振舞ってくれている

私も言い様の無い気持ちを持って余していた

灰刃が消えてから1週間

私は灰刃を探しに行く事にした

灰刃が居なくなるきっかけ、それはきつと居なくなる直前に言った
『灰刃は妖怪だから、人間の気持ちなんか分からないんだ!!』 発
言の所為だと思った

灰刃は妖怪の中でもとびきり変わった奴だ

妖怪のくせに人間に関わろうとしない、かと思えば少しでも関わっ
た人間は守ろうとする

そんな灰刃に、あんな事を言ってしまうなんて………自己嫌悪が激
しい

長生きをしている分、人間の気持ちなら、多分私よりも理解してい
ると思う

「謝りたい」

会って、私の言葉が灰刃を傷つけたなら土下座でも何でもしてやる

だから、探しに行く

意地でも見付けて謝ってやる

だけど、手がかりが無い

灰刃が行きそうな所……何年も一緒に居て心当たり一つ無いのは、正直情け無い

仕方がない

妖怪が集まるような場所を巡っていくか、聞き込みをして辿っていくか……

慧音に妖怪の溜り場がどこかに無いかと尋ねたが、危険過ぎると教えてもらえなかった

それでもしつこく聞き出そうとすると、慧音も一緒についていく事を条件に教えてもらった

しかし、私はこの時知らなかった

灰刃を探す出するのに数百年間も掛かる事を……

妖精メイドと旅立ちと（前書き）

本編です

妖精メイドと旅立ちと

レミリア10歳、フラン5歳の夏

美鈴は何だかんだで屋敷に居ついてしまった
家賃でも取ってやろうかと思っていたが

「お金は無いので働きます」

と、何故か自身に満ちた表情で言ってきた

折角なので、薪割りや水汲みといった力仕事をやってもらっている

料理が出来るようには見えないし………人一倍食べるクセにな

もしかしたら、旅をしていたなら少しくらい出来るのかも知れないが期待はしない。猪の丸焼きをかじっているイメージしか沸かない吸血鬼一家も血を飲むついでに普通の物も食べるので、その用意もしなければならぬ

俺は使用人でも料理人でもないつてのに

早いところ信用できる人間でも妖怪でも雇わないと、俺が過労で死ぬ

どこかに都合の良い人材は居ないものか

今日の献立を考えつつ、街まで買い物に来ている

ここ数年で洋食の腕前が急成長している……不本意ながら

いっその事、その辺から料理、洗濯が出来る奴を攫ってこようか

割と本気で物騒な事を考え始めていた時、視界の隅に小さな影がち

らついた

何だ？子供か？こんな時間にあんな場所に？

一度気になってしまつと、確かめたくなるのは何故だろう

何となく、影が消えていった狭い路地に足を踏み入れてみる

しかし、周りを見回しても何も無い

おかしいな、勘違いだったか？

引き返そうとした時、足元で影の正体を見付けた

「何だ、妖精か」

分かってみれば興味は失せる

今度こそ引き返そうとした俺の頭の中にある考えが浮かぶ

こいつら仕込めばある程度は使えるかもしれない

さつきから足元で人間に見付かったと騒ぎながらつろちよろしている妖精を捕まえる

「お前、もつと安全な所で働きたくないか？」

5、6歳の人間の子供くらいのサイズがある妖精の両脇に手を入れて持ち上げる

妖精は言葉の意味が分からないのか、首を傾^{かし}げてキョトンとしていた

「俺の手伝いをして欲しいんだけど」

……これでも分からないか

「詰まりな？料理とか洗濯とかの手伝いだ、わかるか？」

ようやく言葉が通じたらしい

笑いながら何度も頷く妖精を待たせて買い物を買いますと屋敷に連れて行く事にした

妖精を連れてきてから1ヶ月

「お、出来たか？」

妖精がつくつて持つてきたスープを一口飲む

中々良い出来だ、もう教える事は無さそうだな

教え始めた時は「意味あるのか？」何て思ったけど、根気良く続ければ成果はできるものだ

掃除と洗濯は身体が小さい為に時間が掛かるが完璧だ

「これなら大丈夫だ。よく頑張ったな」

褒めてやると、両手を腰に当て胸を張っている

「えっへん」何て声が聞こえてきそうだ

こうやって、すぐに調子に乗るのが難点だが……

とにかく、これで俺にも自由な時間ができる

新しい趣味でも見つけようか？……って、違う！

いい加減に旅を再開しないと、何を馴染んでるんだ、俺は！

危うく、主夫として屋敷に永住する所だった

折を見て旅立つ事を告げよう

それまでは、レミリアとフランの面倒を見てあげないとな

砂糖とバターを混ぜて？卵と薄力粉？こんなので本当に出来るのか？

とりあえずやってみるか

「お兄様？何をやってるの？」

「ん？レミリアか。クッキーをつくるつもりと思ってな」

「クッキー！ホントに！？」

「フラン、女の子なんだから暴れない」

料理は出来るが、お菓子作りは初めてだ

若干、慎重な手つきで材料を混ぜ合わせていく

一つの塊になったそれを、温度を下げて凍らせる

凍った塊を均等大大きさに切りオープンの中に入れる

「兄様！どのくらいで焼けるの!?!」

「20分くらいらしいな」

待っている間に紅茶の準備もしておこう……と、思ったら妖精が先にしておいてくれたらしい

焼きあがればお茶会の準備は万全だな

出来上がったクッキーと紅茶のセティングをしたテーブルに吸血鬼一家と美鈴、何時の間にか増えていた妖精3人が座る

初めに連れてきた妖精が呼んだらしい

今では仕事を分担してこなしている

「兄様！美味しいよ!」

「フラン、お行儀が悪いわよ。もっとお淑やかになさい」

仲の良い姉妹だ

これなら、安心して旅立てる

「それで灰刃、話と言つのは？」

最近、血液を取りに行くくらいしか働かない半ニートのラドウが切り出す

「ああ、ここも落ち着いてきたし、そろそろ旅に出ようかと思つてな」

その言葉にいち早く反応したのが、クッキーに夢中になっていたフランだ

「兄様行つちやうの!？」

「フラン、口に物を入れたまま喋るなつて何回言えば良いんだ？」

他の面々もそれぞれの反応を見せている

唯一落ち着いているのはローレンさんだ

レミリアは硬直しているし、美鈴は口から紅茶がこぼれている

「美鈴、汚い」

指摘してやると、服の袖で拭いている

後で自分で洗濯させよう

ラドウは驚いて目を見開き口をパクパクさせている

「灰刃！どういう事なんだ！お前はレミアかフランの婿として残ってくれるのではなかったのか！？」

「誰がそんな事言った！」

勝手な事ばかり言いやがって

「あなた、灰刃さんには灰刃さんの事情があるのですよ？あまり我侷を言うものじゃありません」

流石、ローレンさんは大人だな

一言でラドウを黙らせた

「……分かった。それで、これからどこに行くんだ？」

「そろそろ故郷に帰ろうかと思ってる」

日本の風景が懐かしくなってきたし、丁度いい

「灰刃さんがいなくなったらご飯はどうするんですか！？」

「美鈴、自分で用意するって発想は無いのか？……それに妖精たちがいるだろ？」

3度の飯より飯が好きって言葉は美鈴の為にあるような言葉だな

さつきから何も言わないレミアだが、よく見れば涙眼になっている

「どうした、レミリア？」

「何でもないわ。私は姉なのだから、笑顔で見送ってみせるわ」

「レミリア、別に今生の別れって訳じゃないんだからな？昔、俺の友人にも言われたが寿命なんて有って無い様なものだ。縁があればまた会える」

さて、そろそろお茶会もお開きだ

旅立つ準備をしなければな

「好きな時に遊びに来てくれ。また会おう、我らが恩人よ」

「ラドウ、今更かつこつけても遅いぞ？」

どうせなら最初から最後までかつこつけろって話だ

あら、落ち込んだじゃったよ

「そうだ、美鈴、この子たちを守ってやってくれよ？」

「ふえ？は、はい！任せてください！」

これで思い残す事は無くなった………死ぬみたいだな

そして次の日、皆が見送る中、スキマを開いてこの国を後にした

と、思ったがやめた

スキマに入る瞬間、不穏な気配を感じたのだ

何時もなら気にせずは無視をしていただろう

しかし、この時はいつもとは違う胸騒ぎを感じた

少し不安になった俺は、その気配の近くにスキマを開き覗き見てみた

そこには、10年前に見た吸血鬼一家を処刑しようとしていた神父らしき男と武装した騎士らしき者たちが少なく見積もっても数百人

まっすぐに屋敷を指して歩いていた

……懲りないな

見過ごす訳にはいかない

気配を隠すのを止め、神父らしき男の前に姿を現す

「こんな所で何をやっているんだ？」

急に現れた俺を見た神父が慌てる

「き、貴様！あの時の悪魔！」

「俺は悪魔じゃなくて妖怪だ」

悪魔と妖怪に区別もつかないなんてな

正直、ほっといても良かったかも知れない

「妖怪だか何だか知らぬが、貴様がここにいるという事は邪悪な吸血鬼もこの近くにいると言う事だ。情報は正しかった訳だな」

成程、まだ諦めて無かったようだな

「それで？まさかここから先に進めるなんて思ってないよな？」

妖力を開放しつつ、威圧感を増す

「この人数を前にして大口を叩けるのも今の内だ！お前らやってしまえ！！」

その怒鳴り声を合図に一斉に襲い掛かってくる騎士らしき連中

突かれたランスを掴み、騎士ごと振り回し薙ぎ倒す

振り下ろされた剣を避け、相手の脇腹に蹴りを放つ

放たれた矢を受け取り、投げ返し、放った人間の頭に突き刺す

「必殺技試作8号！目からビーム！！」

これも前が見えない！今まで作った必殺技は全部、前が見えなくなるものばかりだ！

くそう、何時か必ず前が見える必殺技を完成させてみせるぜ

そんなふざけた事をしていたら、何時の間にか騎士らしき人間は1人残らず倒れていた

何だ、呆気ない

ドスッ！

調子に乗ってたのがいけなかった

若干の衝撃が身体を揺らす

下を見てみると、背中側から心臓を剣で貫かれていた

「ふ、ふはは、オンミヨウジとやらが特別な祝福をした純銀の剣だ！これなら例え化け物でもひとたまりも無いだろう！」

不気味に笑う神父らしき男

……………しまった……………油断した……………

意識が……………薄れていく……………

「後悔……する……な……よ？」

この日、正体不明の鳴き声を聞いたとの証言が近くの街で数多く寄せられた

そして同時に、ある国で吸血鬼を追って国を出た神父の消息が分からなくなったとの報告も寄せられた

相談、時々、面倒（前書き）

かなりのオリジナルな設定が入っています

ご注意ください

相談、時々、面倒

気付くと俺は自分のスキマの中にいた

憶えているのは、神父らしき男と騎士らしき連中の残骸を喰い漁っているアイツの視点

調子に乗って油断するのは俺の悪いクセだな、改めないと

まあ、どっちにしろ、これで連中が屋敷に手を出す事は無くなるだろう

……軽く流そしそうになったけど、初めて人間を喰っちゃった

正確には喰ったのはアイツだけど

もう胸を張って人間を名乗れない、初めから名乗らないけども。いや、人間を取り込んだからむしろ人間に近付いたのか？……どーでも良いか

むしろ、おっさんを喰ったという事の方が衝撃がでかいね

どうせなら、女性、贅沢を言うなら美女や美少女の方が良かった。って何言ってるんだ、俺は

まあ、唯一の救いは、喰った人間の中に能力持ちがいなかったって事だな

これ以上、能力が増えても持て余すだけだし

さて、回想はこれくらいにして、行き先を決めようか

で、スキマから出てみた訳だけでも

人……多くない？

え、何？戦でもしてるの？

好きだねえ、人間は

それで？誰と誰の戦？

あれは……鉄砲隊？信長？

何だか見覚えがある甲冑を着てるし

え？待って、信長が火縄銃を使い出したのは確か………1570年頃？だったような、俺が屋敷を出発したのが1500年頃だった気がする

この空白の70年は何？

「どついう事だと思っつ？」

「久しぶりに顔を見せに来たと思ったら、第一声がそれかい？」

幻想郷の連中よりは頼りになるかな？って事で神奈子の所に相談に来てみた

諏訪子は出かけてるらしい

「とりあえず、詳しく事情を訊かせな」

「って訳なんだけど」

アイツの事を掻い摘んで説明した上で空白期間の事を尋ねてみた

「成程ねえ。人間を喰っちまった訳かい」

「いやそつちじゃ無くてね？それに俺だって喰いたくて喰った訳じゃ無いんだよ？」

相談する相手を間違えたかな？

「つまり、あんたが負った傷をアイツとやらが妖力なり霊力なりを周りの何かを喰う事で補給してあんたの傷を癒しているんだろう。今回は周りの何かがその人間で、人間だけじゃ力を補充し切れなくて眠る事で回復させた、って所じゃないかい」

おお！意外とそれっぽい事言ってる！

「…何だい？その顔は？」

「まさか、そんなにまともで真面目に返してくれるとは思わなくて」

「神の事を何だと思ってるんだい。まあ良しさ、飯くらい食べてい
くだろ？」

「ではお言葉に甘えて」

久しぶりに和食で、しかも俺がつくった飯じゃない！

上げ膳、最高だね

……飯に釣られて悩み？が吹き飛ばなんて、子供か？

「ところでさあ、社が増えてるけど、誰の？」

「……………諏訪子が帰って来たら諏訪子に訊きな、私は一応止めたん
だ」

成程、諏訪子が絡んでいるのか

俺には関係無いだろうから良いんだけどな

しかし、何だか嫌な予感がすのは何でだろう？

夕方、神奈子と酒盛りをしていると玄関の戸が開く音が聞こえた

「ただいまー」

お？諏訪子が帰ってきたか

何年ぶりだろうな

「あれー？神奈子ー？お客さんー？」

相変わらずの間延びした独特の喋りだ

襖を開けて、でかい帽子をかぶった少女が入ってくる

「あー！灰刃！久しぶりー！」

「おー、諏訪子。相変わらず小さいなあ」

「あはは！ほつといてよー！」

その後は諏訪子も加わっての宴会に突入、神社の夜は更けていった

「でね？その娘が可愛くてついつい」

「だからって、人間のしかも女と子供までつくる事は無いだろ」

「良いんだよ。神に性別云々なんて野暮なだけだよ」

「だからってなあ……」

訊く所によると、諏訪子の奴、人間の女性との間に子供をつくったらしい

初めは熱心に祈る娘だなあ、と思って見てただけらしいけど

段々と年を重ねて、それでも毎日お参りに来るその娘に興味が沸いてつい声を掛けてしまったそうなの

で、気付くとその娘との子供が出来てしまった、と

しかも、神である事に気付かれているのにだ

「だから言っただろう。滅多な事をするなって」

神奈子は初めは反対したらしいけど、結局最後は折れたらしい

その娘も今では天寿を全うして、笑顔で逝ったと諏訪子は語った

「つまり、外の新しい社はその娘の奴か」

「違うよー。あれは灰刃を祀ってる社だよ」

は？俺は耳が悪くなっただか？

「誰の社だつて？」

「だから、灰刃の」

「何で？」

「昔、灰刃も拝まれてたから？」

「疑問系で言うな」

「良いじゃないか」

通りで神力が増えていた筈だよ

社を建てて誰かが祈れば、そりゃ神力も増えるさ

「因みにご利益は？」

「子宝祈願」

「俺自身に子供がないのに!？」

「増やす事に関しては専門でしょ？」

「減らす事に関しても専門だよ！」

なんでこうも頭のネジが一本ぶっ飛んでるような思考するんだよ

あゝ面倒になってきた

「もう好きにしろよ。俺は寝る」

お猪口に残っていた酒を飲み干してその場に横になる

明日になったら出発しよう

で、早々に別れを告げて旅を再開したんだが……

神社から程遠い森の中

瀕死の人間の夫婦を見つけた

山賊か妖怪にでも襲われたのか、旦那さんの方は既に亡くなっているようだ

奥さんの方も時間の問題だろう

この状態では、治療を施しても無駄に終わる

可哀想だけど、こればかりは仕方ない

せめて最後を看取ってやろうと近くまで歩み寄る

翼を隠す事無く近寄った所為か、少し反応をしたがとても弱々しいものだった

「お願い……します……私と……夫の亡骸を……捧げますので……この子だけは……お助け……ください……」

遺言だろうか？

見れば女性の腕の中には布に包まれた、生まれたばかりであろう赤ん坊が抱かれていた

「どうか……どうか……お願い……します……」

余程、この子の事が大切なのか

片時もこちらから目を逸らさない

母は強しとはこの事かと、少し感心する

「俺は人間は喰わない妖怪だ。あんたの頼み、引き受けるよ」

「ああ……ありがとう……うまい……ます……」

女性から赤ん坊を受け取る

「この子の名前は？」

「……さくや……と言います……どうか……健やかに……」

逝ったみたいだ……

頼まれたからには、責任もって一人前に育てよう

何、子育てなら過去に吸血鬼姉妹で経験済みだ

白銀の髪と少し変わっているが、変わっている度合いで言えば俺の方が遥かに変わっている

とりあえず、母乳の代わりになるものの確保から始めよう

相談、時々、面倒（後書き）

咲夜の名前はレミリアがつけたいらしいですが、無視していきます

8 / 20 微修正しました

帰郷（前書き）

何とか8月中に間に合った

帰郷

あれから丁度1年

旅をしながらの子育ては俺にも子供にも負担がでかい

つてな訳で、久しぶりに幻想郷の自分の家に戻ってきた

もっと早く気付けば良かった

にとりか誰かが管理をしてくれていたのか、家の中は思ったより綺麗だった

それと何故か、幻想郷中に花が咲き乱れていた

俺の帰還を察した誰かが気を利かせてくれた……んな訳無いか

大方、幽香の仕業だろう

放っておこう

「呼んだかしら？」

「全然呼んで無い、だから帰れ」

どこから湧いて出るんだ？

「あなたが帰って来たって烏天狗が言いふらしてるから再戦の申し込みに来たのに、ひどい言い草じゃない」

射命丸の奴、何処から嗅ぎ付けたか知らないけど、後で後悔させてやる

「さ、行きましょー？」

「悪いが、今はそれどころじゃないから、また今度な」

いくらなんでも子供を背負いながら幽香と戦うなんて器用な真似、出来るけどしたくない

情操教育に悪い事この上ない

「……………理由を訊いても良いかしら？」

あからさまに不機嫌になった幽香が睨んでくる

「理由も何も、この子が見えないのか？子供を抱えて戦う何てシユールな事したくないぞ？」

幽香は今、初めて気付いたとでも言わんばかりの顔で子供を見る

その後、俺の顔と子供の顔を何度か見ると、何かを言おうと口を開くが

「灰刃、戻って来ているの？」

スキマが開いて紫が顔を出す

だが、俺を見た後に子供の姿を見て見事に硬直してしまう

今の内にどこかに捨ててこようか

その方が平和な気がする

決心して紫の足元にスキマを開こうとした瞬間、紫が再起動した

「灰刃？その子は何かしら？怒らないから言ってみなさい？」

スキマから乗り出し、外に出て来る

紫に怒られる筋合いが分からないが、隣の幽香も説明を欲しがっている様子だ

面倒だが仕方ない

「俺の娘だ、以上」

だが、やはり面倒なものは面倒だ

ほんの少し省略してもいいだろう

しかし、今度は紫だけでなく幽香も硬直してしまっ

手を顔の前で振ってみても全く反応が無い

それなら好都合だ

2人の足元にスキマを開いて適当な場所に繋げる

直立不動のまま、スキマの中に落ちていく紫と幽香

これで静かになった

居間に座布団を敷いて座る

「やっと落ち着いたな」

さくやに話しかけるが、さくやは眠っている

あの騒ぎの中で眠り続けるとは……………将来が楽しみだ

さて、射命丸が騒いでいるって事は連中が来るのは確定事項か

それなら人里に食料の買出しに行っておいた方が良さな

落ち着いたばかりなのに忙しいな

人里に着いた

昔よりもでかくなってるな

食料品を売っている店は何処だったっけ？

思い出そうとしながら歩き回る

しばらく歩くと目当ての店を見つけた

献立は……大勢で食べる事になるだろうから鍋が良いな

酔っ払いには質より量だろう

「お姉さん、鍋に使う野菜を一通りお願い」

店頭に立っていたお姉さんに声を掛ける

「はいはい、ってあなた妖怪？」

バレるのが早くない？

ちゃんと人間の姿で来たのに

「そうだけど、何で分かったの？」

「里の中で見慣れない人はいたら大抵は妖怪だよ」

ああ、成程ね納得だ

「それに、尻尾が9本ある狐の妖怪がちよくちよく来るからね、何となく雰囲気でわかっちゃうの」

藍か、紫の世話で忙しい訳だな

「人里に堂々と来て、買い物していくって事は人間を襲う気はないんでしょう？鍋に使う野菜だったね？今、用意するから待ってて」

お姉さんは素早い動きで野菜を集めると持参した風呂敷に包んでくれた

代金を払い風呂敷を受け取る

「その子の為に桃、おまけしておいたから。またどうぞー！」

お姉さんに見送られながら次の店に向かう

後は酒と肉類だな

肉ってどこかで売ってるのか？ 猟師に頼んで分けてもらった方が早そうだな

家に帰るとさくやが泣き出した

腹でも減ったのだろう

さっきおまけしてもらった桃をすりつぶしてからさくやに食べさせる
既に離乳食が食べられる歳になったのは助かる

ちょっと前までは……………やめよう、思い出したく無い

暫く一心不乱に桃を食べていたさくやだが、満腹になったのか寝て
しまった

あー俺も眠くなりそうだ

ガラガラガラッ

「おじゃましますよー！」

この声は……………射命丸か

「いやー、灰刃さん。お久しぶりですねー」

能天気に入って来た射命丸の足元にスキマを開き、天井付近に出口
を開く

すると、あら不思議。逆さまになった射命丸が落ちてくる

ぶぎゅー！と声をあげて床に頭を強打する

「いたた、何するんですか!？」

「俺が帰って来た事をお前が言いふらした所為でスキマ妖怪と花妖怪が家に押し掛けて来た。これはその礼だ」

少し怒気を含んだ俺の物言いに、しかし、射命丸はあさつての方向を向きながら口笛を吹いている

かと思うと、俺の腕の中で寝ているさくやの姿を見つけると、何処に仕舞ってあったのかカメラを取り出し構える

「灰刃さん!撮っても良いですか!!!」

「駄目だ。静かにしろ、さくやが起きる」

今にもシャッターを押しそうな射命丸を睨みつける事で制止する

「うっ、仕方ないですねえ……」

渋々とカメラを仕舞う。かなり惜しんでいるのが丸分かりだ

「それで、その子は誰ですか?見たところ人間みたいですけど」

「ちょっと事情があつてな。俺が引き取って育ててる」

言った瞬間、再びカメラを取り出す

しかし、取り出した右手を左手で押さえている

今、射命丸の中でそれなりの葛藤があるらしいが、そっとしておこう

「おじやましませーす！」

「じゃまするよー！」

射命丸を眺めているとにとりと勇儀が来たようだ

そういえば、料理の準備なんか全然していない事を思い出して土鍋を引っ張り出す為に台所に向かった

「じゃあ、その亡くなった人に頼まれてその子を引き取ったんだ。

お兄さんも大分お人好しだねえ」

鍋の準備を整え、酒盛りを開始した辺りで3人に事情を説明した

「中々に可愛い顔してるじゃないかい」

勇儀の腕の中ですよすやと眠るさくやを眺めている

因みに、射命丸は事情を聞くと床に転がり悶えだした

見ている面白いで止めない

よほど新聞沙汰にしたいのかコイツは

とりあえず、さくやは手の掛からない良い子なので部屋の隅で寝かせて3人に土産話を聞かせてやる

吸血鬼一家の事や神社に祀られた事

異国の町並みや暮らし、洋食の腕が上がった事など

酒を飲んで滑らかになった舌で夜遅くまで話し込んだ

チビ鬼

明け方、さくやの泣き声で目が覚める

周りを見れば、死屍累々

酔ってそのまま雑魚寝している鬼やら河童やら烏天狗やら

頭をかきながら欠伸を一つ

多分、おしめか何かだろうとさくやの所に行く

案の定、粗相のようでおしめを取り替え昨日貰った桃の残りを食べさせる

紐でさくやを背中に固定しながら朝食の準備に取り掛かる

昨日、残った白菜で簡単な味噌汁をつくり、米を炊く

途中でさくやが髪を引っ張ってくるが、本人が楽しそうにしているので好きにさせておく

包丁如きでは傷なんて負わない

にとりがお土産に持ってきてくれた魚を焼き、準備は完了………と、思ったら

「「おはよう」

何時の間にか居間に紫と幽香が座っていた

「朝っぱらから何の用だ？」

大体の予想は出来ているが、何となく訊いて見る

「そんな事決まっていますわ。貴方の背中で貴方の髪の毛で遊んでいる子の事ですわ」

紫の目が怖い

昨日、何処とも分からない場所に捨てたのが悪かったか？

「さあ、膝割って話しましょう？」

「出来れば割るのは腹にしてほしいな」

紫の戯言にツッコミを入れつつ、辺りを見ると雑魚寝していた連中が壁際に寄せられている

恐らく邪魔だと押しやられたんだろう

それでも寝続ける根性だけは評価しておこう

正直、昨日話した内容をもう一度話すのは面倒臭くて堪らなかった
だからと言って話さないと帰りそつに無いので仕方なく話した

「そついう訳だったのね」

「安心しましたわ」

説明しながら思った事が一つある

もしかしたら、さくやが俺の所に来たのは俺が子宝の神として祀られた所為かもしれない

子宝の神なのに子供の一人も居ないってのは不自然だから何かしらの強制力みたいなものが働いた可能性がある

俺自身が祀られていると確認、認識したからその力が一層強まった結果、さくやに出会ったのかも知れない

まあ、憶測だから本当かどうかは判らないがな。それに正直どうでも良い

「言うておくけど、さくやに手を出したら消滅させるから、そのつもりでな」

どうでも良い考えは即刻、思考から消して2人に釘を刺しておく

今はさくやから目を離す事はしないが、さくやが成長して1人で出歩くようになったら俺の目が届かない事もある

「幻想郷の妖怪たちにも伝えておけよ？さくやに何かあったら幻想郷ごと消すからな？」

もし、さくやが怪我、もしくは死ぬような事になったらさくやの両親に申し訳がたたない

引き受けた以上は全力を注ぐ

こればかりは絶対に譲れない

「貴方が言つと洒落にならないわね」

「洒落でも冗談でも無いからな」

幽香が引きつった笑いを浮かべながら言うが、切って捨てる

自分でもこうなるのは予想外だったが……俺は父性に目覚めたらしい

さくやが可愛くて仕方が無い

『目に入れても痛くない』何て迷信か気の迷いとか思っていたが、実践しても良い

実際痛くないんだろっけど、妖怪だから

レミリアやフランの時もそうだったが、自覚していない子供好きだったらしい

自覚したら自覚したで、厄介なのだが

……… 本当は距離を取った方が良いんだろっけど

さくやは人間で俺は妖怪

いつかは寿命の差が出て来てしまう

何時か来るであろう未来に思いを馳せながら

そんな事を考えていたら紫と幽香の事をすっかり忘れていた

「さて、これから朝飯にするけど食っていくか？」

取り繕うように言ってみる

さっきまでの俺の雰囲気との違いに戸惑った様子だったが、結局2人共頷いたので追加の魚を焼きに台所に向かった

「勇儀ー！迎えに来たよー！」

食後にお茶を飲んでいると外から声が聞こえた

「ん？あの声は萃香すいかか？」

勇儀の関係者らしい

勝手に家の中に入ってくる

「勇儀ー、泊まってくるなら言っておいてよー」

どうやら勇儀は無断外泊だったみたいだ

角が2本ある子供のような鬼に窘められている

「何だい、小娘じゃあるまいしー々言わなくても良いだろう」

うんざりだと言わんばかりの勇儀の態度に腹が立った様子の小さい鬼と口論が始まる

しばらくその様子を眺めていたが、にとりに抱かれたさくやがその声に反応して泣きそうになっている

これは見過ごせない

「喧嘩するなら外でやってくれ。さくやが泣くだらうが」

口論を止めてこっちを見る2人

「あー！アンタだね、勇儀と喧嘩して勝ったって言う妖怪は！」

「確かに昔、勇儀と勝負して勝った事はあるけど」

「アタシとも戦えー！」

凄く良い笑顔で凄く面倒な事を言い出すチビ鬼

しかも行き成り飛び掛ってきた

「面倒だし娘の教育にも悪いから断る」

丁度掴みやすい位置にあった角を握り止める

「何でー、良いじゃないかー。って言うか角を掴まないですよ」

「俺は鬼と違って戦いに飢えていないんだよ」

角を放して解放する

だが、チビ鬼は諦めない

しつこく絡んでくる

「ねえー少しだけで良いからさー」

拳骨の一発でも落とさないと分からないか？

「受けてやりなよ。萃香は私よりもしつこいよ？今受けておいた方が後々楽になるさね」

「お？勇儀、分かってるー」

鬼が結託しやがった

俺に味方はいないのか？

「お兄さん」

にとり！お前は分かってくれろと信じていたよ

「さくやちゃんは私が見ていてあげるから、行ってきなよ」

お前も敵か

ああ、面倒臭い

で、庭先に連れ出された

「アタシの名前は伊吹萃香^{いぶきすいか}。見ての通り鬼だよ」

「俺は灰刃。妖怪だ」

簡単な自己紹介を終えると双方構える

かと思えば萃香は腰にぶら下がっていた瓢箪のふたを開け一口飲む
この匂いは酒か、これから戦うつてのに随分と余裕のある行動だ
「じゃあ行くよ」

瓢箪を腰に戻すと萃香は地面を蹴り物凄い勢いで飛んでくる
それを油断無くサイドステップで避ける

鬼には何回も殺されている

これ以上は殺されてやるつもりは無い

着地してこちらに背中を向けている萃香に拳を振り上げ突っ込む

萃香もそれを察知したのか、振り向きざまに拳を放ってくる

ゴオンッ!!

拳同士がぶつかり有り得ない程の轟音がする

衝撃で後ろに飛ばされるが、それは萃香も同じ事だ

家の中からさくやの泣き声が聞こえてくるが気を取られている場合
じゃ無い

着地後、すぐに体制を整えつつ萃香の元に飛ぶ

体重が軽い分、俺より飛んだ萃香が着地するタイミングでローリングバットを放つ

しかし、確実に命中した筈の攻撃に手応えが一切無い

その事で致命的な隙が生じてしまう

顔を向けると脇腹の辺りに蹴りが迫ってきている

咄嗟に攻撃の威力を減らし、防御の為に腕を動かす

バキィッ！！

凄い音が鳴り同時に物凄い衝撃が腕に伝わり、吹っ飛ばされる

減らしてこれなのだから、直で喰らっていたらと思うと恐ろしい

「んー？何か変な感触。何かした？」

「お前こそ何かしただろう？確実にあたった筈だぞ？」

腕を振りつつ、訊いてみる

折れてはいないみたいだけど、無理は出来ないな

「アタシの能力『密と疎を操る程度の能力』だよ。密度を減らせば

攻撃は全部すり抜けちゃうんだ」

ほう、それは良い事を聞いた

密度を『減』らせば良い訳だな？

逆に『増』やせば攻撃があたる

「そうか、俺の能力は増と減を操る程度の能力だ」

相手の能力を聞いておいて俺だけ言わないのもフェアじゃない

「つまり、こんな事が出来る訳だ」

地面を蹴り上げ、翼を動かし滑空する

速度を上げながら萃香に接近、勢いを落とさずに空中で前転

空中で踵落としを決める

萃香は密度を減らしままでいるのか、防御をしようとしな

ガンッ！！

萃香の頭に直撃、地面…と言うより地中に勢い良くキスをする

油断しているからだ

少しの間、動かなかったが両手を地面につけるとガバツッと起き上がった

「……いった~~~~~~~~。何するのさ!!! って言うか何したのさ!!!」

頭頂部をさすりながら抗議の視線を向けてくる

「油断する方が悪い。言っただろう? 増と減を操るって、お前の密度を増やしてやったんだ」

「う~~~~~~~~許さないからね!」

言った途端、萃香の姿が消えたと思うと、後ろから気配を感じた

「喰らえ!」

拳を振り下ろしてくる、が

「あ、あれ?」

萃香の拳は俺の身体をすり抜け盛大に空振り、そのまま地面に倒れこむ

そこに能力で減り込ませる

ずぶずぶと地面に埋まっていく萃香

しばらくジタバタとしていたが、やがて動かなくなった

能力を解除して萃香を持ち上げてやる

「まだやるか？」

「……………参った」

手を離し萃香を解放してやる

昔に（俺が）殺された鬼の爺さんに比べても遜色無い位に強かった
が俺も色々喰って強くなっている

油断さえしなければ問題無い

ふらふしている萃香を置いて縁側で見物している連中の所に向かう
半ば呆然としているにとりからさくやを受け取りあやしてやる

中々泣き止まない

ちよっと刺激が強すぎたか、だからやりたくないって言ったのに

さくやを抱きながら周りを見てみると

勇儀は何処から持ってきたのか酒を飲みながらにやにやと笑っている

射命丸は手帳に凄い勢いで何かを書き続けている

にとりはさっきも言った通り、呆然といった有様だ

幽香は悔しそうに俺を睨んでいる。怒りか何かの所為か、顔が赤い

紫はよく分からない顔だ。笑っているのか怒っているのか、怒る理由が分からないが

これではばらく大人しくなれば良いんだけど

「灰刃さん！私、今のを記事にするんで失礼します！」

手帳を閉じて立ち上がる射命丸

「ああ、変な事書くなよ？」

「はい！今回はかりは真実のみで構成します！」

いつもは捏造も混じってるのか？

「後、さくやちゃんに手を出したら大変な事になるって記事も同時に書きますので、今度こそさくやちゃんも写真を撮っても良いですか？」

そういう事なら問題無い

許可を出してやると、カメラを構える

「…はい、結構です。では私はこれで、新聞は出来上がり次第、お届けに参ります」

言い残し飛び去る烏天狗を見送る

「お兄さん……私も今日は帰るよ。凄いもの見ちゃったから」

にとりが立ち上がり、覚束ない足取りで歩いていく

「送っついていこうか？」

「……大丈夫」

刺激が強すぎたのはさくやだけじゃ無かったみたいだ

「これで勝ったと思わない事ね!!」

幽香が行き成り叫ぶと飛んでいってしまった

何なんだ？あいつは

あれ？何時の間にか紫がない、スキマを使って帰ったのか？

また何かしら叫びながら追いかけてくると思っていたんだけど

今回はさくやがいるから、容赦無く撃ち落すつもりだったのに

とにかく、これで全員帰ったか「灰刃あ！気分が良いから飲むぞお！」

あゝ、勇儀がいたか

飲むって、まだ昼前だよ？

「こんな早い時間から飲むのか？言っておくけど、家に酒はもう無いぞ？」

昨日買ってきた分は既に飲み切った

つまみになる様なものも無いし

「萃香！負けたんだから、買出しに行ってきたな！」

「しょうがないな」

何だかんだ言っても萃香も乗り気らしい

その場から霧の様に消える

仕方ないか

せめてさくやに被害がいかないように寝かし付けてこよう

チビ鬼（後書き）

感想とか待ってます……本当に待ってます！

サイキョー（前書き）

お待たせしました

最近ちょっとスランプ気味で書き上げるのに苦労しました
微妙な出来かも知れませんが、楽しいで頂ければ幸いです

サイキョー

あれから1週間

さくやとの生活は順調だ

ただ、さくやは水分多めのお粥よりも果物をすりつぶしたのが好きらしい

その所為でちよくちよく森に入ったり、人里に買いに行ったりしている

当然さくやも連れて行く

家に一人で置いていくのは不安過ぎるからな

本当は果物は1つでも有れば能力で増やす事も出来るけど、新鮮さが失われているような気がする

気がするだけで、実際は影響は無いんらうけど、やはり気分の問題は大きい

さくやには常に良い物を食べさせたい

最近、秋めいて来た山の中でリンゴやブドウを採ってくる

両方とも外来種な筈だが、深くは考え無い

あるものはある、そう考えよう

縁側で真つ赤に染まつた木々を眺めながら団子を食べつつお茶を飲む
風流だ

外国じゃ、こつはいかない

さくやは隣でキャツキャと笑いながら落ちる紅葉もみぢを掴もつとしている

「さくやー、楽しいかー？」

「あー」

「そうかー」

のんびりって表現がぴったりだな

「爺臭いなー」

ん？萃香か

「何しに来たんだ？酒を飲むには早い時間だぞ？」

「散歩してたら近くまで来てたんでね。顔出してみたんだ」

散歩って言っても、霧状になって漂っているだけだろうに

「で？何でこんな所で年寄り臭い事してたのさ？」

「年寄り臭いとか爺臭いとか、俺は結構な歳だぞ？」

もうかれこれ……………何歳だっけ？

昔、妹紅に訊かれた時は1500歳くらいだったから

あれから……………何年経ったっけ？

「へへ、何歳くらいなの？」

「ちよつと待て、今思い出している」

えいと、諏訪子と神奈子の所で100年くらい……………その後の幻想郷で数百年……………正確には何年だったっけ？吸血鬼一家の所で数年……………スキマの中で何十年か……………

1800から2000歳くらいだな、きつと、多分

むしろそれで良いや

「2000歳くらいで良いよ」

「随分時間掛かったね。しかも良いよって何さ」

「細かい事気にしてるとハゲるらしいぞ？」

「そしたら他の人から髪の毛を萃^{あつ}めるから大丈夫」

「色がバラけるだろ」

不毛な話はこれくらいにしておくか

「そう言えばさあ。灰刃って死ぬと強くなるってホント？」

「……誰に聞いたんだ？」

「勇儀と紫から。昔、酷い目にあっただって言ってたよ」

別に隠す事じゃ無いけど、釈然としないのはなんでだろう？

「間違っても殺そう何て考えるなよ？本気で後悔するからな」

「そうなの？ならさ、もう一回戦る？後悔してみたいからさあ」

「話を聞け」

アイツを出して萃香を喰えってか？冗談じゃ無い、そんな面倒な事は御免だ

後々に鬼が攻めて来るだろうし、紫やら射命丸やらが事情聴取に来るだろう

「お前、多分勘違いしている。俺は死んだら俺とは別の俺が出て来るんだ」

「別の俺？よく分かんない」

「あゝ、つまりだな？」

ここですっかり説明しておかないと寝首でも掻きに来そうだ

面倒だけど説明しておくか

「へー、そうなんだ」

とりあえず、理解してくれたか

「そんなに強いんだ」

「お前、本当に分かったのか？アイツは制御出来ない奴だからな？絶対にやるなよ」

「ちえー、分かったよ」

とりあえず、これで大丈夫だろう

落ち着いてから気付いた、さっきからさくやが静かだな

横を見てみれば、静かな筈だ

その場で引っくり返って寝ている

ん？今、さくやの近くの葉が一瞬だけ止まった様に見えるな………
気のせいかな？

まあ良い、さくやを部屋に運んでやるう

「それでさー、紫が変なこと言ってたよ」

さくやを布団に入れてから、縁側まで戻ると萃香が話題を振ってきた

「変な事？」

「うん、前にアタシと灰刃が戦った時に歪んだって」

歪んだ？紫の性格がか？もう矯正は絶望的だろうな

「歪んだって、何が？」

「さあ？詳しくは聞かなかったし」

歪んだ、ねえ

紫の言う事だし、話半分で聞いとくのが良さそうだ

その後、しばらく萃香と話していたが、行く所があるとかで帰って
いった

縁側でゆっくりしていたけど、そろそろ暗くなる

夕飯の準備をしようと立ち上がった所で遠くに小さく火柱が見えた

「何だ？確かあつちには……竹林があつたっけか？力があまってる奴の遊びか何かだろうな」

特に気にせずに入った

さて、今日の飯はどうしようか

「やっぱりやめようよ〜」

「だいじょうぶ、あたいはサイキョーなんだから!」

朝、騒がしい声で眼が覚めた

既に太陽は昇りきっているみたいで、すっかり明るくなっている

寝過ぎしたか？

「ここにいる妖怪、できなさい!あたいと勝負よ!」

何だか外が騒がしい

まだ寝ているさくやを置いて玄関に向かい戸を開ける、外を見ると
子供が2人立っている

ショートカットの青い髪と青いワンピース、背中に氷柱氷柱が6本、浮
いている

もう1人は、サイドポニーの緑の髪に紺に近い青のワンピース、背
中から半透明の羽が生えている

「あんなね!さあ、あたいと勝負よ!」

俺の直感が語っている、こいつはバカだと

「何で俺がお前と勝負しなきゃいけないんだ?」

「きまつてるじゃない!………何でだっけ?」

こいつの言動が物語っている、こいつは間違いなくバカだと

「むっ……大ちゃん、何でだっけ？」

「チルノちゃん、忘れないでよ」

何やら小声で話し合っている

その姿が何処と無く微笑ましい

「そうだった！アンタとあたいでどっちが強いか勝負よ！」

どうやら目的を思い出したみたいだが……面倒な事を言い出す

「断る、朝っぱらから面倒な事をさせるな」

「ふふん！あたいの事が怖いのね！」

何やら胸を張っている

こいつは妖精だろ？何でこんなに強気でいられるんだ？

ふと横を見れば、大ちゃんと呼ばれた妖精がペコペコと頭を下げている

常識人と馬鹿のコンビか、バランスは良さそうだ

「ちょっと！あたいを無視しないでよ！」

しばらく緑髪の妖精を眺めていると、青髪が怒り出した

あゝ、適当にあしらった方が良いのか？これ？

「はぁ……勝負って殴り合いでもするのか？」

自分で最強等と言い出すくらいなんだ

それなりの強さを持っているのだろうが、所詮は妖精だ

それなり止まりだろう

「そうよ！それでどっちが強いか決めるの！」

……腹、減ってきたな

飯にしよう

「何にせよ、飯を食ってからで良いか？」

さくやもそろそろ起きるだろうし

「仕方ないわね、あたいも鬼じゃないわ！ばんじえんの状態でかか
つてきなさい」

万全が言えてない

……まさかこいつら飯食ってる間、横で待ってる訳じゃないよな

落ち着かないな

「お前らも飯食っていくか？」

少なくとも一緒に食べていれば息苦しさは感じないだろう

「ふ、ふん！そうやって恩を売って手加減でも狙ってるんならそうはいかないんだから！」

「でもチルノちゃん、ご飯まだでしょ？私もチルノちゃんに強引に連れ出されたからまだだし、お腹減ったよ？」

大ちゃんとやらは振り回されるタイプか

相手がこんなのにじゃ苦労してるんだろっな

「万全の状態で戦うんだろ？良いから食っとけ」

チルノとやらの頭を撫でてやる

「子供扱いしないでよー！」

口ではそんな事を言いながら、身体は正直なように空腹を訴えている
つまりは腹が鳴った

「良いから、大人しく待ってる」

2人を居間に案内し、一旦さくやの寝ている部屋に向かう

案の定、さくやは既に起きており、今にも泣き出しそうな顔をして

いた

そんなさくやを背中に固定し、朝食の準備を始める

因みにさくやは俺の背中と髪がお気に入りに入りやすく、背負ってやれば
機嫌が良くなる

俺の髪を引っ張って遊ぶという、さくやの毎朝の恒例行事をスルー
しながら献立を考える

まずは米、これは譲れない

とは言っても、幻想郷でパンは手に入らないので問題無い

麦は少量だけど作っているから焼こうと思えば焼けるけど

次は味噌汁

油揚げか豆腐か迷うが、今日は油揚げにしておこう

焼き葱を入れても良いかもしれない

ほうれん草のおひたし

昨日、人里で買ってきたほうれん草を調理する、鮮やかな緑色が食
欲をそそる

焼き鮭

にとりに買った鮭を切り身にして焼いただけ

それでも朝食にはぴったりの一品だ

出来上がった朝食を運ぶ

今日のさくやの食事はぶどうのすり潰したものだ

タイミングを見て運びに来てくれた緑髪に礼を言いながら食卓につく

「いただきます」

口を揃えて言うのを見ると、本当に仲が良いのだと分かる

美味そうに食べる2人を見ながらさくやの口にぶどうを持っていく

時折、目の前の妖精たちがこちらをチラチラと見てくる

そういえば、まだ名前を聞いてない

「今更だけど、お前らの名前は？」

食べるのを中断してこっちを見てくる

「す、すいません、気付きませんでした。私は大妖精です。大ちゃんって呼ばれてます。で、こっちはチルノちゃんです」

成程、大妖精だから大ちゃんか

「俺は灰刃、この子はさくやだ」

さくやを持ち上げて見えやすくする

「あの、その子って人間ですよ？何で妖怪の貴方が人間を育ててるんですか？」

やっぱり妖怪が人間を育てるのは変なのか

だからと言ってさくやを手放す事は有り得ないが

「おかしいか？」

「あ、いえ、そんな事無いです！ちょっと気になったので」

慌てて否定をしてくる

別に怒った訳じゃ無いんだけど

…さつきからチルノが食べるのを止めない

そんなに腹が減っていたのなら、飯を食ってから来れば良かったのに

飯を食い終わって、さあ戦るかと思ったが、飯を食ったらここに来た理由を忘れたのかチルノは帰って行った

何しに来たんだか

寺子屋

時の流れは早いと最初に言ったのは誰なんだろうか？

思えば色々な事があった

アイツに喰われて妖怪になって。1000年、山でだらだらして

旅に出て、色んな村に立ち寄って……そっいえば名前も知らない鬼の所に泊めてもらった

近くの村で名前を貰ったっけな、あの陰陽師はその後どうしただろう

そのすぐ後くらいに紫と始めて会ったんだっただ

思えば、あれが紫との腐れ縁の始まりだったのか

平安京に行つて輝夜と妹紅に会つたんだつたな、2人は今どうしているか

生きてはいるだろうから、何時か会えるだろう

その後に幽香と会つたな、幻想郷に引き摺り込まれもした

妖生、駆け抜けたつて感じか？

これだけ思い出すのに大分掛かつたけど

「父さん、何してるの？」

そうそう、一番早かつたのはさくやに関する事だ

「いやな？昔の事を思い出していてな」

昔はあんなに小さかつたさくやがもう5歳だ

「ふうん。あ、お洗濯するから服脱いで」

さくやの手によつて着ているものが塗り取られる

あつという間にパンツ（自作）だけにされてしまふ、因みにトランクス型だ

「さくや、俺は父の服を塗り取るような娘に育てた憶えは無いぞ」

「父さん、放つておくと何日もお洗濯しないじゃない。偶には洗わないと汚いよ？」

そう言われたら反論できない

面倒臭がりな所が似なくて良かったと思っておこう

幻想郷から鬼の姿が消えて何年になるだろうか？

人間に愛想が尽きたとか言ってた気がするけど……聞き流していたのと酔いで良く憶えてない

萃香は地上に残るらしいが、勇儀が他の鬼たちと地下に移った

とは言っても、何日か置きにスキマを繋げて宴会を開いているので別れたという気がしない

地上の妖怪たちが地底都市を認める条件として、妖怪を地底都市に入り込ませない代わりに鬼は旧地獄の怨霊を封じる、という約束がある。鬼は地上に出て来れないのだが、俺の家に誰を招待しようが俺の勝手だ

にとりや射命丸もこの件にだけは口出ししない

紫も黙認している、問題が起きない限りは平気だろう

鬼たちに喧嘩を売られないのも少し寂しい気がする

チルノと大ちゃんも偶に宴会に参加している

さすがにサイキョーを名乗るチルノでも鬼の酒量には対抗できずにくでんぐでんになって大ちゃんに抱えられて帰っていく

見慣れた風景ではある

他には何かあったか……？

「父さん、ご飯出来たよー」

「おー、今行くー」

さくやに料理の腕前を抜かれたくらいか

才能ってのは恐ろしい

最近のさくやは

「父さん、きゅうりはもつとぶつぶつしている方が美味しいんだよ。すぐに適当に選ぶんだから」

とか

「父さん、お茶碗は水に浸けておいてって何回言ったら良いの？」

とか

「たまには布団くらい干しておいてよ」

とか

一体誰に似たんだか

……少なくとも、俺じゃ無い事だけは確かだな

藍か？たまに紫の家に行っでは色々教えてもらってるみたいだし

いや、俺みたいになっても困るんだけど

しかし、一番困ったのはあの質問だな

「父さん、どうして私と父さんは違うの？」

ある日、さくやが唐突に尋ねてきた

「違う？違うって何が？」

若干だが思いつめている感じだ

「父さんには翼があるのに私には無いし……角もないし……」

遂に来たか

いつかは来るだろうと思っていたが……いざ来てみると答えに困るな

どうしたものか……

本当の事を言ってもいい気がするが、それでショックを受けて塞ぎ込んでしまったらと思うと言つべきか迷う

しかし、先延ばしにするのも限度があるだろう

けど、それでももしさくやに嫌われたら……

でも何時までも言わないでおく事は出来ないだろうし……

ああ、一体どうすればいいんだ!!

ここは、奥の手を発動しよう

「さくやがもう少し大人になったら教えるよ」

逃げだろうと何だろうと好きに言えば良いさ

「大人になったら？それっていつ？」

この質問の正解って何なんだろう

「そうだな……さくやが夜、一人で寝られるようになったらかな」

「だったら子供で良い!!」

おおう、嬉しい事言ってくれるじゃないの

こんなさくやも何時かは男を連れてきて

『この人と結婚します』

とか言うのかなあ

……想像したら腹が立ってきた

お父さんより弱い男は許しませんよ!!

「父さん？」

おっと、変な世界に行ってた

「ああ、何でも無い。それより最近、人里に寺子屋が出来たらしいな、さくやも通ってみるか？」

「良いの!?!……でも、お料理とかお洗濯とかしなきゃ……」

「さくやが小さい頃、誰が飯を作っておしめを洗ったと思っている?。」

言つと、さくやの顔が明るくなり、見て分かる程にウキウキしている

こうして後日、人里の寺子屋にさくやを連れて行く事になった

一応人間の姿で行った方が波風が立たなくて良いだろう

で、人里の寺子屋までやって来た訳なんだが……

何だか見覚えのある人と見詰め合っている

向こうも同じらしく、2人で首を捻っている

横からみたら、さぞ滑稽に見えるだろう光景だ

しかし、どうしても思い出せない

この特徴的な四角い帽子、絶対に何処かで会っていると思うんだけど

「父さん、どうしたの？」

さくやも不思議そうに訊いてくる

思い出せないものは仕方ない、話を進めよう

「ああ、何でも無い。それより、この子を寺子屋に通わせたいんだけど」

見覚えのある人も諦めたらしく、進める事にしたらしい

「分かりました。責任を持ってお預かりします」

その後も少し話をして、早速今日からとさくやを連れて建物の中に入ってしまった

後で迎えに来れば良いとの事なので、一旦家に帰る事にした

夕食の仕込みを一段落させて、縁側でのんびりお茶を啜る

遠くには最近、恒例になった火柱が見える

さくやがないと家の中が静かに感じるから不思議だ

……すっかり勉強しているだろうか

イジメられてないよな？

こつそり様子を見てみようか？

いやいや、そんなみつともない事はしない方が良く

けど、気になる

大丈夫だ、さくやを信じよう

そつだ、さくやの初授業だし、射命丸にカメラを借りて写真を撮った方が良くかも知れない

ダメだ、授業参観でもないのに教室に乗り込むなんて真似出来ない

俺も大昔に身を以って味わった筈だ

ああ、悶々としてきた

「どうかしたんですか？愉快な事になってますけど」

気になりすぎて縁側をゴロゴロと転がっていた俺に、何時の間にか来ていた射命丸が話しかけてきた

「実はさくやがな、寺子屋に通うようになったんだ。それがどうにも気になつてな」

すると、射命丸が成程と頷いた

「それなら私が取材ついでに見てきますよ。もちろん写真も撮ってきます」

「射命丸、長い付き合いの中で初めてお前が頼もしく見えた」

ホントに、まるで輝いているかのようだ

「普段から頼りにしても良いんですよ？」

「それに関しては………スマン」

「何で謝るんですか!？」

しばらくは射命丸とじゃれあっていたが、早く行かないと授業が終わる

さっさと行けと蹴り出してやる

空で「何するんですかー!？」とか言っていたが、すぐに飛び去って行った

射命丸が帰って来ない

もうすぐさくやを迎えに行く時間だ

仕方ない、これ以上は待つについても無駄だと判断して人間の姿になって人里近くにスキマを繋げる

里の中を横切って寺子屋に向かう

「灰刃さんじゃない、今日はさくやちゃんと一緒にじゃないの？」

歩いていると、八百屋のお姉さんに声を掛けられる

「ああ、さくやは今、寺子屋に行っていてな。その迎えに来た所だよ」

「へえ、さくやちゃんもそんな歳になるのねえ。私も老ける訳ねえ」

「何言ってるのさ、まだまだ若いじゃないか」

「そう言ってくれるのは灰刃さんだけよ。うちの亭主なんて……………」

おっと、愚痴モードに突入した

こうなると長いんだよな、この人

幸い時間にはまだ余裕があるし、日頃から世話になってるんだ

少しくらい付き合おう

「……………なのよお、ひどいと思わない？」

「確かにそれはひどいな」

女性は立ち話でこんなに話せるものなんだな

かれこれ、20分程経っている

「あら、少し話し過ぎちゃったわね。そろそろさくやちゃんの所に行ってあげて」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

どうやら満足したらしいので、お言葉に甘えて寺子屋に向かう

若干すっきりとした顔をしたお姉さんに見送られて歩き出した

「あ、父さん！」

寺子屋の前で待っていたさくやが俺の姿を見つけ駆け寄って来た

「どうだった、楽しかったか？」

豪快に飛び付いてきたさくやを受け止める

「うん！色んな事教えてもらったよ！」

どうやら随分と楽しかったらしい

「途中で射命丸さんが来たり私と同じ髪の色をしたお姉ちゃんと遊んでもらったりしたよ！」

射命丸、ちゃんと来ていたんだな

なら何故帰って来なかったんだ？

「そうか、なら遊んでくれた人には今度お礼を言わないとな」

まあ射命丸の事だ

別の何かを取材しに行ったんだろう

「うん！さっきまで居ただけだな」

八百屋のお姉さんと話していた所為ですれ違ったようだ

いずれ会えるだろうし、気にする程でも無いか

「さて、帰るか」

「うん」

家に帰るまでの間に今日あった事を嬉しそうに話すさくや

そのさくやに返事をしながら里の外れで妖怪の姿に戻り、さくやを抱きかかえ空を飛ぶ

明日からもさくやを送り迎えしなければならぬ事にちよつと面倒だと思いつつ、こんなのも良いかもしれないとも思っていた

寺子屋（後書き）

迷いましたがさくやはこんな感じに育ちました

後はどうやって紅魔館に行かせるか………また迷う事柄が増えました

9 / 2 2 微修正しました

番外編・慧音（前書き）

スランプ継続中

こんな仕上がりのものを載せて良い物かどうか…

こんなものを上げて大丈夫か？

大丈夫とは言いがたい

私たちがこの幻想郷という名の土地に住み始めてもうすぐ5年が経つ
思えば長い旅路だったと思う

記憶が霞むくらいの昔から、私は妹紅という少女と旅を続けてきた
旅の始まりは私にとっては些細な、しかし妹紅にとっては大きな理
由からだったと記憶している

昔、妹紅を妖怪と勘違いして襲った事がある

その当時の妹紅の連れである、名前が…確か…：…灰刃…：…だったか
正直、顔はよく憶えていないが

その灰刃と妹紅を勘違いの詫びとして家に招待したのが始まりだった

食事の後、私の身の上話が原因で灰刃と妹紅は口論となり、場を収める為に泊まっていたいく事を勧めた

しかし、次の日の朝に灰刃は姿を消した

それを知った妹紅は激しく落ち込んでいた

自分の所為で灰刃は姿を消したんだと

しばらくは食事も喉を通らない様子だったが、ある日決心したかのようになり私に尋ねてきた

近くに妖怪は集まる場所はないか？

私は尋ね返した

何故、そんな事を訊く？

理由は簡単なものだった

灰刃を探す、心当たりが無いから妖怪が集まっている所を片っ端から探していく

私は当然、反対した

だが、妹紅の決心は固いようで、教えてくれないなら自分で探すと家を出て行ってしまった

私は心配になった

私の原因の口論で、妹紅が死にでもしたら申し訳がない

向こうが勝手にした事だと切り捨てる事が出来れば楽だったかも知れない

でも私はそれを出来るほど非情では無かったらしく、結局は荷物を纏めて追いかけた

妹紅に追い付いた時、既に妹紅は妖怪の住処に入って戦闘をしていた

炎を操り妖怪を牽制していたが、明らかに分が悪かった

水の気質でも持っている妖怪だったのか、妹紅の放つ炎は消され、追い詰められていった

妹紅に加勢し、なんとか妖怪を撃退できた時は心底安堵した

恐らくは妹紅はこれからも無茶を続けるだろう

そう思った私は妹紅の旅に同行すると申し出た

始めの内は渋っていた妹紅だったが、なんとか説き伏せ納得させた

こうして妹紅と私の長い旅が始まった

最初の頃は妹紅と各地を旅をしながら修行の真似事をした

強くならないと妖怪達から話を聞く事すら出来なかつたからだ

ある程度まで強くなると、今度は聞き込みに力を注いだ

時に人間から、時に妖怪から

根気強く聞き込みを続けた

偶に妖怪退治をして旅の路銀を稼いだ

妖怪からの聞き込みと人間からの聞き込み、更に路銀まで稼げると

いう一石三鳥の手段だった

とある有名な神社に行ってそこに居る神にも話を聞こうと思ったが、流石に会わせてはもらえなかった

そうしている内に、何時の間にかこの国の隅々まで探し終えていた
ただ一箇所を除いて

私たちが幻想郷の話聞いたのは旅を始めて五百余年ほど経過した頃だった

既に妹紅は半ば諦めているようで、惰性で旅を続けているだけの無気力な状態だった

私は妹紅に提案した、諦めようと、定住の地を目指そうと

妹紅から不老不死の事を聞いていた、私も半獣なので寿命は計り知れない

ならば、妖怪たちと人間たちが一緒に暮らしていると言う幻想郷に行ってみよう

妹紅は半ば死んだような目でそれを了承してくれた

幻想郷には人里と呼ばれる人間たちの領域があった

身体は妖怪に近い私達だったが、心は人間だ

だから、人里の長に頼み里に住まわせてもらった

初めの内は畑を耕したり、米の収穫を手伝ったりしながらその日の糧^{かて}を得ていた

妹紅も手伝ってはくれたが、やはり無気力な所は変わらなかった

幻想郷に住み始めてしばらく経ったある日

里の中の子供たちと話す機会があった

その子たちは外の歴史を何一つ知らないと言った

これまでにこの国であった色々な事を知らないと言ったのだ

確かに、畑を耕すのに歴史は必要ないだろう

食事をするのに学は必要ないだろう

しかし、このままでは里は停滞を続けるだけだ

聞く話では、妖怪の山にいる河童たちは様々な発明をしていると言っ
もしかしたら、いずれこの里の人間たちは幻想郷内の妖怪たちに飼
われるだけの家畜に成り下がるかも知れない

それではいけない、幸い私には長い旅の間で培^{つちか}った知識がある

私は人里の発展の為に寺子屋を設立する事にした

里の子供を集めてあらゆる事を教える、そうすれば里は発展するだ
ろう

そう信じて、私は里の長に話を持ちかけに向かった

寺子屋を設立してから約一年が経過した

結果を言えば成功だと思う

始めの頃は学をつけるよりも畑を耕す手伝いをしろという考えだった里の者達も、徐々に興味を惹かれて除きに来る事が多くなった

そして里の発展に役立つと認めてくれる人が多くなった

私は充実していた

加えて、妹紅が最近昔のような目に戻ってきた

理由は詳しくは知らないが、度々出かけてはぼろぼろになって帰ってくる事が多くなった

人間と妖怪を合わせても、かなりの強さを持つようになった妹紅が苦戦するような妖怪でも見つけたのだろうか？

不老不死であろうとも心配な事に変わりは無く、だが本人は問題無いとしか言わない

無気力よりは良いと、しななくは様子を見る事にした

寺子屋に通う子たちが増えてきた

家の手伝いがある子や通えない理由がある子は仕方ないにしても、
これは嬉しい

今日も張り切って頑張ろうと思っていた時、変わったお客さんが現
れた

妖気が出ている所を見ると妖怪なのだろうが、何故か気になる

何処と無く見覚えがある顔なのだ

幻想郷内の妖怪で顔を知っているのは、幻想郷の管理者を名乗る女性の妖怪と文文。新聞なる瓦版かわいばんを無断で置いていく烏天狗くらいの筈だ

しかし、現に見覚えのある顔がそこにいる

思い出そうと首を捻る

向こうも同じなのか、同様に首を捻っている

頭の中にある記憶を総ざらいしてみるが、思い出せない

意を決して尋ねてみよう、そう思った時、妖怪の隣にいた子供が声を発する

「父さん、どうしたの？」

親子だろうか？

それにしても似ていない

髪も白いので妖怪なのだろうが、それにしても妖気の類を感じない

「ああ、何でも無い。それより、この子を寺子屋に通わせたいんだけど」

何か複雑な事情でもあるのかも知れない

あまり聞かない方が良くない事もある

「分かりました。責任を持ってお預かりします」

害は無さそうなので引き受ける事にした

恐らくは山に住んでいる妖怪だろうから、後で迎えに来てくれと伝えると妖怪は帰っていった

さて、そろそろ時間だ

新しい子も来た事だし、早めに紹介を済ませてしまおう

日常（前書き）

今回の本編は1話だけです

むしろ、何故に2話ずつの更新を続けていたのか自分に問いたい
……いや、続けたいとは思ってるんですけどね？

ある日、さくやを寺子屋に送った後、天気が良いので洗濯をしていると

「灰刃さーん！写真が出来上がったので持って来ましたよー！」

能天気な声が辺りの響いた

見上げてみれば、射命丸が数枚の四角の紙を持って飛んで来る所だった

「ああ、遅かったな。てつきり別の取材に行ったのかと思っていたけど」

「写真の現像には時間が掛かるんですよ」

降りてきた射命丸から写真を受け取る

そこには机に向かい授業を受けているさくやと、やはり見覚えのある女性が教鞭を取る姿が写っていた

見覚えのある青いワンピースに四角い帽子、白っぽい長い髪

絶対に何処かで会っていると思うんだが……思い出せない

「なあ射命丸、この人の事何か知らないか？」

「どの人ですか？……ああ、この人はちょっと前に幻想郷に住み始めた人ですね。名前までは知りませんが、この人がどうしたんですか？」

「いや、知らないなら良いんだ」

射命丸も知らないか

後の手段としては本人に直接訊いてみる事だけ……面倒だ

さくやなら知っているだろうから、帰って来たら訊いてみるか

家事を済ませ、改めて射命丸の持ってきた写真を眺める

さくやが机に向かい、教科書だと思われる本を持って先生の話を聞いている

この時代では紙は貴重品だというのに、律儀なものだと思う

それだけ教育に熱心なんだろう

そういえば、学費の類はどうすれば良いんだ？

……今日迎えにいった時にでも訊いてみよう

「ところで……」

「どうしたんですか？灰刃さん」

射命丸が饅頭を頬張り、お茶で流し込んでいる

「何で当然のように家の饅頭まんじゅうを食っているんだ？」

「写真の報酬ですよ、これくらい良いじゃないですか」

まあ饅頭くらいなら構わないが、食べている所を見るとこっちも食べなくなる

射命丸が伸ばした手を遮り、最後の饅頭を手に取る

「あー！何するんですかー！」

「元は俺のだろうが」

そう言うと、最後の一個の特別さがどうたらと言ってきた

仕方が無いので能力で饅頭を増やす

ぼこぼこ増えていく饅頭が皿の上に積み重なっていく

それに気を良くしたのか、射命丸は口に饅頭を運ぶ作業を再開する

「それにしても不思議ですねー、灰刃さんが増やした物って何処から来るんです？」

言われてみれば確かに不思議だ

「さあな、俺の妖力が形と性質を変えて出てきているんじゃないか？もしくは細胞分裂とか」

多分、深く考えたら駄目なんじゃないかと思い、そう結論付けておく

しばらくの間、射命丸と饅頭を食べながら雲を眺める

こういったのんびりした時間も悪くない

「お兄さん！」

何時の間にか開催された饅頭の大食い大会をしていると、にとりが両手を振りながら飛んできた

「ほおにほりは、ほうひた？」

いかん、饅頭の所為でうまく喋れない

急いでお茶で流し込む

「んっ、おお、にとりか、どうした？」

何事も無かったかのように言い直す

「うん！お兄さんに教えてもらったのが出来たから呼びに来たんだ」

若干だが興奮気味のととり

どうやら、前に戯たわむれに言った物を作ったらしい

「何ですか？教えたって」

「ああ、実はな……」「良いから！早く来てよ！」

引きずられるような勢いで引っ張られる

宙吊りになる前に自前の翼を広げて飛ぶ

「何か面白そうなので私も着いて行きます」

射命丸も着いてくるみたいだが、しっかりと饅頭の山が乗った皿を持ってくる

食い意地の張った奴だ

にとりたち河童が住みかにしている洞窟に来た

これまでに何度も訪れているので、人見知りな奴からも挨拶される

にとりに手を引かれ洞窟の中に入っていく

「これだよ、お兄さん」

にとりに見せられたのは、木で出来た大きな箱だ

「名付けて『全手動洗濯機』。使い方は簡単、この取っ手を回すと中に入れた水が激しく回転して洗濯物の汚れを落とすんだ」

実演を交えて説明していくにとり

しかし、「冗談で話しただけなのに、本当に作るとは……………恐るべき河童だ

「そして注目して欲しいのは、洗い終わった洗濯物を水を抜いてから回す事によって脱水まで出来る事！この機能を完成させる為に着の服が空を舞った事が……………」

しっかりと調整しないと洗濯物が遠心力で飛び出してしまつらしい
今までは洗濯物の発射装置でしかなかったととりは語る

「たったあれだけの情報で本当に完成させるとは思わなかったな」

「お兄さんの発想が面白かったからね」

当然の事ながら、この時代には機械はおろか機械と言つ言葉すらない
そんな中で洗濯機の不完全な情報からここまで再現させる河童の技術は凄まじい

俺もつろ覚えな知識を話しただけなのにな

「これからはお兄さんに聞いた全自動を目指して頑張っていくよ」
動力が確保できないと無理かも知れないが、にとりなら何とかしそ
うで怖い

とりあえず今見たのは試作品なので今度、完成品を持って行くと云う

そんな中、饅頭を啜^{くわ}えながら写真を撮るといふ器用な事をしている
射命丸が見えた

「いやー、良いネタが手に入りましたよ」

言いながらも饅頭だけは離さない

そんなに饅頭に拘らなくても良いだろうに

「取材をするなら事前に申請をしておいてくれるかな!」

「ちょっとくらい良いじゃないですか!」

烏天狗対河童の争いが起こっている

巻き込まれてもつまらない、早々に退散しておこう

洞窟内の河童たちと少し雑談をした後、家に帰ろうと思ったが、まだ時間はあるがやる事が無くなったので早めに里に向かう事にした
どこで時間を潰すか迷ったが、茶屋に入る事にした

さくやが寺子屋に通うようになってから、偶に立ち寄る和風喫茶店だ

「いらっしゃい、ってあら灰刃ちゃ〜ん」

普段、里の中で見ない顔は妖怪だと前に八百屋のお姉さんに言われたが、ここでもそれは当てはまる

「ちゃんはやめてくれって言うてるだろ？まあ良いや」

少し前に茶屋に来た時にお姉さんに顔を見られた途端に妖怪だとバシた

こっちが襲う事の無い妖怪だと分かってもらってからには気さくにちやん付けで呼んでくる

間延びする言葉で話す結構可愛い女性だ

「寄っていくのよね〜、一名様、ごあんな〜い」

いくつか並んでいるテーブルの一つに案内される

テーブルもこの時代には無い筈なのだが、幻想郷では何でもありだ

「はい、お品書き〜。決まったら呼んでね〜」

メニューを置いて他のお客さんの対応をしにいつてしまう

いつも頼む物は決まっているが、一応目を通す

……いつもは無い物がメニューに載っている

コーヒーと紅茶か、幻想郷では何でもありって事にしておう
茶屋に来たら団子とお茶のセットを頼むが、今日はコーヒーを頼んでみよう

お茶は家にもあるけど、この店主が淹れたお茶は俺やさくやの物とは一味違う

しかし、今回はコーヒーだ

もしかしたら、一味違うコーヒーを飲ませてくれるかも知れない

「お姉さん、団子とコーヒーをお願い」

「はいはい。お団子と珈琲お願いします」

奥にいる店主に注文を伝えている

人里の七不思議の一つに『茶屋の店主の姿』があつて、誰一人として店主の顔を見た者はいないとか

どうでも良いか

しばらく待って、運ばれてきた団子とコーヒーを見る

団子はあることみたらしが2本ずつ皿に乗っている

コーヒーは……うん、コーヒーだ

黒い液体から独特に香りが漂ってくる

一口飲んでみると、やはり違う

吸血鬼一家の家で飲んだものとは一味違う

これは良いものを頼んだと思いながら団子を一本齧る

……合わない

コーヒーの苦味とみたらしの甘くてしょっぱい味が絶望的なまでに合わない

いや、人によっては好きとか嫌いじゃないとか言うかも知れないが、俺には許せそうに無い

これは、早々にどっちかを片付けてどっちかに集中した方が良い

そう判断した俺は、団子を片付ける方を選択して味合わずに飲み込んでいく

少し勿体無い事をしたと思いながらコーヒーを飲む

「あら、灰刃ちゃ〜ん。お団子、もう食べちゃったの〜」

団子の一人早食いを見ていたらしく、茶屋のお姉さんが寄ってきた

「ああ、コーヒーと合わなかったからな」

「そうなの〜？でも、お団子と珈琲を一緒に頼む人もいるのよ〜？」

何だ？そんな物好きがいるのか

「白い髪で、赤い目の女の子、お団子と珈琲が大好きみたいよ。いつもならお店に来てる時間なんだけど」

白い髪で赤い目？妖怪か何かか？

「随分と珍しい色をしているんだな」

するとお姉さんはちよつと怒ったようだ

「駄目よ、灰刃ちゃん、女の子を外見で差別しちゃ」

「分かってるよ。俺だって妖怪の姿に戻れば全身が灰色だって」

辛うじて目だけは黒だけど、髪やら翼やらは灰色だ

見えない所も灰色だけど、今の所見せようと思う人はいない

「そういえば、灰刃ちゃんも妖怪だったわね」

「出来れば忘れないでもらいたいな」

そろそろ時間だ

白い髪と赤い目に心当たりがあるような気がするとか思いながら、さくやの為に団子を買ってから茶屋を出て寺子屋に向かった

卵（前書き）

遅くなり過ぎまして申し訳ありません

微妙な出来で申し訳ありません

生きてて申し訳ありません

朝、眠気を払いながら起きる

今日も変わらず、家事をこなす為に起き上がる

この時に隣で眠っているさくやを起こさないように注意するのを忘れない

これからさくやの弁当を作ったり、朝飯の準備をしたり。さくやが起きてから洗濯、掃除を終わらせてスキマを人里の寺子屋まで繋げる

忙しいと言えば忙しいが、充実しているとも言え換える事が出来る

そんな日課になっている事を済まそうと立ち上がろうとして、違和感に気付く

まだ布団の中にある足に何か硬い物が触れた

深く考えずに布団に手を突っ込み、硬い物を掴んで手を引き抜く

……………卵？

布団の中から出てきたのは、紛れも無く卵だった

何故、俺の布団の中に卵が入っているんだ？

寝る前に布団に入った時には当然何も無かった

誰かの悪戯か？いや、俺の布団の中に卵を入れて得する奴は人間にも妖怪にも鬼にも居ない……………筈

さくやには食べ物で遊ぶなど厳しく言っている、萃香はこんな暇な事をするぐらいなら酒と肴を持って大声で俺を起こすだろう

他に可能性があるとするれば、紫と射命丸か？

紫の方が可能性は高そうだけど、藍が食べ物を粗末にする事を許さない、射命丸なら記事の為にやりそうだが、写真を撮りにこない所を見ると犯人ではないのだろう

なら一体誰が？

いや、待てよ。食べ物と言う認識から違うのかも知れない

俺の中では、卵＝食べ物だが、その辺を飛び回っている鳥にとっては卵＝子供だ

つまり、この卵は子供だつて事になる……………誰の？

卵は俺の布団の中にあつた、誰かが侵入したのでなければ、それはつまり……………俺の子か？

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや！落ち着け、俺、落ち着け！

大体、俺が卵生な訳が無いじゃないか！

そりゃ、翼は生えているけど俺は鳥じゃ無いんだから……………って、確かアイツの能力は食べたものを吸収する能力だったな

アイツが鳥を食べて、それを吸収していれば俺も卵生つて事になるのか？そもそもアイツの本体が鳥の妖怪かも知れない

結論として、俺の子供つて事になる？

待て待て待て待て待て、相手が居ないだろう！流石に妖怪であろうと1人で繁殖は難しいぞ？

相手が居る筈だ……………さくやじゃないよな？

違う、だったらなんで俺が生んだんだ？さくやが相手だったら少なくともさくやが生む……………あれ？それつてもしかして、俺が誰かに何かされた？

……………違つよな？そんな事無いよな？俺の貞操は無事だよな？

いかな、ちよつと頭を冷やそう

とりあえず、ぱつと着替えて卵を懐に仕舞い、庭先にある井戸から水を汲み顔を洗う

大分すつきりしたが、その分問題の深刻さを再認識してしまう

……………よし！朝飯を作ろう！

決して現実逃避じゃないぞ！

日本人ならやっぱり和食だな！今日も味噌汁が美味いぜ！

さくやの弁当も作ったし、今日はこのまま俺より強い奴に会いに行くとするか！

「父さん、何かあったの？様子が変だけど」

「はっはっは、ちょっと現実から逃げようとしているだけだ」

さくやにも分かるくらいには動揺しているらしい

「そろそろ時間だよ？父さん」

そんなさくやの言葉にスキマを開く事で答える

終始心配そうな顔でこっちを見ていたさくやには悪いが、今は本気で余裕が無い

今度埋め合わせをしましょう

それにしても、この卵は一体何なのか？

可能性を考えてみる

1 俺の子供。さくやの弟妹って事になる

2 誰かの悪戯

3 人様の子供を知らない間に預かった

こんな所か？

俺的には2を押ししたい、って言うか2であって欲しい。それか3

子供が増えるのは構わないが、それが俺の子である必要は無い訳で

な？

相手もないのに子持ちは印象が悪いと言っか、再婚する時に相手に邪険にされるかも……一旦落ち着こう

何を狂ったような事を言っているんだ？俺には既にさくやがいるっての。結婚する予定もないし

とりあえず、妖怪に詳しい奴の所に行って見よう

「あれ？灰刃さんじゃないですか、珍しいですね」

「藍、紫は居るか？」

恐らくは俺と同じ年くらいじゃないかと思っている紫の所に来た

紫の悪戯である事を祈っている自分がいたりする

「朝ですからね、もう寝る所じゃないですか？」

「緊急事態だ。起こしてくれ」

俺の真剣さが伝わったのか、「居間で待っていてください」と言い残し、藍は家の奥に消えていった

待っていてくれと言われたので勝手に入って待つ事数十分

眠たそうな眼をした紫が障子を開けて現れた

「早朝から何の用なの？くだらない用事だったら貴方でも許さないわよ？」

明らかに不機嫌な紫に、懐から取り出した卵を見せる

その卵を興味無さそうに見ていた紫だが、段々と顔色が変わってくる

「……………まさか、貴方の卵だなんて言わないわよね？」

「それが分からないから態々（わざわざ）ここまで来たんだ」

この態度を見るに紫が悪戯した訳では無いのだろう

朝からの事を簡単に説明する

説明中……………

「朝起きたら布団の中に卵……………一体誰との子なの!? 私をいうものがありません!」

「今は冗談を言ってる場合じゃ無い」

眠い所為でテンションがおかしくなっているのか?

「とりあえず、簡単に解決する手段ならありますわよ?」

言いながら卵に手を伸ばす紫

その卵をおもむろに机に叩きつけようと……………って!

「何してるんだ! 馬鹿か! 阿呆か!」

急いで卵を取り返す

実行前だったおかげで罅は入っていないが、危なかった

「何って…………卵が無くなればあつという間に解決するでしょ?」

「だからってお前! もし俺の子だったらどうする気だ!」

できれば否定したいが、俺は子宝の神でもあるんだぞ?

子供を司る神の前で子供を殺すような真似しやがって

「もうお前を頼るのはやめる。邪魔したな」

卵を懐に仕舞い立ち上がる

紫が後ろで騒いでいるが、無視して外に出た後スキマを開く

他に相談できる人物と言えば……… 1人しかいないか

「おや？あんたは確か……何時かの妖怪だったよね。遂に死んだのかい？」

「だから死んでないっての。映姫は何処に居る？」

真面目に話しを聞いてくれて、尚且つ答えをくれそうな人物。初めから映姫の所にければ良かった

「映姫様だったら死者を裁いていると思うけど？」

小舟の中で寝転がりながら川の向こう側を指差す……赤髪の女性

そつえば名前を知らないな

「自己紹介を忘れていた。俺の名前は灰刃だ」

そこで漸く身体を起こし、こちらに視線を向けてくる

「ああ、そうだったね。私は小野塚小町。三途の水先案内人さ」

水先案内人？それにしては……

「半透明な人たちが川岸をうろつろしているけど、案内しなくても良いのか？」

「良いの良いの。アタイは今、自主休憩中だから」

つまりはサボりか。気持ちは分かる

「そうか。で、映姫は川の向こうにいるのは分かった。そこで1つ

質問だ。俺が川の向こうに行っても大丈夫なのか？」

三途の川の向こう側って事は彼岸、つまりはあの世だ

映姫に会いに来てそのままポツクリは避けたい

「輪廻転生の輪に入りたいなら送るけど？」

「是非とも遠慮しておこう」

困った。これじゃ映姫に相談する事が出来ない

「……………そうだ。小野塚、映姫を呼んできてくれないか？」

「言つたる？あたいは自主休憩中だって。面倒な事は御免だよ」

言いながら、小舟の中に寝転がってしまう

面倒な事が嫌いなのは共感できてしまうので強くは言えない

此処で待つしか方法は無いか。出来ればさくやが返ってくる時間
間に合えば良いけど

気持ち良さそうに眠っている小野塚に誘われるように俺も眠ってしまっていた

頬杖を付いていた手から顎あごが落ちる衝撃で目を覚ますと、正座で説教をされている小野塚の姿が見えた

説教をしているのは……映姫じゃないか

「何度も言うようですが、貴女は渡し守としての自覚が足りなさ過ぎます。良いですか？ 貴女は……」

ああ、サボっていた事を咎められているのか

「うっ……」

起きたのなら助けると言わんばかりの視線を向けてきている小野塚だが……助けるべきか？

「聞いているのですか？」

「はい！ 聞いてます！」

面倒臭がり仲間な気もするが助けるのも面倒だ。その内に終わるだろ

と思ったのが1時間前

そういえば、俺も昔に説教を受けた時は軽く3時間は越えていた

このまま順調に行っても後2時間か………冗談じゃない

ちょっと中断してもらおうか

「映姫、ちょっと良いか？」

「？ ああ、起きたのですか？」

あからさまに助かったという顔をする小野塚

今の内に逃げろと視線で送ってみる

感謝と視線で送られてきた

こそこそと逃げていく小野塚を視界の端で見送り、映姫に向き直る

「ちょっと相談に乗って欲しい事があるんだけど」

「貴方がですか？珍しい事もあるものですね」

映姫の言葉を受け流しながら懐の卵を取り出す

「これなんだが」

掌の上の卵を覗き込む映姫

「これは……貴方の子供ですか？」

ここでもか。何で俺が卵生だと決め付ける？

「違う。実はな……」

説明中………

「朝起きたら布団の中に……ですか」

卵を手に取り見つめている

「見た所、魂が宿っていますね。育てますか？」

冗談っぽく言うてる

これで誰かの悪戯である可能性は無くなった

残るは俺の子か誰かの子を預かったか

「誰の子なのか分かるか？」

「流石に分かりませんね。生まれてみれば分かるかも知れませんが」
「参った。手がかりが無くなった」

「こうなれば俺が育てていくしか無いか」

「さくやに続いて2人目の子供か、俺まだ未婚なのになあ……………まあ良いか」

「親が判れば1番だけど……………分かった。俺が引き取って育てる」

「そうですね。頑張ってください」

「言いながら卵を返してくる映姫」

「こうなったからには責任を持って育てよう」

「さて、俺はそろそろ帰る」

「お待ちなさい」

「スキマを開こうとした俺を引き止める」

「良い機会です。貴方に訊いておきたい事があります」

「急に神妙な顔つきで見ってくる」

「何だ？改まって」

「貴方……何十年前に人間を大量に食べましたね？」

何十年前前に……吸血鬼一家の所から出てくる時か？

あの時は確かに神父らしき男と騎士団を喰ったな

「ああ、ちよつとした不可抗力でだけど」

「その土地の死後の世界を管理している者から調査の依頼がきました。曰く、大量の人間が死んだにも拘らず、その魂が一つも天に帰って来ないと」

帰って来ないと言われても、それは俺にも分からない

しかし、死後の世界にも管轄ってあるんだな

「初めの内は死に切れずに無念を抱えて地を彷徨っていると思っらしいのですが、何年待っても一人も天に昇ってこない。おかしいと思って調査してみると……」

「俺が原因だと分かったって事か」

はい、と返事をしながら頷く映姫

「どうやら、貴方が食べた者は魂まで取り込まれるようですね。……まあ、本人達に不満は無さそうですので構いませんが、それでも摂理というものがありますので出来るだけ魂ごと取り込むのは止めてください」

魂まで取り込むのか、食べたものを吸収する程度の能力だから仕方ないか……………ん？

「待て、本人達つてのは何の事だ？」

「気付いていなかったんですか？貴方の中には無数の魂たちが意思を持って存在しているのですよ？」

魂たちが意思を持って？つまり、俺の中で暮らしているって事か？

何時の間に俺は集合住宅になったんだ？

「……………本当か？それ？」

「私は嘘は吐きません」

そつだよな、閻魔が嘘吐いてたら裁かれる側も納得出来ないよな

思わず片手で額を押さえながら項垂れる

「……………中から外の様子とか見れるのか？」

「恐らくは見えてないと思いますが、大体は把握しているでしょう」

良かった、俺のプライバシーは最低限だけと守られているんだな

……………確かに、集中してみると俺の中に無数の意思のようなモノが存在しているのが分かる

「まあ、最近はこのあの世も一杯になり始めていますし、いずれ

解放するのを条件に目を瞑りましょう」「

閻魔がそれで良いのかと尋ねたいが、あまり突っ込んで藪蛇になってもつまらない

魂の解放の仕方など分らないが、ここは素直に頷いておくとしよう

「さて、私も仕事がありますので失礼します。部下の教育もある事ですし……………」

言いながら辺りを見回し何かを探している

「ふう、逃げましたね」

ああ、小野塚か。逃げた事に気付いていなかったのか？

「程々にしておいてやれよ？クソクソ口煩く言っていたら辞めるかも知れないぞ？」

辞められる仕事なのかは知らないが

「確かにそうですが、逃げた事は褒められた行為でないのは確かです。その辺りは確りとお説教をしますよ」

微笑みながら川の向こうに飛んでいく

俺もそろそろさくやを迎えに行かないと

結局、親は判らなかつたけど生まれてみれば判るかも知れない

そのままでお気楽に待ってください

卵（後書き）

スランプで書けなくなる 風邪をひく 風邪治る スランプ継続
ちまちま書いていたモノを没にする 書き直す 一応完成 何とな
く納得いかない 手直しをする やっと投稿の流れで来ました

この間2ヶ月とちよつと

ちよつと吊つてきます

花妖怪と（前書き）

随分長らくお待たせしてしまいました。申し訳ございません

良い訳ですが、ちょっと仕事が忙しすぎまして

計画停電のおかげで該当地の方々が仕事が出来ない
でもやらなきゃならない

なら、計画停電が関係ない所に廻そう

ウワー

ってな訳です

スランプもあるんですが、それ以上に時間が無いという状況でした

まあ、本当に良い訳ですがね

地震が起きる前だって書いてたんじゃないの？ って言われれば素
直にごめんなさいって言うしかないんですけどね

……ごめんなさい

花妖怪と

「うふふ。こつちよ、こつち」

「やりやがったな幽香」

「悔しかったら追いついてみなさい」

「あっはっは。待てよ、この野朗」

「待てって言われて待つのはただのバカじゃないの。それと私は野朗じゃないわよ。うふふ」

傍^{はた}から見れば和やかな会話だ

だが、その実……

「笑顔で家の玄関吹っ飛ばしやがって、誰が修理すると思っ
てやがる」

朝、さくやを送り出したのを見計らったかのように玄関を爆撃し、
こうして逃げている

別に追う必要は無いような気もするが、ここで追っておかないと再度爆撃されそうなので追いかける。

……………面倒だ

逃げている方向を見るに、何処かに誘導したいのだろう

確かこの方向は……………向日葵畑がある方向だ

幽香の事だから、向日葵畑までは行かないだろう。恐らくは途中の小高い山でも舞台にするつもりだ

俺としても、無駄に被害を出すのはかばか憚られる

大人しく着いて行くか

遠く微かに人里が見える山の上で幽香が止まる

「どうやら此処で戦^ちりたいらしい

「さて、始めましょう?」

差していた日傘を閉じてこちらに向き直る

「……はあ。俺の都合とかは考えないのか?」

「良いじゃない。あの子は寺子屋とやらに行っているんでしょ?」

あの子を理由にする事が出来ない今が好機じゃない」

何処で聞きつけたのやら……

幸い……と言って良いか分からないけど、卵は家に布団を巻いて置いてきてある

ある意味で思う存分出来るが、面倒だ。……面倒だ

まあ、幽香もフラストレーションが溜まっているのだろう。この辺で発散させておかないと何をしてくるか分からない

仕方ないと割り切って戦うしか無いか

それにしても、本当に面倒くさい

幽香が前方に突き出した日傘

毎度毎度、芸が無い

何時もの通り、日傘の先端からマスタースパークが飛んでくる

距離があるので余裕を持って避ける

が、何時もと違ってマスタースパークは何時までも俺が立っていた場所に照射され続けている

俺も経験したが、アレは前が見えなくなる

俺の姿を見失ったのかと思い油断した

その途端、背中にかなりの衝撃が襲い掛かり飛ばされる

飛ばされた先には照射を続けるマスタースパークが待ち構えていて
まともにくらった

衝撃やら熱やらを身体中で受けてもみくちやにされる

ようやく照射が終わると、幽香が嬉しそうな顔をして立っている

俺が背中に衝撃を受けて場所に、だ

ならば誰がマスタースパークを撃つたのかと照射元を見てみると、
何と日傘が浮いている

……………これが噂のファンルか

「どう？　少しは効いたかしら？」

「ああ、おかげで翼と髪が少し焦げた」

プスプスと音をたてながら煙が出ている

「……………本当に少しね」

落胆と言うか何と言うか、微妙な表情をする幽香

そういえば、俺って戦う時に先手を取った事ってあったっけ？

何時も先に相手が攻撃してこっちが反撃してって流れが多い気がする

ワンパターンだなあ。今度もし戦闘があつた先手を取ってみるか

あ、そうだ。前に紫が言っていたアレを試してみるか

確か…『あなたの能力の内2つ、増と減、上と下を同時に使うと歪むから気をつけなさいな』とか言ってたな

え〜と…増やしながらか減らして、上げながら下げると

おお、歪んでいる。何がって、空間が

何と言うか……こつ……ぐにゃぐにゃと

陽炎とかをイメージすれば分かりやすいかな

「何？ これ。気味が悪いわね」

うん、ずっと見てれば酔うかも知れないけど、それだけだな

これでどうしろと？ ……ただ歪んでるだけだよな？

ここに何かが触れたらどうなるんだ？

試しにやってみよう

右手をかざして前が見える程度の太さのマスタースパークもどきを撃ってみる

ああ、威力とかにこだわりすぎて考えた事も無かったけど、威力を

抑えて撃てば前が見えるのか、気付かなかった

で、撃ったマスタースパークもどきはどうなったか

消えた

撃った後、歪みに直撃した瞬間忽然と消えてしまった

かと思えば、こっちの様子を見ていた幽香の真後ろに出現した

直前で気付いた幽香が避けて、通り過ぎたマスタースパークもどきは別の歪みに当たり避けた幽香の横に出現する

……………これ便利だな

幽香が避ける度に歪みに当たって、全然違う所に現れて幽香を狙う

これって、俺が何もしなくても攻撃してくれるからすっごい楽

幽香が倒れるか対策を思いつくまでのんびりしているか

あれから30分くらい経過した

幽香は変わらず、と言うよりしぶとく避け続けている

時折こっちをチラッと見たりもするけど、それ以外は避けるだけ
隙を見て攻撃でもしてくるつもりなのかも知れない

……暇だなあ

何か暇つぶしになるような事は………技の名前でも考えるか？

そうになると、良い名前をかんがえなくちゃな

歪みを生み出すから歪曲とか？ 安直だな、却下

マスタースパークもどき、却下

あーでも無いこーでも無い

10分掛かっても良い名前は出て来ない

幽香がこっちに向かって妖弾を放ってきたけど、歪みに当たって追いかけてここに参加してた

増減と上下を同時に使うから………増はフとも読めるな。じゃあ、減はへか？

上はアだし下はサだなあ

フヘアサ？ 何じゃそりゃ？

フ、へ、ア、サ。不変？ 朝？

不変の朝？ 増減んの上下？ んが邪魔だけど、それが無くなると意味が通じなくなるなあ

増減ふへんの上下あひって表記してみるか？ ……子供っぽくないか？ たしか、中二病だっけ？

でも他に良い名前が浮かんでこないしなあ

「幽香はどう思う？」

ほんの少し前から横に立っている幽香に訊いてみる

「知らないわよ。あんな反則みたいな攻撃」

あゝあ、身体も服もボロボロになってる。盛大に当たってたしなあ
見えそうで見えない状態になってるけど、生憎と性欲なんてモノは
遙か過去に置いてきた

仕方なくスキマを開いて送ってやる

「次こそコテンパンにしてやるから覚悟してなさい！」

コテンパンか、懐かしい言葉だね。まさに古典

とりあえず、技の名前は家に持ち帰って煮詰めてみて、それで駄目
なら増減の上下に決めるか

スキマを開いて家に帰るが、変わり果てた玄関を見てため息を吐き
つつ大工道具を持ち出しに行く

面倒だなあ

しかし、釘を使わない伝統工芸と違ってどうやってやってるんだろ
うな

あんなのは真似出来ないけど、河童たちは出来てるんだよなあ

弟子入りでもしてみようか

やめておこう、どうせ面倒臭がって宝の持ち腐れになるのがオチだ

で、修理が終わった頃にはさくやが帰ってくる時間な訳で

正直、これから技の名前とかを考えるのは面倒臭い。もう増減の上
下でいいや

これはボムにしよう………ボムってなんぞ？

何か変な電波でも受信したか？ まあいいや

「父さん、ただい………何これ？」

開いておいたスキマを通って帰ってきたさくやが玄関を見た瞬間に
言った言葉がこれだ

「何だか……斜めになってるよ？」

一時期、修練を積んで改善した筈の建てたモノが斜めになる病が再
発したらしい

「さくや………気にしたら負けだ」

今度、河童に頼んで修理してもらおう

そつ心に誓ったとある日の夕暮れだった

花妖怪と（後書き）

えー……今回は技が出てきました

中二病です

これしか思いつきませんでした

あまり突っ込まれると泣きます

神無月（前書き）

はっはっは、見ろよおい！
約4ヶ月ぶりの更新だぜ！

本当だな！

さっさと書かないから1周年なんか過ぎていつちまってるぜ！

本当にお久しぶりです

何回書き直した事かっくらいの、それでいてのクオリティ
長く空きました、それでも読んで頂ければ幸いです

神無月

とある日の昼下がりに

さくやは寺子屋に行っていて、訪ねてくる妖怪や鬼もない

完全な自由時間、英語で言うとフリーダムタイム！……………合ってるか知らないけど

とは言っても、普段からこんな時間はある

その度に何か良い暇つぶしは無いものかと模索するが、一向に良い案は出てこない

いっその事、遠出でもしてみようか？ いや、また面倒に巻き込まれるかも知れない

だからと言って家の中に引きこもっているのもつまらない

また河童の所に行って話でもしてこようか……そうだな、それが1番良いだろう

思い立ったが吉日、早速河童の所に行こう……

『やっと見付けたよ』

最近呼び止められるのが無かったから油断していた

溜息を吐きつつ、声のした方を向いてみるが、誰も居ない

はて？ 気のせいだったのかって……

『何処見てるんだい、こっちさ』

まあ、気のせいだった試しも無いけど

その声に従い、視線を下げてみると

見事なまでに純白の蛇が1匹、こちらを見上げていた

日本全国津々浦々、色んな所を旅してきたけど、蛇と知り合いになつた憶えはない

「えーと……失礼だけど、どちら様で？」

『声を聞いて分からないかい？ 神奈子だよ』

神奈子？ 神奈子って言うのと

「八坂さん家の神奈子さん？」

『妙な言い回しだねえ。まあ、その八坂さん家の神奈子さんだよ』

……しばらく見ないうちに随分と縮んだなあ。昔はもっと大きかったのに

『神奈子ー？ 見付かったのー？』

茂みの中から蛙が1匹

聞き覚えのある声で神奈子を呼びながらぴよぴよこ跳ねてくる

『ああ、諏訪子。こつちだよ』

やっぱり諏訪子か

こつちも縮んだなあ

男子三日会わずれば刮目して見よ、なんて言葉があるけど、神もしばらく会わないでいたら活目して見なければならぬらしい。いや、

活目するまでもないか

『やっと見付けたねー。苦勞したよー』

『まったく、こんな分かりづらい場所に住んでるとはねえ』

和氣藹々（わきあいあい）と蛇と蛙が話している

異様な光景に見えてしまうのは俺だけだろうか

「いやあ……何て言うか……その……縮んだねえ」

これ以外にどう声を掛ければ良かったのだろうか

『縮んだ？ あー、色々あったからねー』

諏訪子（蛙）が空を仰ぎ見て溜息を漏らす

『諏訪子、適当な事言っんじゃないよ』

その諏訪子（蛙）を睨むように見る神奈子（蛇）

『神奈子ー、バラすの早すぎ。もう少しノツてくれてもいいじゃないかー。空気読んでよね』

何時になったらこの漫才は終わるんだろうか？

いい加減に面倒になってきた

とりあえず、話を聞く為に2人を家に招き入れた

蛇と蛙ってお茶を飲むだろうか

自分の分を含めて3杯、お茶を煎れる

お茶菓子も出した方が良いのか迷うが、何も出さないのも味気ないので団子を用意する

居間に戻ると、机の上に蛇と蛙が並んで待っている

何も知らない状態だったらかなり驚く状況だ

「で、何か用なのか？」

煎れたお茶と団子を置きつつ訊いてみる

『何の用って、用が無ければ来ちゃいけないの?』

諏訪子（蛙）が器用に湯のみを持ち一口飲む

『今が何月か分かるかい?』

神奈子（蛇）が尻尾で串を持ち団子を食べている

「今? 今は……確か……」

『神無月だよ。神が出雲に集まる月さ』

思い出そうとしていると、神奈子が先に答えを言ってしまう

訊いた意味は何なんだ?

「ああ、そうだったな。で、それが?」

『あんたも神なんだから来るのが道理だろう? だってのに、待てど暮らせど来やしない』

『で、今回も来ないだろうなーって思って、だったらこっちから迎えに行けばいいんじゃないかってなったんだ』

成程、迷惑だ

「俺は神になった事を認めたくもりは無いんだけど」

『認めようと認めまいと、祀る人達が居て祀られる対象が居れば何を言おうとアンタは神なんだよ』

個人的には暴論に聞こえるけど、神の間では常識の範疇なのかも知れない

だったら仕方ない、大人しく行こう……とは、ならない

「悪いけど、忙しいんだ。さくやの寺子屋の事もあるし」

決して忙しくは無い。半ニートだし

いや、違う。俺は専業主夫なだけだ。でもさくやの事は本当

『忙しいって、さつき凄く暇そうにしてなかったかい？』

見られていたらしい

「それでも、うちの娘が寺子屋に通っているのは事実だから」

『娘ってあの時の赤ん坊でしょ？ 今いくつ？』

「もうすぐ6歳になるな」

言われてみれば、さくやの誕生日が近い

何かプレゼントを考えなくちゃな

『だったらさくやちゃんだけ？ 一緒に連れてきちゃえば？』

さらっととんでもない事を言うな

『ちよいと諏訪子、何言つてんだい？』

日本の神が一堂に会する場所に人間の子供を連れて行けと？

『どつとでもなるでしょ。ほら、あのきーちゃんもよく赤ちゃん抱いてくるし』

まずきーちゃんが誰かが分からない

『あれは子供を守る神だから許される事だろう。灰刃は……子宝の神だったね』

面倒くさい事が起こりそうな予感、いや予感じゃないか

『ほら、子宝の神が子供を連れていても不自然じゃないでしょ』

まず妖怪が神になって、それが子宝の神って事が不自然だと思う

「……………はあ。分かったよ。行けば良いんだろう」

人間……………いや、妖怪も諦めが肝心だ。……………今は神か？

『良かったねー。これでようやく守矢の神が揃って出席できるよー』

出席って、同窓会みたいなノリなのか？

「それはそうと、何でそんなに縮んでるんだ？」

今の今まで訊けずにいた事を訊いてみる

『これかい？ 私たちはもう出雲にいるからね。アンタを呼びに行く為に貸して貰っているんだ』

誰に貸して貰っているんだ？

素朴？ な疑問を抱きつつ、帰っていく蛇と蛙を見送る

今日はさくやを迎えに行きつつ、しばらく休む旨を伝えよう

つと言つ間に出雲の目の前辺りまで来ていた

スキマを使えばすぐなんだけど、目的地は行った事が無い場所なので近くに適当にスキマを開いた

どっかの神社らしいけど、諏訪大社の前例がある。あの時以来あまり神社仏閣には近付かないようにしていたのが仇になった

「どっかしたの？」

「いや、何でもない」

いきなり「あ」とか言えば疑問に思つのも不思議じゃないか

今はさくやを背中に乗せて飛行中

時折人間に見られるけど、時期が時期だけにどっかの神だと思われているっぽい

別に姿を見られちゃいけないってルールは存在しないので、かなりおおっぴらに飛んでいる

1時間程、空を飛んでいくと目的地が見えてくる
かなり大規模な神社だ

「あそこに行くの？」

「らしい。ああ、面倒になってきた」

「父さんの場合は初めからでしょ」

さすが俺の娘、良く分かっている

神専用の入り口から入ると外から見たよりも遥かに大きい部屋が広がっていた

和風な畳張りの部屋に入ると、いるわいるわ

人間にしか見えない姿の神やら俺みたいに翼を持っている神、頭が動物になっている神もいれば動物そのものな神

それらが床に座って酒を酌^くみ交^かわしている

大部屋にたむろっている神々を見回していると、そこにいる神たちの視線が一斉に俺に向く

その見られた状態でひそひそと話し出す

聞こえてくるのは

「アレは妖怪か？」

「妖気を放っている、妖怪なんじゃないか？」

「妖怪が入り込んでいるぞ」

「人間の子を連れているね」

「助けた方がいいのかしら？」

とか話している

このまま面倒な展開になるのも面倒なので、面倒だけど神力を解放する

すると「何だ、お仲間か」と、途端に興味を失ったようにたようだ

「あ！ 灰刃、こつちこつち！」

離れた所に座っている諏訪子が俺を見つけ大声で呼んでいる

他の神たちの手を踏まないように、ぶつかったりしないように注意しながら近寄っていく

さくやは当然、抱きかかえている

諏訪子の周りには神奈子と見知らぬ神が座っている

「もー、遅かったじゃない」

「呼ばれてからすぐに出るって訳にもいかないだろうが」

こっちにもそれなりに準備があるっての

「ふったっへはいでふわりな」

既にかなり出来上がっている様子の神奈子に促されて座る

多分、突っ立ってないで座りなと言ったんだと思う

「直に会うのは久しぶりだね」。それで、その子がさくやちゃん？」

戸惑っている様子のさくやは自分の名前を呼ばれた瞬間、ビクツと反応する

「は、はい。始めまして、父さんの娘のさくやです。何時も父がお世話になっています」

緊張していながらも礼儀正しい、本当に俺に似ないで良かった

そういえば、こんなに大人数……大神数？　の人……神がいる状況は初めてだったっけ？

「正確には初めてじゃないんだけどね」

さくやを預かった頃に一度だけ会った事がある程度だろう

憶えている筈はない

「で？　そちらさんはどなたで？」

先ほどからこちらのやりとりを見ながら微笑んでいる神を見ながら訊いてみる

「前に少し話したよね？　鬼子母神のきーちゃんだよ」

座ったまま軽く礼をしてくる

「始めまして、鬼子母神の鬼衣きいと申します。同じ子供を司つかさどる神として一度お会いしたいと思っていました」

「これはこれはご丁寧に、始めまして灰刃です」

余りにも丁寧な態度に思わずこっちも敬語になってしまう

よくよく見れば赤ん坊を抱いている

「正確に言えばきーちゃんは日本の神じゃないんだけど、こっちでも信仰はあるからね」

その為にわざわざ海を越えてきたのか、^レご苦労な事で

で、何でさっきから諏訪子しか喋らないかと言つと

「……………うん」

神菜子は一升瓶を抱えて寝ている訳だ

「いや、俺が育てたのは3人くらいだ。内2人は吸血鬼」

「まあ、吸血鬼？」

鬼衣と子育て談議に花を咲かせる

これが不思議と話が合う

何でも鬼衣には子供が500人程いて、更に増え続けているらしい

「そんなに多いと大変じゃないか？」

「いいえ、子供たちの笑顔を見れば大変さなんて何処かに飛んでいっ
つてしまいます」

「ああ、その気持ちは分かるな」

そんな会話をかれこれ5時間

さくやと諏訪子は既に寝てしまっている

さくやは俺の膝を枕に、諏訪子は神奈子の胸を枕に

逆に寝苦しくないか、あれ？

「でも、如何して妖怪である貴方が人間の子を育ててるのですか？」

鬼衣に俺が妖怪である事は説明済みだ

さくやがすっかりと眠っている事を確認する

「いやな、もう5年も前の事なんだが、偶然さくやの両親の死に目に遭遇してな……その時にさくやの事を頼まれたんだ」

あの時の事を思い出しながら酒の入った杯を傾ける

「初めは面倒だっと思った。けど、頼まれたからにはって育てている内に段々と、な」

話をしつつ、もう一度さくやが寝ているか確認

お約束として、実は起きて話を聞いてたってパターンが多いからな
フラグは潰しておくに限る

「とにかく大変だった。何よりも母乳の確保が」

あまり思い出したくないけど、昔に喰った騎士の中に女性が混じっていたらしい

この時代に女性騎士はかなり珍しい……ってか、まずいない筈なんだけど

その女性としての面を限界まで増やして、逆に男性としての面を限界まで減らした

結果として一時的な女性化をして、更にホルモンなんかの分泌を増やして母乳が出るようにして、と

今思い出してもトラウマものだ

一時は自分を見失いそうにもなった

さくやが早めに乳離れをしてくれなかったら、そのまま女性として生きていたかも知れない

考えただけで冷や汗が止まらなくなる

「まあ、すすくと大きくなってくれちゃってな。俺に似ないでしつかり者で」

なんだろう、酔っているのか？

色々な事を思い出しては語っている

ああ、何だか眠くなってきた

そろそろ俺も寝るか

さくやをそつと抱き上げて翼を布団代わりにさせる

見た目は刃っぱいけど、妖力を込めなければ普通の羽毛と変わらない

鬼衣はその様子を見て微笑んでいる

その次の日もただただ酒を飲んでいるだけだ

そういえば、神無月って言うんだっただ。多分、一ヶ月は続くんだろ
うな

一ヶ月此処で飲み続けるのか……キリの良いところで帰るか、さく

やの勉強が遅れるのはよろしくない

「ここ、座つても良いですか？」

不意な声に顔を向けると、赤いドレス？ を来た女性が立っていた

「ああ、構わないよ」

今、俺の周りには誰もいない

神奈子と諏訪子はそれぞれ知り合いの神の所に。さくやは鬼衣の抱いていた赤ん坊に授乳する所を見に行ってしまった

やっぱり母親が必要なのかも知れないな

「始めまして、秋静葉^{あきしずは}、紅葉の神です。貴方は灰刃さんですよね？」

「確かに俺は灰刃だけど、どっかで会った事でもあったか？」

俺の記憶が確かなら初対面の筈だけど

「色々噂は聞いてましたから」

神が知れる噂って言うと、発信源は神奈子が諏訪子が

碌な噂じゃないんだろうな

「ある日いきなり祀られて神になったって、一部で有名ですよ？」

「それは自分の意思じゃ無い」

突然過ぎて驚いたのはこっちも同じだ

「どんな人が神になったのか興味があったから来てみましたけど、
どうやら元人間って訳じゃなさそうですね」

何で昨日、鬼衣に説明したばかりの事を訊きに來るんだ

「俺は元妖怪、以上」

「そうなんですか。どうして妖怪が神になったりしたんですか？」

説明が面倒だからこそ、以上と切ったのに

「それ、説明しなきゃだめか？」

「神には娯楽が必要で、その為の集まりなんですから話して下さい」

ああ、そういう集まりだったのか

ただ呑みあかしているだけの集まりかと思っていた

秋はにこやかにこっちを見つめている

暗に話さないところから離れないと語りかけているみたいだ

仕方ない、面倒だけど話すか

「長くなるから秋も呑め」

「あ、静葉と呼んで下さい。妹がいるんで、混同しないように」

言いながら杯を持ち、注いで貰う体制になる

手酌させるのもどろつかと思ったので、注いでやる

話をしながら今日も夜が更けていく

神無月（後書き）

確認してみれば、今年はまだ2回しか更新していないorz
そして勿論、次回更新は未定です
気長にお待ち下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3513/>

東方増減記

2011年9月6日00時15分発行